

「コズモ」改題

UFOと宇宙 第12号 昭和50年6月1日発行 半年6回刊 第2巻第12号

昭和50年2月28日国鉄首都特別扱承認誌第2170号

UFOと宇宙

UFOと宇宙科学の専門誌 ……

UFOs & SPACE

隔月刊.1975

6月号 **NO.12**

甲府市にUFO着陸！

着陸した円盤と宇宙人を目撃！
驚異的事件の真相を公開！

オーストリアの光るカタツムリ状物体 III 古代の天空人、エーリッヒ・フォン・デニケン

北海道で撮影されたUFO/円盤 他にも千葉県に出現！

長野県に落下した小型円盤！

UFO情報/UFO目撃レポート/科学ニュース

重力波とは何か 東北大学工学部助教授 千葉二郎

シベリアの謎の大爆発 ●連載 ソ連圏のUFO現象

イオン・ホリナシケリアン・フェウチャーソン



空飛ぶ円盤シリーズ

空飛ぶ円盤と宇宙人 黒沼健著

円盤の存在とその出発地をさぐり、古代科学と円盤についてのかかわりあいを興味深く論証す。 三四〇頁 九五〇円

空飛ぶ円盤騒ぎの発端 高梨純一著

アーノルドの目撃からワシントン上空の円盤の乱舞まで、円盤研究の歴史と成果をまとめる。 二四八頁 九〇〇円

空飛ぶ円盤の跳梁 高梨純一著

円盤の出現と共に激増する放射能。謎の物質エンゼルス・ヘア等重要にして興味ある事項を網羅。 二四八頁 八五〇円

空飛ぶ円盤実在の証拠 高梨純一著

―その科学的究明―
多くの貴重なデータにもとづき、科学的方法をもって円盤の実在を見事に証明した注目の書。 二四六頁 九〇〇円

ヒューマンノイド 空飛ぶ円盤搭乗者 平野威馬雄編

円盤着陸とその搭乗者に関する科学的究明と宇宙人の来訪、及びその活動ぶりをまとめる。 二四〇頁 九八〇円

空飛ぶ円盤の謎と怪奇 黒沼健著

円盤襲撃に関するノストラダムの大予言にはじまり、世界各地における目にもみえない宇宙人の攻撃をまとめる。 二六〇頁 九八〇円

空飛ぶ円盤とアダムスキ 空飛ぶ円盤実見記

久保田八郎編 九五〇円 GアダムスキD・レスリー 八〇〇円

空飛ぶ円盤のすべて 空飛ぶ円盤同乗記

平野威馬雄編 九〇〇円 Gアダムスキ久保田八郎 九〇〇円

アポロと空飛ぶ円盤 空飛ぶ円盤の真相

平野威馬雄・荒井欣一著 九〇〇円 Gアダムスキ久保田八郎 九〇〇円

空飛ぶ円盤は実在する 空飛ぶ円盤の秘密

A・ミンチル・由辺貞之助訳 九〇〇円 T・ペラサム・久保田八郎 八五〇円

●東京 文京 本郷5-30 振京141750●

高文社

●京都 左京 百万遍 振京23523●

高価買入!

送り先
〒223 横浜市港南局私書箱3号
横浜洋行 UFO係

- ★日本切手と沖縄切手の単片とシート(シートは特に歓迎)。
- ★業者の最高値で大量買入。
- ★外国の未・済切手(小型は不用)コレクションは大歓迎。
外国郵便の封筒よりはがした済切手も入用。
- ★その他の古い物(コイン・紙幣・マッチ票・記念乗車券・初日カバー・ハガキ類・通信省発行特印付記念絵ハガキ・宝くじ等)をお送りください。

特に求む!

郵便に使用された古い手紙の封筒とハガキ(明治初期より昭和20年頃までのもの)。他に戦地よりの軍事郵便物、戦争中の占領地(ビルマ・マラヤ・比島・ボルネオ)等よりのもの、終戦直後の南西諸島(沖縄・八重山・宮古)よりの郵便物等を特に求めます。



■誠実・親切に買入。代金はスグ送ります。

■送付の際は折れないように当て紙をつけてください。大量送付の場合はブックごと小包便で。

■買上額不満のは7日以内に返金してください。

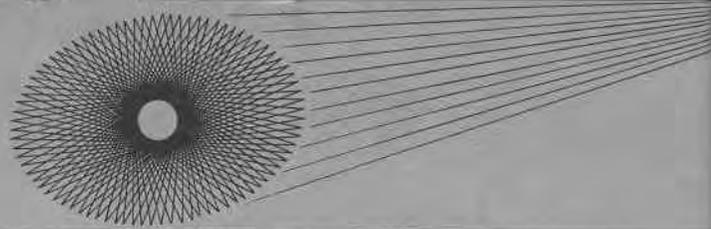


さよなら蒸気機関車 49年観光たばこ記念乗車券 おおさか

- 各地で売る記念・観光たばこの外箱をシワ・汚れ・折目のない美品のみ1枚30円で何枚でも買入。熱湯ではがして乾かし、平らにして送ってください。
- 昔の古いたばこの空箱も求めます。戦前・明治・大正時代のもの、旧朝鮮台湾のものなど、エアースリップ
- 宝くじは昭和25年頃までのもの。

宝くじ





<口絵写真> ●カラー 東京上空のUFO/円盤一帯広市に出現！
 埼玉県嵐山町で発生した怪現象一謎の飛行体を撮影！
 埼玉県入間市に現れた2機のUFO
 ここにも2機のUFOが一茨城県龍ヶ崎市で高校生が目撃、撮影

目次イラスト 松岡吉樹
 本文イラスト 池田雅行
 作 図 石坂 清

本誌特別取材

少年たちの見た宇宙人とは？ 文字の書かれていた円盤とは？

甲府市にUFO着陸！

8

オーストリアの光るカタツムリ状物体

エルンスト・ベルガー 18

周期的に伸縮する緑色の光線を放つUFOが二度も出現！

《古代の天空人》 エーリッヒ・フォン・デニケン 26

神々の戦車の著者がふたたび古代の遺跡と天空人の関係を推理する

北海道で撮影されたUFO 札幌と千歳で目撃、撮影されたUFO 2機 32

円盤、またも千葉県に出現！ 君津市と木更津市で少年が目撃、写真撮影に成功 34

長野県に落下した小型円盤！ 40

1918年の春、自宅の屋根をかすめて落ちた円盤を目撃、72歳のおばあさんが当時の模様を語る

UFO情報 <国内外の最近のUFO関係ニュースを網羅> 44

私は宇宙人？を見た 電車の中で女の宇宙人を見たと？ 中川友也 53

UFO目撃レポート——国内の目撃例を図入りで掲載 54

科学ニュース 国内外の最新ニュースを速報 61

美しい白線の軌跡！——天体観測中に出現したUFOの写真 67

重力波とは何か 強力な重力波放射機を開発した千葉助教が、世界のトップレベルをゆく理論と研究現状を解説する 東北大学工学部助教授 千葉二郎 68

原子・銀河系・理解 有名な円盤搭乗者による連載科学記事 (2) ダニエル・フライ 76

私のUFO目撃記録 詳細なUFO観測記録を写真で掲載 松岡正憲 80

<表紙写真説明> 鹿児島市のライティング・ライツ 82

<連載UFO情報>

ソ連圏のUFO現象(1) イオン・ホバナ// ジュリアン・ウェヴァーバーグ

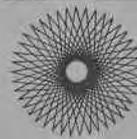
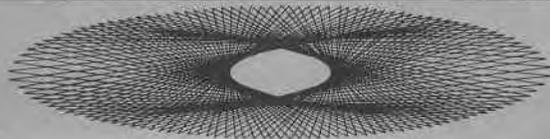
シベリアの謎の大爆発

83

隕石か、UFOによる大爆発か!?シベリアの謎の爆発をめぐる大論争

声—OPINIONS

94



東京上空のUFO



●東京渋谷区の学生・松岡正憲さん(22歳)は、しばしばUFOを目撃される特異な体験の持主であるが、昨年8月12日の午後2時40分頃、自宅上空の雲間から出現した長方形の物体を約15秒目撃し、撮影した(写真中央の物体)。この間にUFOの色が赤から黒に変化した。これは逆光のせいだろうという。高度は不明。なお松岡さんの詳細なUFO目撃記録が本号80頁に掲載されている(オリンパスペンEE-2・Dズイコー28mmF3.5にテルスター双眼鏡(30倍)を装着して望遠レンズの代用とした。・フジカラーN100)

円盤

帯広市に出現!



●1974年11月12日の昼頃、北海道帯広市の飯野義嗣君と弟の克次君(いずれも11歳・帯小5年)の双子兄弟が自宅の裏窓から空を見てみると不思議な円盤型物体がポツカリ浮かんでいるのを発見。連続4枚撮影したところスーッと雲間に消えた。現像するとたしかにUFOが写っているので、早速十勝毎日新聞社へ届けた。(ミノルタのハーフカメラを使用。露出はオート。フジカラー-N100・十勝毎日新聞社提供)

①UFOが山のむこうに下降する瞬間。手前は嵐山カントリーゴルフ場

撮影!



②オレンジ色の光体が半分沈みかかっている



③見えなくなる前の一瞬

埼玉県嵐山町で発生した怪現象 謎の飛行体を

●今年1月15日から18日にかけて東北・北関東で謎の光体目撃騒ぎがあり、目撃者の1人である全日空パイロットは流星群ではないと断言したが、埼玉県下でも17日から「変な光体を見た」という人が多数現れてUFOブームがまき起こった。翌18日にも出現することを予想した比企郡嵐山町（らんざんちょう）の小泉庸充氏（30歳・写真館経営）は役場職員の高橋康司氏（20歳）と2人で、嵐山カントリーゴルフ場の上空に出現した光体を午後5時半頃まず撮影に成功。このときは同時目撃者が50人以上もおり、飛行機でないことを確認した。ところが1月24日にも同町菅谷中学校の東方向にオレンジ色の光体が出現したのを同校体育館テラスより小泉氏が撮影し（下の写真）、続いて2月2日には再度嵐山カントリー奥の山の端に下降するオレンジ色の光体を連続撮影した（右の写真3点）。このときは小中学生15,6人が同時に目撃している。同氏は1月18日から3月上旬までに10数回UFOを目撃したという。その後この現象はバツリやんでしまった。（下の写真＝ゼンザプロニカS2・ニッコール400mmF4.5・開放・4秒・サクラカラーSII・1月24日午後6時30分に撮影。右の連続写真＝アサヒペンタックスSL・プロニカ用ニッコール400mmF4.5・開放・4秒・サクラカラーSII・2月2日午後6時55分に撮影）



●ブレハブ建築のむこう側の杉林の間にオレンジ色の光体が出現

埼玉県入間市に現れた2機のUFO

航空自衛隊員が撮影



●埼玉県入間市の航空自衛隊入間基地所属の秋元秀成氏(19歳)は、テレパシーによるUFO呼び寄せの名人であり今年4月14日までに36回成功していて、証人は計50人以上に及ぶという。この写真は今年1月25日午後4時50分に隊員宿舎の4階屋上からUFOを発見し、6時15分までの間に10数枚撮影したうちの1枚。最初青白い2等星ほどの光体が出現し、急にオレンジ色の強烈な光を放って、カメラを向けると消えてしまった。5時10分に、またオレンジ色の光体が現れ、高圧線の上空に停止。約5分間で左の鉄塔上付近に移動した。5時20分にオレンジ色の2番機が出現。2機は同時にゆっくりと移動を開始したが、その間秋元氏はテレパシーにより2番機を1番機の方へ接近させることに成功した。5時30分頃2機共狭山市方向の地平線で消えた。5時40分頃ふたたび同じ方向の高圧線付近に2機のUFOが出現。停止したのち左へゆっくり移動して丘の上すれすれに停止。5時50分、突然3番機が流れ星のように現れて停止したのち、右へ移動、ジグザグ飛行して高圧線上空で停止。秋元氏がテレパシーでメッセージを求めると、1瞬間に3機が一直線に並んでピシッと体形をつくった。6時15分には3機ともパッと消え去った。上の写真は2番機(左側の光点)が出現してから撮影したもの。「UFOは我々地上の人間をあたたかい目で見守っているように思われる。我々はこれを謙虚に迎え入れる態度を保つことが必要だ」と秋山氏は語っている。写真の右端は東、左端は北東の狭山市方向、遠方の地平線は狭山の丘陵地帯を示す。使用したカメラは同時目撃者の二ノ瀬茂夫氏のもの。(キャンノンEF・135mm F2.5・三脚使用約30秒露光・フジカラ-N100)



ここにも2機のUFOが—— 茨城県龍ヶ崎市で高校生が目撃、撮影

●今年2月16日午後7時頃、西の空に星よりも大きな光る物体2個を発見した龍ヶ崎市の宮下秀樹君(18歳・当時高3)はすぐにカメラを持って自宅から外に飛び出し、連続3枚の写真を撮影した。目撃時間は10分位で、その間物体は停止していたが、飛行機らしい物が飛んで来ると、しだいに右下方へ移動して木のかけにかくれてしまった。ここにはそのうちの2点を掲載。下の写真中の左右に流れた線は飛行機らしい物の軌跡。その下方に2機のUFOが右下へ下降した様子を示している。(アサヒペンタックスSL・スーパータクマー55mmF1.8・開放・三脚使用約5秒露光・サクラカラー-N100)



目撃者、
山島君と河野君
のスケッチ

①



②



①宇宙人と、銃のように見える器具

②正面から見た宇宙人

③背後から見た宇宙人

④飛行中のUFO

⑤ブドウ畑の中のUFO(?)
母親の山島花江さんのスケッチ

⑥着陸しているUFO



③

穴を
とんで
いる
円盤



④



⑤

⑥



ちやくりくしてさすEFT

出て来た宇宙人に、小学生、肩たたかかれてびっくり!

甲府市にUFO着陸!

文字の書かれていた円盤とは?
少年たちの見た宇宙人とは?

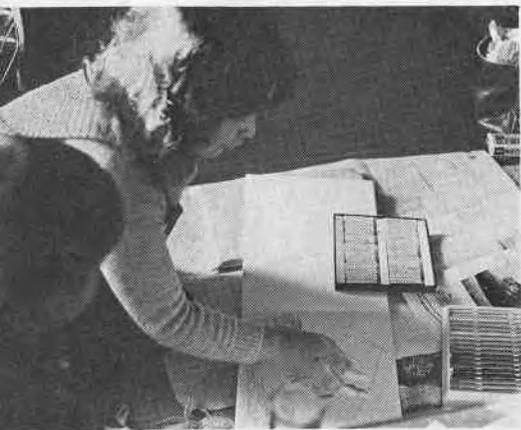
今年二月五日、山梨県の読者である井上寛一さんから電話でこの事件を知らされた私たちは、事件発生後二週間目に、宇宙人を目撃した二人の小学生の一人、山島君宅を訪れた。この記録は驚異的な体験をした二人の少年とその家族の方々から直接取材したものであり、現地で徹底的に調査したルポである。

この事件は今年(一九七五年)二月三日(日)の午後六時半頃、山梨県甲府市上町口の出団地の付近で起こった。事件を体験したのは甲府市立山城小学校(金子信吉校長)二年生、山島克博君(七歳)と河野雅人君(七歳)の二人である。

山島君の父親、山島実さん(三二

歳)の話によると、その日は実さんの義理の兄である河野俊郎さん(三七歳)正子さん夫妻の自宅に山島さん夫婦と弟さんが集まって六時頃から夕飯を食べ始めていた。そして、「子供たちは遅いなあ」とうわさをしていたところ六時半頃になって、「UFOだ! UFOだ!」と叫びながら山島君と河野君の二人が玄関に飛び込んで来た。

二人のお母さんは「何を言ってるの。遅いから早くご飯を食べなさい!」と言ったが、普段の様子と異なり、血相を変えて「本当だから来い! 来い!」と話す二人を見たお母さんたちは、だまされたと思ってついて行くことにした。表通りに出て子供たちの指差す方を見ると、たしかにブドウ畑の真中でオレンジ色に輝く物体を目撃し



●ブドウ畑に着陸したUFOの絵を描いて説明する山島君のお母さん

「。そのときの様子を山島君のお母さん、花江さんはこう述べる。
「本当に真剣だったからね、二人が飛び込んで来たとき……。だから、だまされたと思って『行こう! 行こう!』と言って河野君のお母さんと走っていったわけ。そうしたら『ブドウ畑の中を走ってみる!』と言われて指差す方を見たらすごい。くるくる回りながら光っているんです。地面から浮いているようで、光がパッと明るくなったと思うとにぶくなったりますんです。周期的に五〜一〇秒ぐらいでね。それで、光っているだけじゃわからないから、私が『見にくい』と言ったら子供たちが『いくな! 連れたいか! ちやうからいくな!』と二人して私の手を引っ張るんです。だから、そのときはおかしな



● UFOが着陸したブドウ畑で、そのときの様子を説明する山島克博君(左)と河野雅人君

ことを言うなあと思っただんですが、なにしろ本当だから河野君のお母さんに自宅まで知らせにいらしてもらったんです。河野君の弟が泣いてしまうがない

しね。そうして、早く来ればよいのになと思っただけに三〜四分たつてからお父さんたちがきたんですが、そのときはすでに光が消えかかってほとんど見えなかったんです

そして、棒を持ったおとな三人が子供たちを連れてその場所へ行って見たが、暗くて何もわからなかった。「ヒトダメも見たんじゃないのか？」などと言いながら自宅に戻ると、山島君と河野君が変な話を始めた。「お父さん、宇宙人がこんなにかっこうで降りてきたよ！」この話を聞かされた実さんは、そのとき、不思議には思ったが、二人の話に耳を傾けようとはしなかったという。

◆ 学校で大騒ぎ

翌日(二四日)、いつものように学校に行った山島君と河野君は学級会で、昨夜UFOを見た、宇宙人にも会ったと話し出した。おまけにUFOや宇宙人の絵までかいて廊下にはり出したので大騒ぎ。担任の上田みよし先生も驚いて校長先生から山梨日日新聞社に連絡してもらい、二人を連れてUFOが着陸したとみられる現場に行くこと、実際、ブドウ畑ではつるを支えるコンクリートの柱が一本折れ、もう一本はキズつき、その柱が支えている針金の網は大きく広がっていた。また、UFOが着陸したと思われる地面には穴があいていたし、またリヤカーのタイヤのような跡が二本残っていたという。そのときの様子を担任の上田よしみ先生に聞いてみると、

「昨夜本当に宇宙人に会ったと真剣になって学級会の時間に話してくれましたが、私も最初はそんな馬鹿なことか？と思っただけで相手にしなかったのですが、あまり話し方が真剣なので何かの大きなシ

● UFOによって折られたブドウ畑の支柱



ョックがあったことは事実かなと考えました。それで、新聞社の人たちと一緒に子供に案内してもらって現場にいきましたけれども、ブドウ畑の支柱が一本倒れかけていたり、鉄線が二、三本ゆがんでいたほかは何も変わったことはありませんでした。何箇所か穴もありましたが、はたしてそれがUFOの着陸した跡なのかは着陸する前の状態がわかりませんので、はっきりとは言えません」という。上田先生としては、現場の模様を冷静に客観視してお



●日の出閉地

られるが、二人の子供の性格を、山島君は普通の児童であるし、河野君にしても発想の豊かな子ではあるが、二人ともウソをつくような子ではないと述べた。また、二人の話に食い違いが起らないのは真実のことを話しているからだとも言われる。

◆空飛ぶ円盤ブドウ畑に着陸

二月三日、この日は日曜日であった。小学校の二年生である山島君、河野君ぐらいの年ごろでは、一番遊びたい盛り。その例にもれず二人は、あたりも暗くなった六時過ぎになっても、河野君の家に近い日の出閉地の敷地内でローラー・スケートをして遊んでいた。そのときである。東の方向（達沢山の方向らしい）にオレンジ色に輝く二個の光体が見えた。不思議に思った二人はその方向に目を向け、それが大小二つのUFOであること、そして、自分たちの方に向かって飛んで来ることを知った。やがてそのUFOは二人のいる日の出閉地上空を大きく一回りするると山島君、河野君の頭上にやって来た。そのとき、UFOの底中央から

●UFOは正面の雪をかぶった山から飛んできた

円筒状の物がガチャン、ガチャンと二回音をたてて出てきた。それを見た二人は初め鉄砲のような武器でねらわれていると思い、近くの墓地にあわてて逃げた。墓石の影に隠れながらUFOの行方を見守っていた山島君と河野君は「大きいUFOが愛宕山（愛宕山）に行き、も

●墓地に隠れた雅人君(左)と克博君 目測によるUFOの大きさを示す



う一機はブドウ畑の方に行って見えなくなった」という。UFOは行ってしまったと思った二人は河野君の家に帰ることにして道をもどった。すると前

方六〇〜七〇メートルのブドウ畑の真中で、オレンジ色に輝くUFOをまたも目撃した。
好奇心の強い年ごろでもあり、恐怖心もなくその物体の近くまで行き、およそ五分間この物体をじっくり観察した。

◆円盤には文字が書かれていた

まさしくこの物体は空飛ぶ円盤の形をしていたらしい（8頁参照）。二人

に描いてもらった絵をご覧いただき、二人の話によるとこの円盤の大き

日の出の火

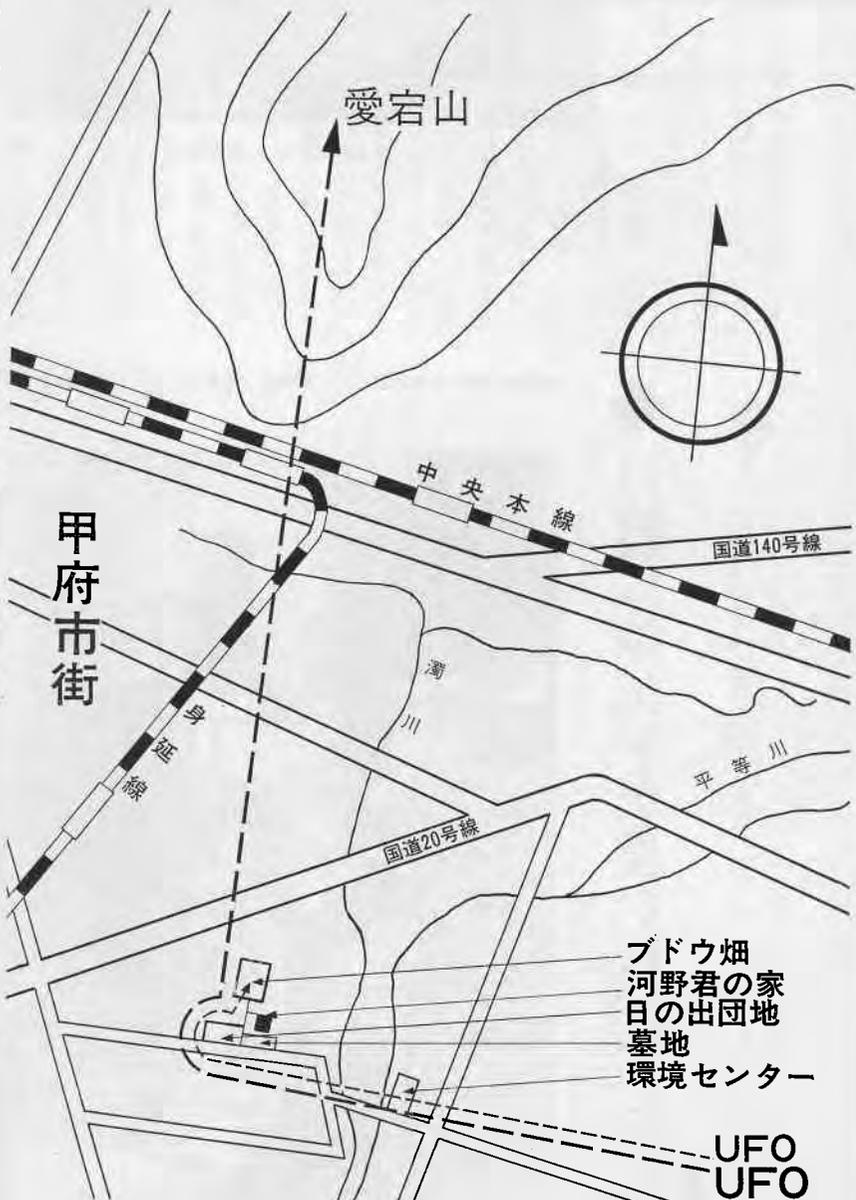
さは普通の乗用車程度で、幅が二・五メートル、高さ一・五メートル（山島君が右腕を高く差し上げたぐらい）あった。船体はしつかりと地面の上に接している。円盤の底には半円球の着陸ギヤが三個あり、その高さは約二五センチメートル（河野君のひざ下ぐらい）ある。青く輝く窓は四角で、船体を一回りしていた。船体の上部はドーム型をしている。船体の色は銀色だった。音などは聞こえなかった。見ている途中で砂が舞い上がったという。

●円盤に書かれていた文字

ここで特におもしろいのは、二人が円盤に書かれている文字を見ていることである。河野君

●2機のUFOが通ったコース

は円盤を見ていたときにこの奇妙な文字に気付いて、よく覚えていたらしい。この文字について河野君は「黒い文字だった。シールをはったように少し浮き出ているようだった」という。最初、河野君は七歳の少年らしく、この文字を「円盤」という意味に解釈した。ところが、文字はこれだけではなかった。この文字の書かれた反対側の船体にも文字が書かれていたのだ。こ



●手を伸ばして円盤の高さを示す二人



UFO
UFO



これは円盤の周りを二回りした山島君が覚えていた。「Aを書いて、つながってBを書いてC、わからない」と言いながら書いてはみたが、どうもはっきり覚えていないらしく、半分は形に

ならない。

ここで、UFO写真集を出して中から似ている物を捜してもらうことにした。すると九ページに載っているアメリカのセントジョージ付近で撮られたカラー写真を見て驚

くように、

山島君「ぼくときのお！ね、お父さん」(父親の突さんに本を見せる)

河野君「あ！本当、これ、この色だった！そっくりだ

！」(本をのぞき込んで)と言出す。

二人の見たUFOはこんな色(オレンジ色)をしていたようだ。次に私たちは、今までの話からアダムスキー型円盤に近い型をしているように思え、その型の写真を見せると、ドーム頂上の球体を指差して、

河野君「こんな物はない。丸い窓でなくて四角い窓。底の真中はこんなに大きな物じゃない。これと

●円盤に書かれていたもう一つ別の文字

同じ着陸ギヤが三個あった」とい

う。

◆宇宙人に肩をたたかれる!

二人はしばらくの間、円盤をながめていた。河野君は船体にかかれていた文字をながめていた。山島君は船体を一回りして河野君の反対側で……。ちようどそのとき河野君が見ていた文字のとなりにあったドアが開きだした。河野君「大きな方の宇宙人が降りてきた」

それは飛び降りて来たの。それとも階段があったの?

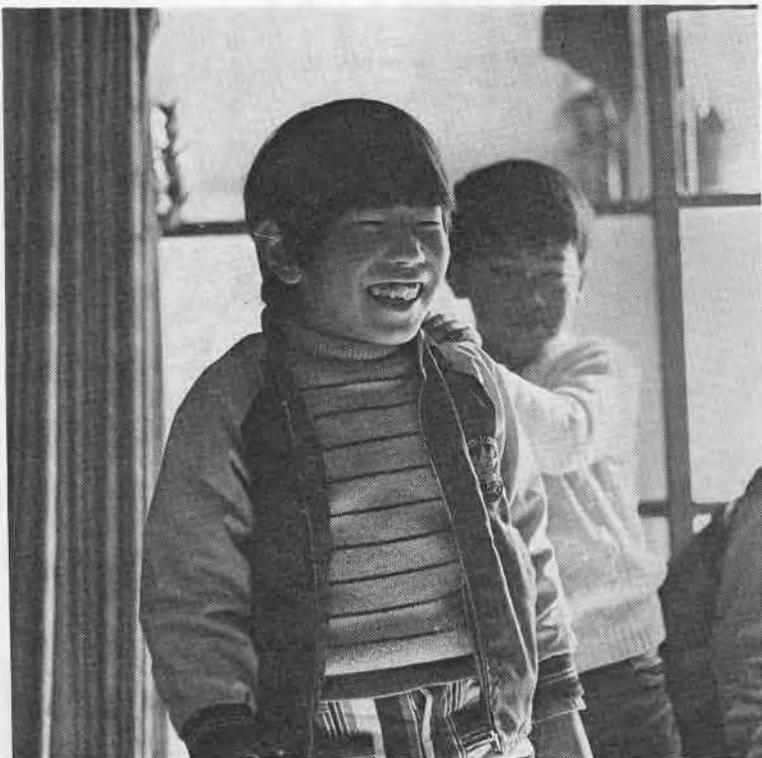
河野君「階段から。ドアがボタンと倒れて階段になっていたの」

——ドアが開くときに音がした?

河野君「ガチャ、ガチャとカギを開けるような音がした」

——宇宙人の歩く音は聞こえた?

●宇宙人に肩をたたかれたときの様子を実演する山島君





●円盤の内部を描いた絵

山島君は肩をたたかれ、驚いてすぐんでしまったので、死んだまねをしていた。そして、目をあけて宇宙人の様子を見ると歩きながらあちこちながめていた。その歩き方が速かったという。そうしているうちに河野君が助けに来て「おぶされ！」と言われておぶさってブドウ畑から逃げた。山島君を降ろして振り返って見ると、開いたドアから円盤の内部をのぞくことができた。その内部の光景を絵を描いて説明す

た。山島君は肩をたたかれ、驚いてすぐんでしまったので、死んだまねをしていた。そして、目をあけて宇宙人の様子を見ると歩きながらあちこちながめていた。その歩き方が速かったという。そうしているうちに河野君が助けに来て「おぶされ！」と言われておぶさってブドウ畑から逃げた。山島君を降ろして振り返って見ると、開いたドアから円盤の内部をのぞくことができた。その内部の光景を絵を描いて説明す

●絵を描いて説明する河野君(左)と山島君(右)



河野君「聞こえなかった」
 山島君「知らなかった。ガチャ、ガチャという音は聞いたけど」
 河野君「ちょうど裏の方で山島君が宇宙人に肩をたたかれた」
 山島君「山島君はどんなかっこうでたたかれたの？」

山島君「右手に銃みたいな物を持って左手でこうして二回たたいた」(13頁写真参照)
 山島君「肩をたたかれて、山島君はどうしたの？」
 山島君「こういうふうに腰を抜かした。急にたたかれたからね」
 山島君「それからどうしたの？」
 山島君「河野君がほくに『逃げろ!』と言った。でも『逃げれん!』と言った」

◆二人の見た宇宙人とは？

この事件において二人が最もよく記憶していると思われるのは、どちらも宇宙人のことらしい。二人にとっても宇宙人は最も興味ある対象なのだろうか……。

実際、宇宙人の話になるとこと細かく話してくれるし、身振り手振りで説明する。二人から話を聞いてみよう。(絵をかきながらの説明)

「宇宙人はどこから現れたの？」
 河野君「ぼくが見ていた円盤の文字のとなり」
 山島君「……」
 河野君「……」
 山島君「……」
 河野君「……」
 山島君「……」

二人は最も興味ある対象なのだろうか……。

実際、宇宙人の話になるとこと細かく話してくれるし、身振り手振りで説明する。二人から話を聞いてみよう。(絵をかきながらの説明)

「宇宙人はどこから現れたの？」
 河野君「ぼくが見ていた円盤の文字のとなり」
 山島君「……」
 河野君「……」
 山島君「……」
 河野君「……」
 山島君「……」

機械類がびっしりあった。また、窓からは内部を見ることはできなかった。二人はこうして、逃げ出したい気持ちを押しえながらもおそらく三分間ぐらい見えていたが、円盤内部の宇宙人が自分の方に顔を向きかけたので恐ろしくなって一目散に逃げ帰り、河野君の家に飛び込んだという。



●宇宙人のまねをする山島君(左)と河野君(右)

る。写真参照)

——宇宙人の大きさはどのくらい？

河野君「おばあちゃん立って！ おばあちゃんのお母さんに立っていただき、計ってみると約一三五センチメートルあった」

——円盤の中にいた宇宙人は？

河野君「ぼくの首あたり」（どうも河野君はイスにすわっている高さを表わそうとしているようだ）

——宇宙人は何か話さなかった？

山島君「テープレコーダーのキュー、キュー、キューというような声……」

——日本語は話さなかったの？

河野君「しゃべらんかったよ」

山島君、河野君は宇宙人に話しかけられたが、意味がわからなかったらしい。それでも二人はあいさつをされたのではないかと思った。

たい？

河野君「洋服を着ていたみたい。背中がチャックのように……」

——手はどんなふうになってたの？

河野君「手袋みたいになっていた」

——指が四本しかないんですか？

河野君「そう」

山島君「ぼくが肩を触られたとき、四本だった」

——手にかかれた方の黒い横線はどほこしていなかった。

——右肩に鉄砲のような物を持っていたが、それを二人に向けて害を与えることはなかった。

河野君「ベルトは灰色」

——ベルトをしていた？

山島君「してたよ」

——足の指は見なかった？

河野君「見た。歩いて来るときによく

——顔は何色だった？

山島君「茶色」

茶色の顔に横の波線を黒く描いたのは、二人によると小指ぐらいの太さの凸部分であるらしく、また仮面をかぶっているように見えたといい。また、口らしきものは見えず、口があると思われる所に三本銀色のキバがあった。

河野君「体の色は銀色」

——それは何か着ているみ

見えた。指が二本……」

——足にはクツをはいていたの？

河野君「うん」

そして、仮面と服は離れてなく、つながっていた。耳はウサギのように大きく真中あたりに穴が開いていた。

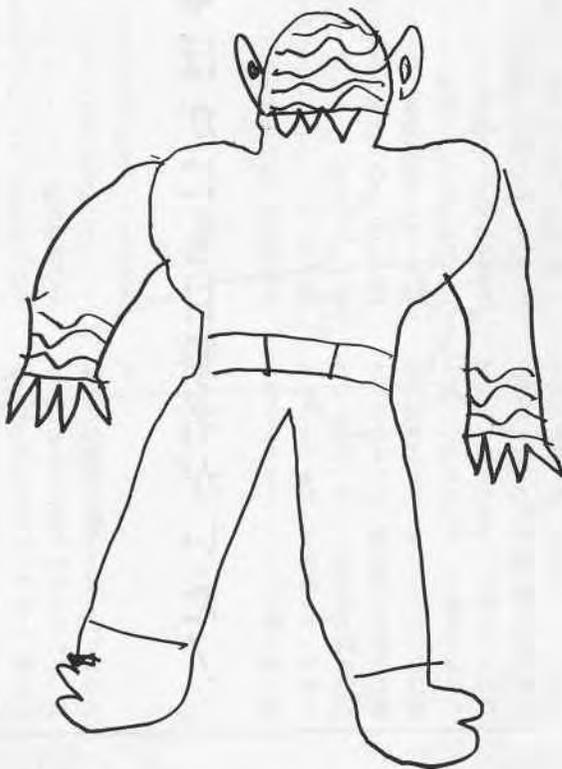
このように二人の宇宙人に対する観察は非常に細かく、またよく記憶している。この要因は二人があまり恐怖心を起こさず、私たちが思っていたよりは長い時間冷静さを失うことなく観察することができたことによるものではないだろうか。そして、二人の話には

何か一貫したものがあり、質問には常にきばきと答えた。私たちが間違っていた解釈をすれば、それを訂正させようとした。二人の性格は明るく、対談中には笑いが絶えなかった。

山島君のお母さん、花江さんは二人の話に対して次のように述べた。

「子供のことだから、そう何日もウツをつくことはないし、親だから、ウツを言えばわかります。親バカかもしれないけれども、ウツをついているとは思えません。私たちが宇宙人を見ませ

●宇宙人の絵





●目撃者の厚芝君夫さん(34)と妻の美子さん

んが、円盤が飛び去った跡のような光る物を見ましたし……。二人の話し方が本当に真剣だったから……。まじめに話す子供を疑うのも子供のために良くないと思わしてね」

また河野君のお母さん、正子さんは子供に「お母さんはね、『宇宙人はいない、いない』と言ったのにいたじゃないか!」と言われてこまっまっている。

そして、山畠君のお父さん、実さんも次のように述べた。

「私も二人が『UFOだ!』と言って飛び込んできたときには信じられなかったんですが、女衆たちが迎えにきたのでウソじゃないだろうと思って行ってみただけです。もう真暗で何もわからないし、私たちもUFOの光だけだと思っただけでそれ以上は調べなかったんです。翌日になって学校の先生や新聞社の人々が調べに行っていたようですが、今になって考えると、あのときにもっとよく調べておけば証拠があったかも……」

それにしてもUFOが飛び立つのをだれも見えていないのが不思議なんですけどね。子供たちが言うには、逃げるときに振り返って見たら外にいた宇宙人が乗り込むところだったそうだから、きつと知らせてきていたときには飛んでいってしまっただけで、あとに残った何かの光を私たちが見たのでは……」

最後に実さんは、「子供の話を聞くかぎりではウソを言っているように思えないし、珠算塾に行

くのにも五時の部となると暗くなるので、また宇宙人が出るとこわいからいやだと言いつつ、何か恐怖心を持っていてるように思えるんです。ですから、子供の将来のこともある

◆ほかにも目撃者がいた!

私たちは現場調査の帰りに河野さん宅に立寄ることにして、いろいろと話を伺った。そしてほかにもUFOを目撃した人が多数存在することを知らされた。私は、重要な証拠と考えた環境センター(河野さん宅から東に三〇〇メートル)の管理をしている厚芝君夫さん(三四歳)を尋ねた。すでに六時を過ぎて、あたりもだいぶ暗くなっている。今年二月三日の円盤着陸事件のことを話すと、身を乗り出して、「実は私もそれを見たんですよ」と話し出した。

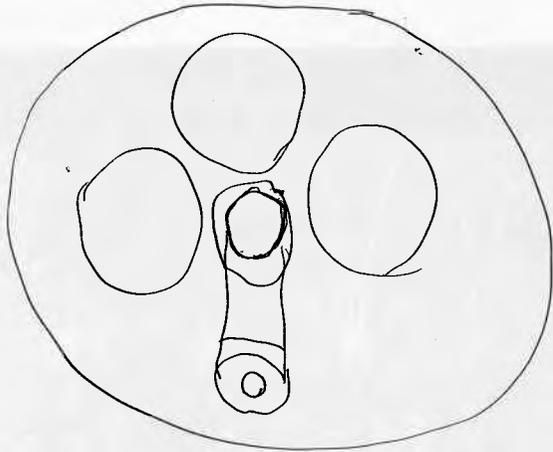
「あれは何時だったか? 六時半頃だったかなあ。ちょうどこのくらいの暗さだったなあ(時計を見ると六時二十五分)。犬が吠えるので、ちょっと外に出たんです。工場まで見に行くと戻って来ると(東の方を指差して)その工場の屋根から出てきたんです。それからその建物の屋根に隠れてしまったので、いそいで見通しのきく場所まで行って見たんですが、見失ってしまっただけですよ。そうして西の方を見たら

しね、子供の話を興味本位で報道されるのは子供がかわいそうだし、私たちもそんなふうに書かれたくないし、真剣にこの事件を取り上げて欲しいのです」

一番星よりももっと大きく輝く物が見えるんですよ。それがカチャカチャ光りながら、ゆっくり北の方向に動いているんですよ。飛行機でもないし変な物があるなあと思いつつ、しばらく見ていたんですが、夕食をすませた家に入ったんです。それから、ものの五分もしないうちに窓を開けて見るともう何も見えないんです。

私が初め見たときはものすごい速さでね。黄色い光体が尾を引きながらスゥーと屋根に隠れてしまったので、流星かなあと思ったんですが、流星にしては変だなあと考えたんですよ。役所の人も同じ物を見たなんて言っていました。『流星だろう』とも言っていましたよ。それでも不思議な物を見たなあと思っただけで、翌日になってあの騒ぎでしよう。小学校二年生の子がウソをつくとも思えないし、やはり私の見たのがUFOだったとは……」

その他、日の出団地に住む土橋由美子ちゃんという女の子も、その夜家のベランダからUFOを目撃している。



付記

今回のこの事件は小学校二年生というまだ幼い少年たちが体験したものである。写真という証拠もなく、詳しい様子などは二人の少年の証言に頼る外はないが、少なくともそのときその場所には彼らが目撃した物と同一と思われるオレンジ色に輝く何かが存在していたことは親ではあるが二人のおとなが確認をしている。また、本文にも述べたとおり、何人かは同じ時刻にオレンジ色の光る星のような物が現場付近に向かって飛んでいるのを目撃した

と証言している。

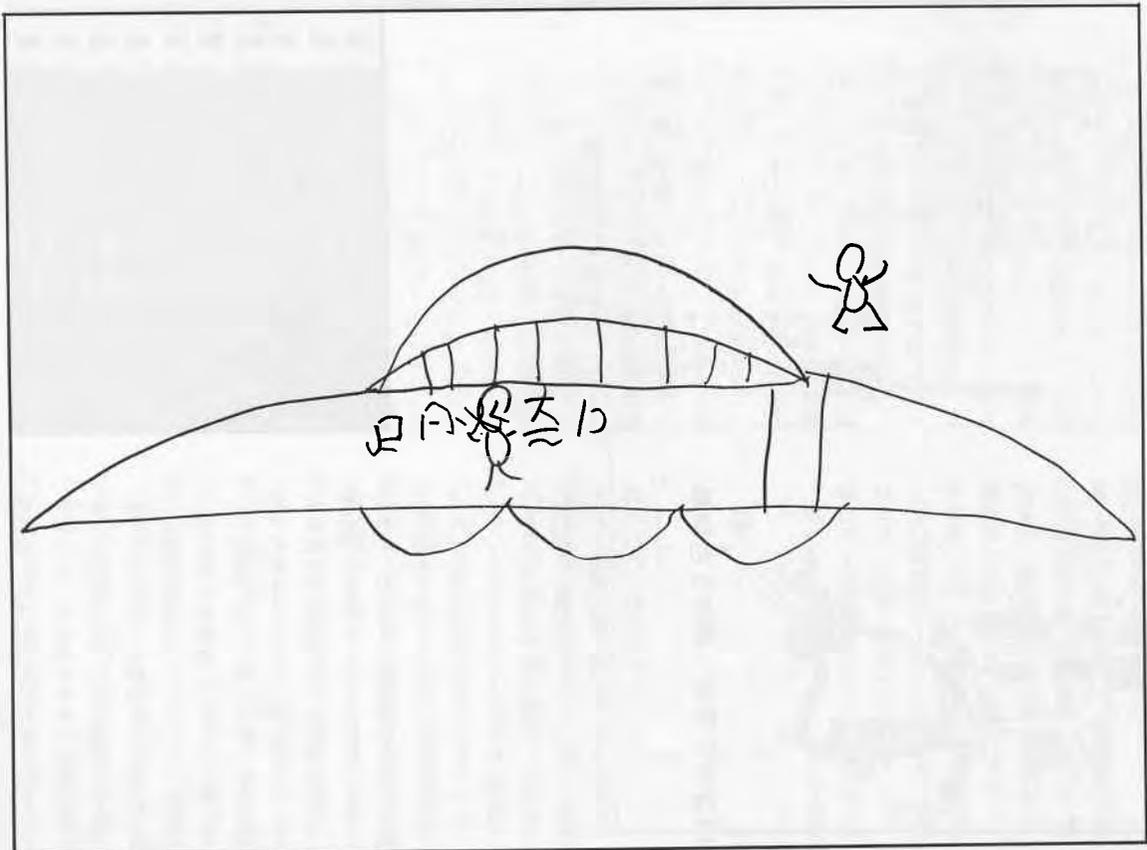
円盤に書かれていた文字など、世界的にも極めて重要な内容を含むこの事件は、特異なケースであるにもかかわらず目撃者に恵まれているが、その後、練馬に住む読者から次のような報告があった。

△二月二三日夕方、自宅(都内練馬区)において二〇〇ミリの反射望遠鏡で天体を観測中、六時四〇分頃にオレンジ色に輝く、星よりも大きな物体がオリオン座から北の方向へものすごい速さで飛んでいくのを発見、それを見失った後二、三分して今度は西から東へ同じようにすごい速さで飛んでいるオレンジ色の光体を確認したが、やはり数秒間で見失った。甲府市の事件は後で知ったが、私の見た物があの事件と関係があるかもしれないと思っただけで報告をした

●山島君と河野君が見た円盤の底の部分。3個の着陸用ギヤーが見える

山島君と河野君が見た円盤の底の部分。3個の着陸用ギヤーが見える。物体がオリオン座から北の方向へものすごい速さで飛んでいくのを発見、それを見失った後二、三分して今度は西から東へ同じようにすごい速さで飛んでいるオレンジ色の光体を確認したが、やはり数秒間で見失った。甲府市の事件は後で知ったが、私の見た物があの事件と関係があるかもしれないと思っただけで報告をした

●絵に描かれた円盤を観察する二人の様子。手前が河野君、向側が山島君



周期的に伸縮する緑色の光線を放つUFOが二度も出現!

オーストリアの 光るカタツムリ状物体

エルンスト・ベルガー

筆者とウィーンのルドルフ・K・
パブリックによる現地調査報告

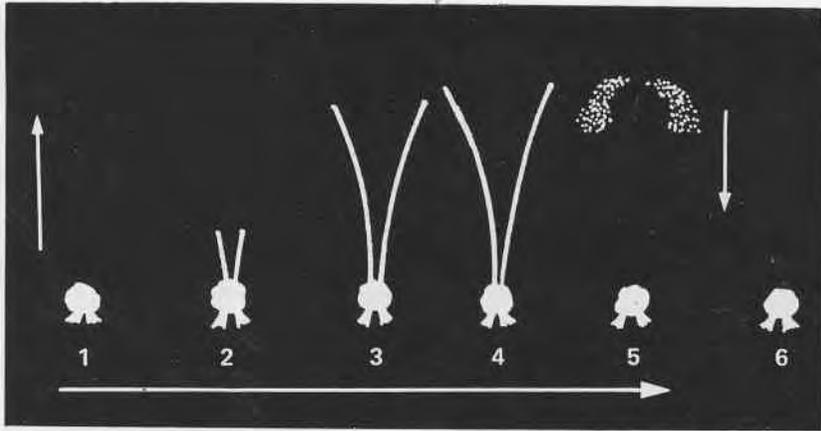
ツヴェットル地方のトラウンシュタインは低オーストリアの北西ヴァルターフィールテル高地の南部にあるオッテシュラク高地を見おろす丘陵地帯に位置する小さな町である。アドリア海の水面から海拔九一一メートルのトラウンシュタインは周囲を松林、湖、平野などにとりまかれています。この地方にはまた、いわゆる「ヴァツケルシュタイン」がゴロゴロしている。これは風化した丸い大きな岩石で、ヴァルトフィールテル地方の風物詩の一つなのである。地質学上は、変成した片岩の準平原が隆起したポヘミア地塊のオーストリア部に属している。トラウンシュタインの町はヴァインスベルク森林におおわれたヴァインスベルク山（一・三九メートル）の北東八キロメートルの位置にある。この森林はカンブ川にそったツヴェットル（中心地）に近いアレントシュタイク

演習場から南南西に二五キロ、オッテシュラクの西九キロの付近一帯をおおる住む人もすくなく荒涼とした、「オーストリアの極地」といわれるほどの僻地である。

本事件の目撃者ヨハン・ブリッツ（二一才）は、ツヴェットルにある印刷所の植字工である。弟のゲルハルトはまだ一六才だがすぐれた錠前師だ。私の見たところ二人とも口数こそすくないが、目もよく頭の働さも鋭い信頼のおける人物である。ヴァツケルシュタインにあるヴァハトシュタインとフランツオーゼンシュタインの二部落のまんなかあたり、トラウンシュタインの西側から隣村のシェーンバッハの方に向う道路の曲り角の小さな農家に、母と三人で住んでいる。

●最初の目撃、奇妙な光の信号

ウィーンのホーエ・ヴァルテ中央気象台によれば、一九七三年一〇月二八日から二九日にかけての夜、オーストリアは優勢なヨーロッパ高気圧の影響下にあった。ツヴェットル測候所の気象報告では「一〇月二八日一九時——雲量〇、無風、零下二度、雪量〇。一〇月二九日七時——雲量八分の一、無風、零下六度、雪量〇、夜間最低気温零下七度」となっている。



● “信号”、第1段階から第6段階までを示す。第4段階で“触角”の先端が緑色に変わり、第5段階では緑色のモヤが左右に流れ落ちて光は消えた。

困っていた。「ええと、カタツムリのツノのようなものでした。オレンジがかかった明るい光線が二本出てきて——ゆ

「信号」を周期的に発していました。私は八×四〇の双眼鏡を持ち出して、森の上のその光にねらいをつけました」それは輪郭のはっきりしない光球で、九度の高さの空中に静止していた。オレンジがかかった黄色の光は安定していて、まぶしくはなくむしろ「眼に快い」ものだった。ブリッツは語る。「全面が明るく輝いているので形はよくわかりませんでした。ひと目で気がつくほど明るいのが、人工光です。でもとにかく変わったってしたのは信号です」この信号というのは二本のカーブした光線で、本体から上方へゆっくりと発射された。詳細はブリッツも説明に困っていた。「ええと、カタツムリのツノのようなもの

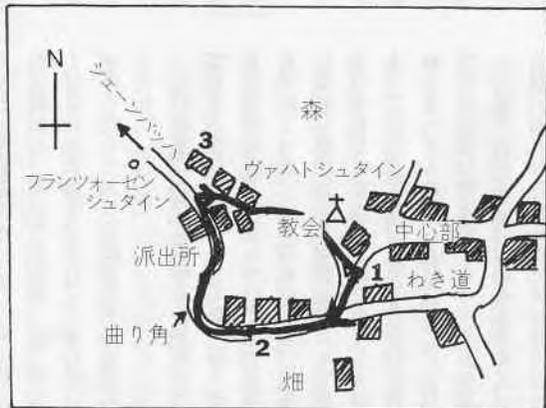
調査のさい私は、この周期を最初ははやや早目に、次はややおそ目に心の中でもう一度復元してみるよう彼にたのんだ。ストップウォッチで測ったところ光線が伸びきって先端が黄緑色になり二、三秒後に消えるまで七秒から一

つくりと上昇し——上方で外側に曲がるのです。それから動きが止まって先端が緑色に変わり、緑色のもやのようになつて横に落ちると光は見えなくなりました。それから五秒ほどたつとまた新しく始まります——周期的に伸び、止まり、緑色に変わり、消えるのです」ブリッツによればこの「ツノ」はぼんやりした光球の直径の約四、五倍あったというが、あとで現地で角度を測定した結果、彼の見積りはややひかえ目で、実際の長さは直径の六、七倍あった。高いばかりでなく「……チョークで夜空に二本の線を引いたように」はっきりしていた。光は固体のように見えなかったが固体のような動きかたをした。あんなものをブリッツは見たことがなかった。

「出てこい、南の空に不思議な物体を見ろ、と彼は言いました。私が着替えをすませて外に出ると、それはやはりそこにいました。最初は星に見えるかもしれませんが、気をつけて見ていると、ずっと近くにある星とは違った光りかたをしていて奇妙な光の

●トラウンシュタインの地図

1. 見はらしのよい地点
2. 1973年11月17日の観測地点
3. ブリッツの家。太い矢印は10月29日の観測経路



○秒かかることがわかった。続いて光が見えない暗い時間を測定したところ、これにはかなりバラツキがあった。光がふたたび発射されるまで二秒から五秒かかるのである。最長周期は約一五秒でこれは一分間にすくなくとも四回信号が現れたことになる。また短い光線が光球の下部から発して常に光っていたこともブリッツは覚えていた。輪郭の色がころもち緑、赤と変わっていたというが(二度目の目撃参照)、これは目立つようなものではなく観測者の誤認という可能性もある。目の前で見えているものがいったい何であるのか、ヨハン・ブリッツには見当もつかなかった。従来の航空機や人

冷たくはあるが星のきれいな、すばらしく視界のよい夜だった。月は真夜中すぎに沈み、火星と木星だけが見えていた。ヨハン・ブリッツは中央ヨーロッパ標準時の午後八時に床に入り、一〇月二十九日(月曜)午後〇時三〇分までぐっすり眠ってから目を覚ました。友人のカール・フィヒティンガー

が寝室の窓をたたいたのである。「出てこい、南の空に不思議な物体を見ろ、と彼は言いました。私が着替えをすませて外に出ると、それはやはりそこにいました。最初は星に見えるかもしれませんが、気をつけて見ていると、ずっと近くにある星とは違った光りかたをしていて奇妙な光の

「信号」を周期的に発していました。私は八×四〇の双眼鏡を持ち出して、森の上のその光にねらいをつけました」それは輪郭のはっきりしない光球で、九度の高さの空中に静止していた。オレンジがかかった黄色の光は安定していて、まぶしくはなくむしろ「眼に快い」ものだった。ブリッツは語る。「全面が明るく輝いているので形はよくわかりませんでした。ひと目で気がつくほど明るいのが、人工光です。でもとにかく変わったってしたのは信号です」この信号というのは二本のカーブした光線で、本体から上方へゆっくりと発射された。詳細はブリッツも説明に困っていた。「ええと、カタツムリのツノのようなもの

工衛星ではない、といって「触角」を持った星があるとも思えない。その夜流星はたくさん見えたが（オリオン座と牡牛座）、それとは全然ちがう。戸外で気温は低いし、「何も見るものがなかったら外にいられたものではありません」と彼らも言っている。

フィヒティンガーが最初にその物体を見つけたのは日曜の午後一時三〇分ごろで、近所の二人の知人にも教えてやっている。

二人は見張りを続けることにきめ、トラウンシュタインのカトリック教会を通りすぎて見はらしのよい道路ばたに立ち止まった。ここからはびっしりと樹木の茂った高地が、南と東にかけてよく見渡せた。数分後二人はふたたび歩きはじめてわき道に入り、ブリッツの家のある曲がり角を通って、ヴァハトシュタインに向かって進んで行った。「その夜はずっとその道にいて上空の出来事を観察しました」

午前二時ごろ南の空の物体は活動をはじめた。ブリッツはじっとそれを見つめていた。「空然赤い光点が光体の下部からはなれて、すごい勢いで東に飛んで行きました。飛行機があんなに速く飛べるとは思いません。（私たちが調査したとき、オーストリアのジェット軍用機が一機、明るい太陽の下で飛びまわっていた。だからブリッツの言葉は正しいと思われる）彼は更に言

う。「私は目を離しませんでしたが、その光点は突然見えなくなりました。しかしそのあとすぐにまたビカッと光りました。今度は南の空の本体と同じオレンジがかった黄色い光で、同じようにあの奇妙な信号を発しはじめました。これには驚きました」

飛行の経路がまた面白い。赤い光点は角度にして四、五度の垂直降下をしてそれからオッテンシュラクのほうへ水平に飛び、いったん止まってから消滅した。ふたたび現れたほんやりした光体は、例の信号をくりかえしながら四、五度の高度で東の空に停止した。赤い光点にははっきりした形はなく、航空機の標識灯のように見えた。（後の調査でわかったのだが）色はカーマインで、点滅はしなかった。

●六機のUFOが出現！

ブリッツとフィヒティンガーは見はらしのよい場所に来た。二つの光体は上空に静止して、母船らしいのは南に（赤い光点は母船の中から出たのか、それとも背後から現れたのかよくわからない）ブリッツは語った、光体のほうは東のオッテンシュラクの上空にいた。どちらも例の信号を単調にくりかえしているだけなので、二人は目をなして上空をひとわたり眺めまわした。目が西に向いたとき二人はもう

一度ギョッとした。巨大な物体が新しく出現していたのである。

わき道は西南に伸びている。右側に最初の家がある。屋根に電線をはわせた二つの尖塔のついた二階建の農家である。一つの尖塔の上空に黒い物体が静止していた。私はブリッツにスケッチしてくれないかと頼んだが、彼はモジモジしていた。「私は画家でもありませんし……平たい形で、戦車の装甲砲塔のように見えました。砲身がないだけです」

彼が描いたのは典型的なドームつき円盤だった。

「相当近距離でした。八時に寝たのですからお酒は飲んでいません。自分の目が信じられなくてカールに何か見えるかとたずねました。あれだ、僕が見ている物を君も見ているじゃないか、と彼は言いました。ですからこれは事実です」

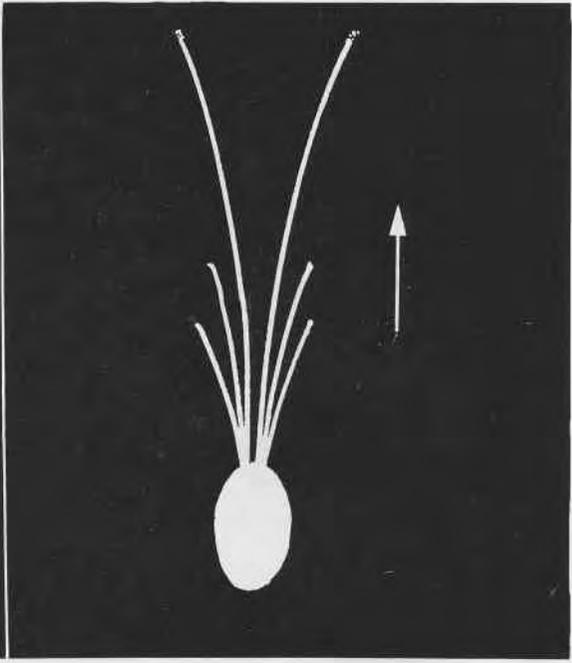
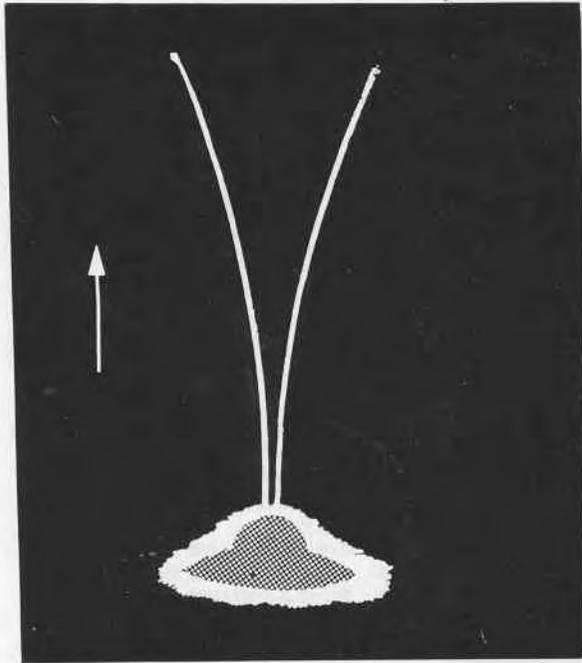
円盤については二、三新聞記事を読んだだけで、専門書など見たこともない田舎町の二人の少年にとって、これは大したものだ。上部にドームのある、輪郭のハッキリした円盤は、ボンヤリした黄色い光（円盤の背後から発しているように見えた）に包まれて地上から一七度（グラス二度）の西南西の上空に静止していた。下部は湾曲しているように思われたが、黄色い光がそだけ特強いので、はっきりとは

わからない。表面は紫色でたしかに固体の感じで、他の二つのようにぼんやりしたものではなかった。それだけではない。暗い丸屋根から二本の曲がった光線の「触角」が夜空に発射され、先端が緑色に変わって消え、また一気に入れたのである。

ブリッツは言う。「その瞬間、私はこう思いました。これは何者かが操作しているのだ。同じ信号を発しているから仲間には違いない、と」

円盤までどのくらいの距離があったのかは全然見当がつかないというが、かなり近いように思われた。あとから角度を測定したところ、距離をせいぜい二キロと見つるもと直径は三五メートルという答が出た。「長いこと待った甲斐があったとうれしかった。実にすばらしい光景だったので、東の空の物体にはもうあまり注意を払いませんでした」

その結果二人は次の動きを見落としてしまった。しばらくしてから振り返ると光体の近くには三つの小さい光球が現れていた。一つは左に、二つは右にいて、規則正しい時間をはさんでひとつながりになったり離れたたりしている。「こいつらも同じ信号を同時に発射していました」。これで全部だった。空には六個の物体がいる。ドームのある円盤は西南西に、母船は南南東に、三機の新入りを従えた光体は東の空に



●ドームつき円盤
(第4段階)

●11月17日に目撃された物体—
最初の変化の段階

である。音はちっともしないが、街の水銀灯でも見ているような明るさだ。歩くにつれて家や木立にかくれて見えなくなってもすぐに見つけられるほどだった。どれも空の南半分にあつて同じ高度にあるように思われた。北の空には何も見えなかった。

この考えはあとで検討してみたが、きわめて合理的なように考えられる。円盤までの距離を二キロ、高度を五百メートル（一七度）で他の物体も同高度とすると、光体は六キロ離れたツヴェットルの上空にいたことになり、母船までの距離は三キロということになる。

自動車が一台走ってきたのはそろそろ午前三時になるころだった。止まりはしないで二人と同じように同じ道を行ったり来たりしていた。なぜだか二人にもわからなかった。しばらくすると男が二人近づいて来た。ブリッツは言う。二人にも教えてやりましたがまるきり無関心で、ぼくたちのことをばかだと言いました。そこで結局目撃者は、ばかといわれた二人の友人だけということになった。「私たちは家々のドアをたたいてだれかを起こそうとしたのですが、だれもとりのあつてくれませんでした。酔っぱらいか何かと思われたでしょう。とにかく午前三時の田舎町は決して安全な場所ではありません。私たちも最後にはあきら

めました」

六機の物体は依然として信号をくりかえしていた。そのうち、午前三時半ごろになって光体が動きはじめ、信号も止んで黄色の光も消えた。赤い光が現れて降下し、今度は逆方向、つまり南に飛び去った。「母船に帰ってゆくぞ」とブリッツは思ったが、赤い光点は母船を通過しておそろしい速度で数秒後には西空に姿を消した。

まだ五機の物体が残って、何か知らないが仕事を続けていた。やがて一列になりんでいた三機の小さい物体がゆっくりと南へ動きはじめた。

フィヒティンガーが観測をはじめてから五時間後、ブリッツにとっては四時間後の一月二十九日の午前四時半、二人は家に帰ることにした。三機の光球は高度（百五〇度）と編隊を保ったまま南東に移動していた。母船とドームつき円盤はもとの位置にとどまったままだ。ブリッツはフィヒティンガーに別れをつけて自宅の玄関に立った。

「最後に空を見上げると、何もかもクッキリ見えていました。月曜ですから仕事に行かなければなりません。ベッドにもどりましたがもう眠れませんでした。午前六時（日の出の約三〇分前）にもう一度空を見上げたところ、もう何も見えなくなっていました」

フィヒティンガーが観測をはじめてから午前四時半までに母船の発した信

号をくりかえしていた。そのうち、午前三時半ごろになって光体が動きはじめ、信号も止んで黄色の光も消えた。赤い光が現れて降下し、今度は逆方向、つまり南に飛び去った。「母船に帰ってゆくぞ」とブリッツは思ったが、赤い光点は母船を通過しておそろしい速度で数秒後には西空に姿を消した。

号はすくなくとも千二百回、ドームつき
の四盤は五百五回、ミサイルは三百
六〇回くらいと推定される。

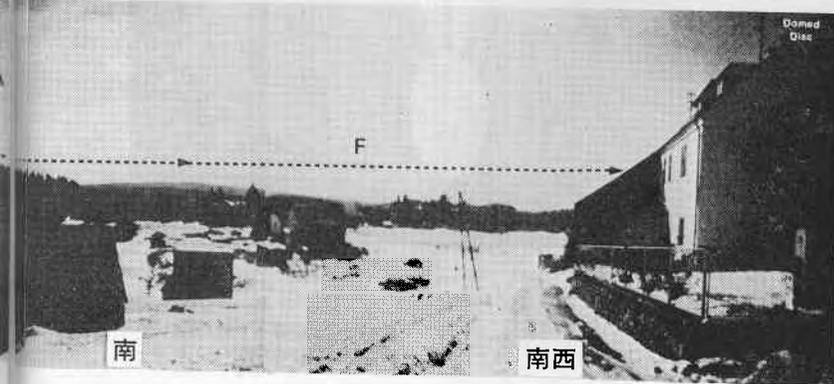
●第二の目撃事件発生

その後の成り行きはいつものとおり
だった。この体験をブリッツは印刷所
の仲間たちに話し、彼らはそのことを
ツヴェットラー・ナハトリヒテン（地
方新聞）の編集長に電話した。ORF
（オーストリア・ラジオ・テレビ放送
局）の第二放送で毎週放送されるエス
ターライヒ・レギオナルの記者も、ブ
リッツにインタビューした。放送され
たのは一九七三年一〇月二二日で、花
形記者のオシー・ヴァンカがウィーン
大学天文台長のモイラー教授の意見を
聞いた。そのうちに話はウィーンの
通俗新聞クリーアにも伝わり、同紙は
ある二流天文学者の否定的な意見を発
表した。ツヴェットラー・ナハトリヒ
テン紙の記事は、私が今まで目にした
記事の中でも最もバカげたものの一つ
だったが、一月の中ごろには噂も立
ち消えなくなってしまった。

私たちはヨハン・ブリッツと打ち合
わせて一九七三年一月一八日に現地
調査を行うことにして、よく晴れたそ
の日曜の朝、車をトラウンシュタイン
に乗り入れた。ヴァルトフェールテル
高地には雪が積もり、凍った道を走る

●トラウンシュタインのパノラマ（11月18日 の現地調査による）

- 母船一降下した
- 赤い光点の飛行経路 1
- ここで停止
- ミサイルと三機の新入り
- 新入りのゆっくりした運動
- 赤い光点の飛行経路 2



のはむつかしかった。私たちは午前一
〇時一〇分にブリッツ宅に到着した。
すしおくれたのでブリッツはもう緑
色のフォルクスワーゲンに乗って私た
ちを待ちかまえていた。彼はすし落
ちつかぬ様子で「お早うございます」
と声をかけたが、更にびっくりするよ
うなニュースを教えてください。「今日
来て頂いてよかった。昨夜また目撃し
たんですよ。私たちは頭が変になっ
たのかもしれないね」。まったくよい
タイムングだった。ほんの一五時間
前、集団による目撃事件があったの
だ。こんなチャンスは二度とあるもの
ではない。私たちは目撃者のうち四人
だけを重点的に調査することにした
（最初の調査予定では第一の目撃事件
を調べる時間しかとってなかったし、
一〇人にも達する第二の事件の目撃者
全員を詳しく調査することは不可能だ
ったからである）。

その晩はよい天気だった（一月一
七日）。英国高気圧の張り出しが中部
ヨーロッパに達し、低オーストリアで
は雨も雪も止んでいた（トラウンシュ
タインで最後に雪が降ったのは金曜だ
った）。ツヴェットル測候所の気象報
告では「一月一七日一九時——快晴
で時速二四キロの北東風、一度、降水
なし、日中の最高気温四度」となって
いる。日没は中部ヨーロッパ標準時の
午後四時一五分ごろだった。

ヨハン・ブリッツがアルベスバッハ
（トラウンシュタインの北西一五キ
ロ）の知人を訪問した後、トラウンシ
ュタイン―シェーンバッハ間のわき道
を車で帰宅したのは午後六時ちょっと
過ぎだった。シェーンバッハとウルテ
イヒシュラークの間で道は、広大なヴ
ァインスベルガー森林に向かって南に
曲がったあと今度は東に折れる。「突
然、南の木立の上空に何かが低く飛ん
でいるのが目に入りました。押しつぶ
したような長円形をしていて一方の端
を下にして立ち、前に見たあの奇妙な
信号を発射しているではありません
か。私は「まさか」とつぶやいて目を
そらしました」

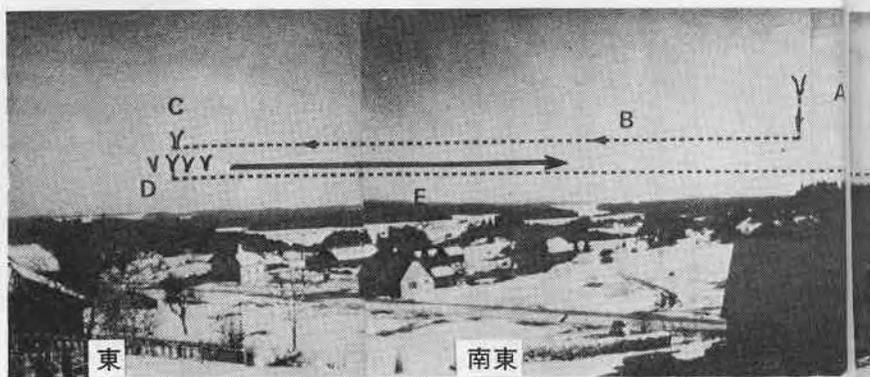
●円盤からまたも二つの触角 が出てきた

ラジオと新聞の記者会見があってか
らヨハンは、この小さな社会の中で嘲
笑を一身にあびることになった。「私
たちは酒でも飲んでいたのか、頭でも
おかしくなったのだろうか、と人は言
います。でも見たということだけで充分
です。評判などはかまいません。新聞
記事は役に立ちませんでした。人々は
極端にうたがり深く、ちょっとでも
関心を示したのはほんの少数でした。
ですから私もすべては終わりだと思
いました。また別の物体を見た」と主張し

てやはり気違いだと言われたところで何の得になりましょう」

「私はウルティヒシュラクで車から出て、物体を観察しました。やはり森の上空に静止したまま信号を発し続けています。私はもう一度車に乗り込み、午後六時一五分ごろ家に帰りました。彼は双眼鏡を取りに行つて、テレビを見ていた母にも居間の窓から外を見るように頼んだ。八×四〇の双眼鏡を持って外に出ると、弟のゲルハルトが友人のエリッヒ・ライトゲープと歩いているのに出会った。プリッツ夫人も窓から顔を出し、四人はしばらくの間その物体を見つめていたが、やがて夫人はテレビにもどった。ヨハンはもう、次にとるべき行動をきめていた。「私たちは車に飛び込むのもっと目撃者を見つげるためのトラウンシュタインの中心部に急ぎました。証人なしにはだれも私たちの話を信じてくれないことがわかっていたからです」

一五分もたたぬうちに信頼できる目撃者が六人見つかった。ヨゼフ・ハーベガー（百貨店経営者）、ハーベガー夫人、百貨店の店員一人、カール・フイヒティンガーとレオポルト・ワグナーである。それに、たばこ商のカール・トイシュルも自家用車を車庫に入れた後かけつけた。九人は曲がり角の電柱のそばに腰をすえた。そこはよい観測場所だったのである。物体は高度五



度（プラス一度）、方位二〇〇—二二〇度のあたりの上空に静止していて、その活動ぶりは彼らから手に取るようによく見えた。

「最初の夜見たのよりもっと変わっていました」とプリッツは言う。本体は長円形でオレンジがかつた黄色に明るく光っていた。光は物体の表面から発しているように見えた。私たちが角度を測定したところ、直径は二・五キロの距離なら三二メートルくらいと思わ

れる。例のドームつき皿盤が立ち上がったのだろうか。

ヨハン・プリッツの話によると、ハーベガー夫人も双眼鏡を持っていた。

「でもその必要はありませんでした。肉眼でこまかいところまで見えましたから」。あまり目立たない何本かの

「小触角」の間からは例の二本の「触角」がはっきりと伸び、前後どおりさかんに活動していた。その高さは驚くほどで——距離の推定が正しければ八〇メートルにも達した。角度で二度四〇分、これは満月の直径の約五倍にあたる。次に違う点は本体の左右の端の色が絶えず変化していることだった。

「何か溶けているようでした」とプリッツは表現している。左側の赤い光がまぶしいほど明るくなって消えると右側に黄緑色の光が現れてまた消えてしまふ。これが繰り返し続くのである。

●物体が周期的に伸縮する？！

やがて第三の、最も目覚ましい変化が起こった。「突然信号が止まり、まるでおもちゃの風船の空気が抜けるように、全体がちぢんでしまうのです。光はだんだん赤く弱くなって今にも消えそうになりました。しかし、これでおしまいかと思うと、物体はまた急激にふくらんで、しだいにオレンジがかつた黄色にもどり、ツノもふたたびは

えてきました」

説明に苦しむような活動で、オーストリアの農村に育つた彼らにはなお信じにくかつたろう。信号、つまり「触角」の動きは一月二八—九日の夜と同じで、七一〇秒でツノが伸び先端が緑色になって消え、暗黒が二—五秒間続くという具合である。しかし、縮んだりふくれたりに要する時間は違っていた。ゲルハルトとヨハンに頼んで時間を測定したところ、ちぢむ時間は三—七秒で、ふくれるのはずっと速かった。どちらの時間もだいたいまっているが、ふくれたままに居る時間はそうでなかった。ゲルハルトによれば、一分後にはちぢんでしまうこともあったし、二分間も信号を発し続けていたこともあるという。これにはヨハンもその母も同意している。

最初から終わりまで音は全然しなかったという。

正体は何だかわからないがこの七番目の物体は、大変複雑ではあるが意味のない仕事をやってのけたものだ。それにしても事件発生後数時間で調査にとりかかれたのはありがたいことだった。

観測中に一つの実験をやってみた。ゲルハルトは語った。「一人だけが物体の監視を続け、ほかの者は別の方向に目をそらしているのです。物体がちぢんで赤くなったとき監視者が『赤』



●ブリッツ宅への道路

形が変化したという報告はよく見かける。イリノイ州エルムウッドの事件（一九五七年一月四日）などは最も有名なものだろう。物体が折りたたんだように小さくなり、またブリーッと大きく変わったというものである。EM効果があり、その「卵型物体」はトラウンシュタインの物体のように明るい赤みがあったオレンジ色だったが、「折

増野一朗訳

（の光線）は（ただ消えるのではなく）物体の内部へ引っ込み、そのあとまた出て来るように見えた」
ここで言うとおかなくてはいけないが、ブリッツはフライング・ソーサー・レビューの話聞いたこともないし、英語も読めないのである。クラットウェル神父の報告をのせたフライング・ソーサー・レビューの特別号は一九七一年八月に発行されたが、私たちが注文したのは一九七四年二月のことであり、一九七三年の後半にはまだ手もとになかったのである。

不思議なことに一九五九年八月八日

ビニグニでは、第二の光の点滅が目撃された。「その間中光はじっと静止していたが、安定してはいなかった。つまり大きくなったり小さくなったりするように見えた……大きくなると光は明るくなり、小さくなると暗くなった。同じような緑色の光線が光体の下部から伸びた。光体は私たちに向かって前進したり後退したりしていたのかもしれないが、上下運動は認められなかった」
まだある。一九七三年八月のフライング・ソーサー・レビューの特別号に一九七二年七月ベルギーで起こった事

件をSOBEPSSが調査した報告が出ている。その中にエルゼルからの報告がある。農夫たちが「弓形の光線」を見たというものである。さあ、以上引用した事件を全部いっしょにしていたきたい（似たような事件はまだ他にもいろいろあるのだ）。「ゆっくりと進む、固体のような曲がった光線の束」が目に見えてくるだろう。それが「トラウンシュタインのカタツムリのツノ」なのである。

「曲がった光線」に関連して現れた「緑色に光る先端と緑色のモヤ」については前例がないが、これはいつか曲がった光線のナゾを解く鍵となるものかもしれない。

「オモチャの風船のように縮んでしま

りたたみ現象」は、繰り返されなかった。一六年後に同じような事件が起こったのだろうか？

それらがある種の「静止したままの空中戦」であるのか、それとも物体全体の連続的な動揺なのかはよくわからない。三番目の例の変化状態はあるいは単に錯覚で、「縮んでいる物体」ではなかったのかもしれない。つまり「血のように赤いドーム」が出現するまで、ドームつき円盤の上部表面の楕円状の照明が縮んだにすぎないのではないだろうか？ そうかもしれない。一つだけ確かなことがある。トラウンシュタインの目撃は事実であり残念なことには縮んで何もなくなるということではないのである。

宇宙問題探求者必読の書

★★なぜ空飛ぶ円盤は来るのか★★

フレッド・ステックリング/久保田八郎訳

好評発売中！ ￥650 円120

宇宙人から伝えられた人間の生き方を詳述
テレパシー ■ 生命の科学

ジョージ・アダムスキー/久保田八郎訳

￥400 円120

￥550 円120

文久書林

東京都文京区白山1-29-12
振替・東京2521 Tel. (813) 2495

米ARGOSY誌より版權独占

古代の天空人

エーリツヒ・フォン・デニケン



現代の文明の起源は太古に他の太陽系から来て古代の原始人と混合した天空人で始まったのではないかとエリッヒ・フォン・デニケンが考える。この宇宙の天才たちは人間の歴史において何度も着陸し、地球人との接触の結果、子孫を残したのだという。彼らは進歩した科学知識も残し、そのほとんどは時代の流れとともに失われたが、その形跡は世界中に残存する遺跡のなかに見出されるというのだ！

私は一二万五千マイルにわたる旅を続けて、その間セイロン、シンガポール、マレーシア、南太平洋、台湾、イースター島、南米などを訪れ、自分の説を裏付けする資料を探し求めた。エクスアドルでは地下二〇〇メートルもある謎のトンネルを探索して、そのなかにかつて人間が見たことのない先史時代の黄金で満ちた建造物を発見したし、中国の湖南省でも似たようなトンネル機構を調査したが、これも先史時代に大気圏外から来た人々による証拠を示していた。ミクロネシアのカロリン群島ではナン・マドールの遺跡を調査した。これは巨大な玄武岩から成るもので、それを建造したと思われる文明人のはるかに進歩した技術を用いぬ限り、運搬することは不可能な大岩石である。インカの古代の首都であるエクアドルのクンカヤベルーでは、黄金板に彫られた未解説の文字、奇妙なマー

ク、絵などを判読した。これらは「大洪水」時代にさかのぼるものである。いづこを訪れようとも、地球には太古、宇宙からの訪問者が来たという私の考えを支える驚くべき証拠を発見したのである。

宇宙空間のどこから私たちに似た知的生物が——似ているというわけは仮にその生物が、三つ目や六本指や長い耳を持っていても問題ではないからだ——超高速の宇宙船に乗って銀河系を駆けめぐり、さまざまな惑星に立ち寄って知識を求めたのだ。この宇宙旅行者たちは各太陽系に自分自身に似た知性体を作り出した。——我々の太陽系ばかりでなく、彼らの惑星の生命体に似た生命を有する惑星を発見したら、かたがたばしからそうしたので。

我々がこの惑星地球の出身であることは疑いない事実である。我々にはダウインの学説があり、私はそれを疑

●本誌創刊号から五回にわたって連載し、大好評を博した「神々の戦車」はヨーロッパでも超大ベストセラーになった。ここに著者のデニケン氏が、ふたたび古代の遺跡と天空人との関係を推理する

わない。我々は自分の肉体や脳が数百万年もかかって進化したことを証明できる。だがまだ多くの疑問が残っている。それは、なぜ、そして何のために人間は知的になったか、なぜ他の動物は知的にならなかったか、ということである。チンパンジー、ゴリラなどのサル族は人間によく似ているが、まだ森の中にいる。しかし彼らも同じ進化の年月を与えられてきたのだ。だが進化はしなかった。進化したのは人間だけだ。しかもサルと人間とのあいだには実に三〇〇種の相違点があるが、これは不可解なことである。そしてこれこそ、紀元前二万五千年ないし四万年のあいだに大気圏外から来た「人間」が、何らかの人工的な変異によって、当時存在したサルから人間の姿に似せた知的生物を創り出したのだという説を私が打ち出す理由なのである。

●ヘルメットと服を着用した人間。イタリア、バルカモニカの古代洞窟壁画。



古代に大気圏外からの訪問があった？

ここでよく考える必要があるが、私は少なくとも二回または三回か四回の大気圏外からの訪問があったと思う。最少限二回はあったろう。第一回目は

すでに述べたように紀元前二万五千年から四万年のあいだで、第二回目は紀元前三千年から五千年間のスマール以前または聖書以前の時代である。考古

学者が発見した八千年前の洞窟の壁画があるが、そのなかにヘルメットをかぶり、首のまわりに後光をもった人たちの絵がある。また紀元前五九二年のエゼキエルと車輪のような、聖書時代の神話から出た絵と思われるようなものもある。

エゼキエルがユダヤ人のグループと一緒にバビロンの人々に捕えられたときに、彼は記録を書き始めたということとを我々は知っている。現在アフリカとオーストラリアの中心部に、紀元前五九二年にさかのぼる洞窟の壁画があるが、文化のひどく異なるグループが一つの出来事によって同時代に影響を受けたと思われるのは、オーストラリアの洞窟の壁画製作者たちが目撃した出来事を描いたからである。彼らは写実主義者であり、素朴な人々であった。同じことはサハラ砂漠の場合でも言える。彼らも紀元前四〇〇年から一〇〇〇年のあいだに、宇宙からの訪問者の絵を描いたのである。これはバビロンのエタナ叙事詩の時代である。

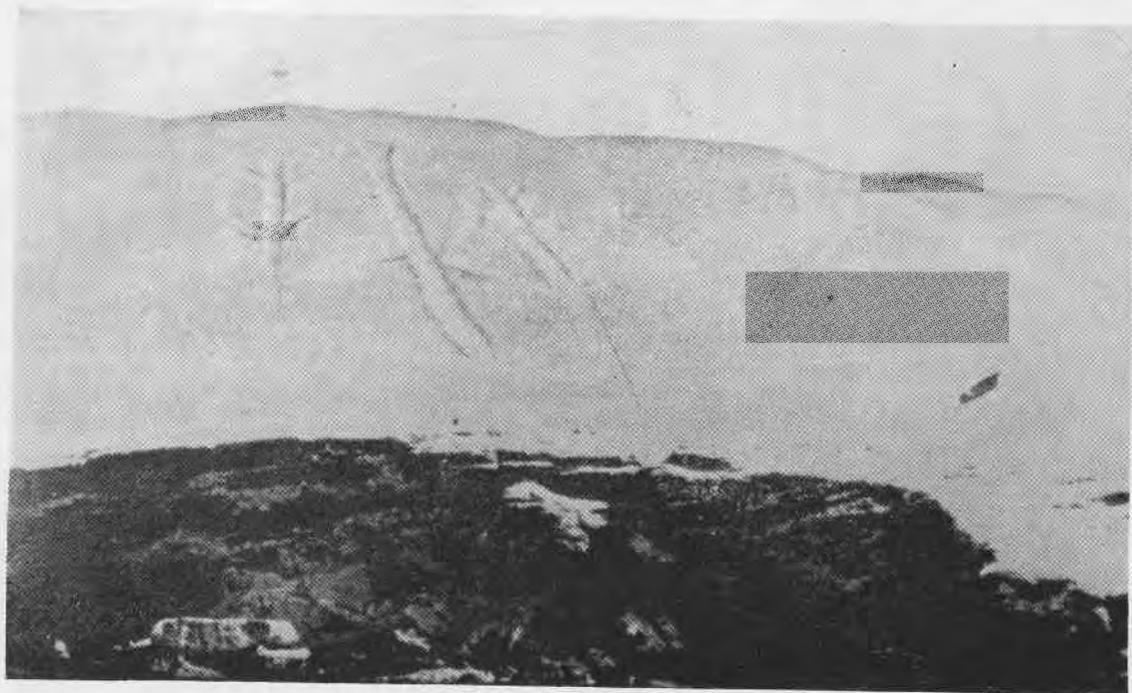
エタナは叙事詩の中で次のように言っている。彼は神々の一人によってとらえられ、惑星上を飛ばされた。その神は彼をますます高くつれてゆき、このような高空から地球がどんなに見えるかと尋ねた。そこでエタナは恐ろしくなり、神に頼んだ。「友よ、私は天国まで昇りたくはありません。どうぞ

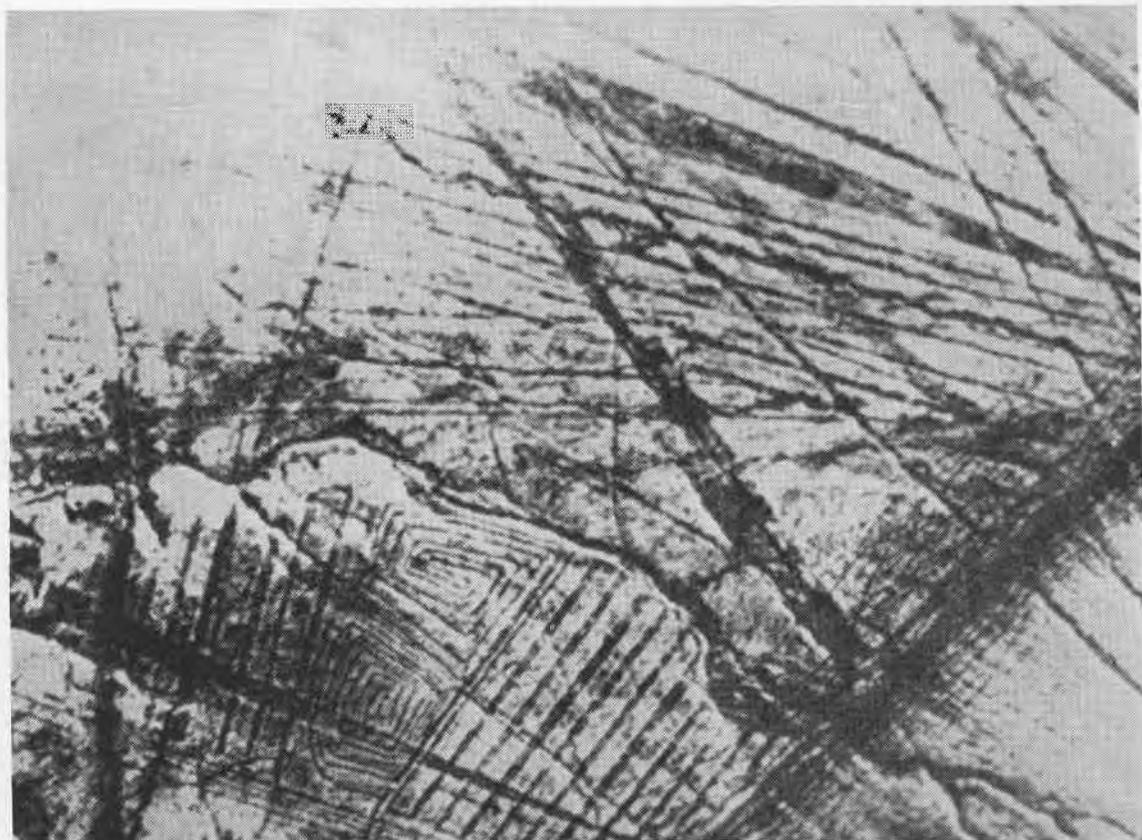
とまって、私を地球へ返して下さい」

このような乗物が地球の文化に属するものでないことはわかる。当時地球にいた多くの人々は地球の文化の程度をよく知っていたであろうからだ。たとえば今日我々はこの惑星上になお未開民族をかかえている。北辺の地で飛行機がエスキモーの群れの頭上を飛ぶとき、彼らは地面にひれ伏して神に祈るようなことはしない。その飛行機がニューヨークとチューリッヒ間を飛ばす一〇一号便であることを知っているからだ。彼らにはそのことがわかっているので、「他の太陽系から神々が来た」などと古代のやり方で文書を作ったりはしないだろう。ただ次のように書くだけだろう。「我々の文化よりも程度の高い文化がある」

この宇宙から来た人々は定期的に惑星を駆けめぐっているので、地球にもまたやって来るだろうと思う。このことは疑いないが、危険もある。彼らは他の太陽系でも惑星を発見すれば自分たちに似た知性体を創っている。これはあらゆる神話に出ている。聖なる書物のどの章も「我々の似姿に従って人間を作ろう」と書き始めている。なぜ「我々」とか「我々の」と複数形で言うのか？ 創世紀さえも常に複数形になっている。これは私の考えだが彼らは太陽系、銀河系のどこへ行こうと、このことをやっていると思う。そ

●ペルー、ピスコ湾の山腹の絶壁に刻まれた古代の奇妙な模様。上下の長さが240メートルもある。





●古代の宇宙センターの跡か？ ペルー、ナスカ平原に残る不思議な大線型模様。

のグループの一つが地球人よりも急速な進化を上げていたということなのかもしれない。そしてたぶん現在地球へ来ていると思われる人々は同じ父親を持つという意味で我々の兄弟であるのかもしれない。だが元のグループにとっては今は危険だろう。なぜなら彼らは宇宙を駆けめぐっても大きな発見を

宇宙人は証拠物件を残す？

だが私は彼らの地球への来訪を円盤の目撃と直接に結びつけるわけではない。ここではっきり言わねばならぬのは、私はUFO研究者ではないということである。したがってUFO問題で私を知っている事柄は新聞や雑誌からの二番煎じにすぎない。そんなことは私にとってはどうでもよいことだ。しかし多数の人や科学者までがUFOを目撃しているからには、彼らは皆間違っていると言うのは正しくないと思う。我々はUFOは大気圏外から来るのだという証拠を持たないが、「何か」がまわりにいるのだ。我々はオープン・マインドを持たねばならぬし、私はそれを持っている。UFOが大気圏外から来る物体である可能性を私は否定しない。UFOは何か知的なものを持っているように思えるのだ。

私が宇宙人だったら「我々はこれの時代に何光年彼方のこれこれの太

しないだろうが、五千年間この惑星で生きてきた地球人は多くの新しい発見をやるかもしれないからだ。したがって地球人が彼らを追い越すことは可能だろうが、相手が追い越されるのを望まないのにこちらが追い越すのは危険かもしれない。

陽系から来た。地球では生命体を発見したが、それをこれこれの方法で変えてしまった。我々にはなるべく早く地球へ帰って来る、等々の言葉を記録した何か破壊されないような物を残すだろう。それが金属板、タイムカプセル、録音テープなどであっても、このような証拠を作ったとすれば、それをどうするだろうか？ 高僧や政治指導者に渡して「これは五〇年後におまえたちの子孫にとってきわめて重要な物となるだろう。大切に保存して子孫に伝えよ」などと言うわけにはゆかない。

きわめて確実なのは、これを受け取った男は五〇年後に死ぬこと、次の世代は戦争をひき起こし、その勝利者が神殿や図書館を破壊することだ。これはよい方法ではない。そこで私ならこの証拠物を山の頂上に置く。すると、だれもそれを見るが、わるい時期にわ

るい世代がこれを破壊する危険はな
い。

三番目にやれる可能性があるのは、
巨大な物を建造することであろう。こ
れなら数千年間だれも破壊できない。
地球にはこの実例がある。たとえば、
ピラミッドやバールベクのテラスの地
下深い所に何かを探り出そうとして
ぞいて見た者はまだいない。

しかしこれも最上の方法とは言えな
い。地球の極が変化したり、大海に覆
われたり、大地震が発生したりするこ
とを考えねばならないからだ。最良の
方法は証拠物件を地理学的な一定地点
へ置くことであるかもしれない。地球
にはそのような場所がある。北極、南
極、赤道上のどこかの地点などだ。も
っとよいのは太陽系内のそうした場所
であろう。あるいは衛星に置くのもよ
い。だが五十年後の世代のためにこん
な証拠を残すということになれば、す
ぐれた世代がこれを探し始めるように
配慮しなければならぬ。どうすれば
よいのか？ 我々が宇宙旅行者であると
しよう。地球には聖書に出てくるエゼ
キエルやロメク、予言者のエノクのよ
うな人々がいる。そこで、起こった出
来事をこの人たちに書かせて、その中
に「過去に発生したこの不思議な出来
事は何なのか？」と記させる。

私の意見によれば、宇宙人は我々の
先祖に贈り物として、ある道具や実用

品を与えている。まるでチーズを切る
ように石を切ることでできる小さな道
具であると仮定しよう。この道具のエ
ネルギーはわずかに一〇年保つだけで、

その後はだめになるか、こわれるもの
とする。我々は今日これと似たような
ケースに直面している。我々が新大陸
へ行くと、原住民に道具類を与えるこ
とがある。斧、フォーク、ナイフなど
だ。だが、ここで私が言っている例は
わざと与えることなのである。なぜな
ら相手は我々が後になって気付くよう
なこの品物を我々の先祖に作ってもら
いたがったからだ。そうすれば後の世
代が宇宙を旅したときにこの品物が世
界中にあるのを見て、次のような疑問
を起こすだろう。「これらはどのよう
にして作られたのか？ 我々の知らな
い過去はどんなものだったのか？」そ
して考えるだろう。「我々は古代に大
気圏外からの訪問を受けたのではない
か？」と。

次に考えるだろう。「確実な証拠は
ないものだろうか？」。そして証拠を
探し始め、どこに隠してあるかと詮索
するだろう。これが現在我々の直面し
ている状態である。我々は解決不可
能な古代の遺跡や疑問をかかえている。
そこで証拠を探さねばならないのだ。

我々は他人によって創られたもので
あり、神は自分の姿に似せて人間を創
ったからには、彼らも現在の我々と同

じ問題に直面していたと思う。そこで
我々がこの証拠を発見したとき——そ
れは太陽系のどこかの地理学的な場所
にあるだろうが——、我々の過去はか
りではなく未来の事までもわかるだろ

ピラミッド建設の謎

私の新しい著書「神々の黄金」は、
同じ事柄の繰り返しであるにしても読
者に目で見える証拠を提供している。私
は新しい証拠を加えておいた。そして
たとえばピラミッドのようなすでに知
られている物を追求するとしても、こ
れは繰り返しではない。この探求に関
して新事実を加えたからである。大ピ
ラミッドはよい例である。ご存知のよ
うに、考古学者連は大ピラミッドが作
られた方法はわかったと称している。
そして「未知の道具類が存在したと言
うフォン・デニケンの空想は必要な
し」と言っている。

だが同時に、考古学者は大ピラミッ
ドが二四〇万個の石ブロックで作られ
ていることにも同意している。彼らに
よれば、各ブロックは二〇年かかって
切り出され、磨かれて、適当な場所に
すえられたという。二〇年かかって二
四〇万個の石ブロックを分割したとす
れば、一年間で一二万個になる。一年
の作業日を三〇〇日として——日曜日
を除くからだ。日曜日は古代エジプト

う。

これは現在の問題の処理法を意味す
ることになる。未来の問題も現在のそ
れと同じだからだ。我々は知性体とい
う意味では同じ種類なのである。

にもあり、ときには一〇日間の宗教的
祭日もあって、この日は仕事を休んだ
——、一日の作業時間を一三時間とす
れば、二分間ごとに一個のブロックを
正しい位置に置かねばならない。現代
でもピルを建設するのに、二分間ごと
に石を置いてみるだろうか！

しばしば聞かれることだが、なぜ確
証が出ないのかということについて私
は言いたい。「確証はあるはずだ。だ
が探さなかったので見つからないの
だ」

「しかし墜落した宇宙船の残骸のよう
なものはないのか？」と聞かれる。こ
れもたしかにあるだろう。だが我々が
探しているような場所にはない。今日
飛行機——たとえば軍用機——が墜落
するとパイロットは脱出するが、その
前に居住地域が被害を受けないような
方向へ向けようとする。だが現代の考
古学では、古代の遺物があることを確
実に知っている場所を隠したりする。
だれも砂漠や海底などへ探索に行かな
い。何を探したらよいかわからないか



●ケオプスの大ピラミッド。この写真は1974年6月14日、ニクソン大統領がギザのピラミッドを訪れたときのもの。

らだ。

実際のところ、考古学者は地球の表面のパーセントの一〇〇分の一しか探索していない。だから墜落した宇宙船の残骸のような証拠物件はまだどこかに存在しているにちがいない。我々はそれを発見していないだけだ。

頭にアンテナ状の物をつけた男の絵が宇宙人であると断言するわけにはゆかない。それはできないことだ！私は自分の説の科学的証拠を打ち出そうとしたことはない。ただ自説に適合するかもしれないような形跡を提示しただけだ。この形跡のなかには完全に間違ったものもあるかもしれない。

未来だけが、どれが間違っていて、どれが正しいかを示すだろう。科学的であることは、できるだけ真実に接近することである。

今我々は洞窟の壁画や遺跡などについて考古学的な説明を求めているが、こうした説明は二五年から三〇年も古いものである。現在、我々は新しい眼で物事を見ることができなのだ。宇宙時代の眼である。たまたま他の解釈があるからといって、この宇宙旅行時代の考え方を排除するのは科学的ではない。

もちろん他にもいろいろな解釈がある。しかし私の考え方も一つの可能性をもつ解釈である。

されたUFO

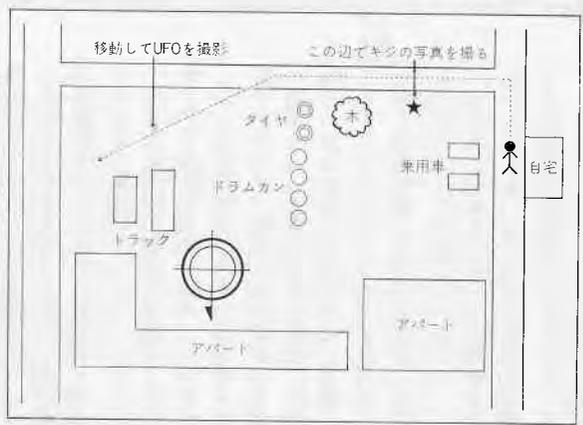


札幌市の北海学園大学に在学中のK・Iさん(19)は昨年6月末に札幌市南区の自宅付近でUFOを目撃、撮影に成功した—写真。

1974年6月30日午前4時50分頃、ラジオの深夜放送を聞き終えたK・Iさんは、外でネズミのような鳴き声をするのに気付き、窓からのぞいたところ雌のキジが見えたので写真を撮ろうと外へ出た。キジを撮影して、しばらくして東の空を見上げたところ、黒い物体が約1キロメートル先の真駒内上空200mを音もたてず南から北へゆっくりと一定のスピードで水平飛行していくのを発見、場所を移動しながら手持ちのカメラで4、5枚撮影した。なお当時は朝方のため無風状態であった(本人は匿名を希望)。

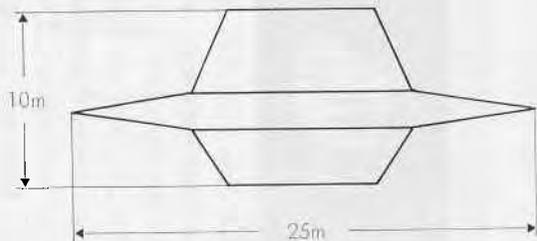
(キャノンFTb、キャノンFD50mm・F1.8、距離無限大、シャッタースピード $\frac{1}{250}$ 〜 $\frac{1}{50}$ 、絞り8、フード付き、フジフィルム・ネオパンSS)

●この写真は後日撮ったもの。
文中の文字は本人が記入



●自宅付近の略図

北海道で撮影



●龍崎君兄弟の見た円盤の形

こんどは千歳市上空に出現したUFOを「バッチリ」カメラにとらえることに成功した。

昨年六月下旬、同市上長都九六四に住む、公務員、龍崎千代喜さん(51)の長男昇一君(18)―苫小牧高校三年生―は午後四時三五分頃、学校から帰宅して、弟の恵二君(15)―千歳中学

三年生―と近くの千歳少年院グラウンドでキャッチボールをしていたところ、ゴマ粒大の物体が上空に浮かんでいたのを目撃……。物体はいきなり昇一君たちからわずか五〇〇メートルぐらゐまで接近してきた。その物体は、突き出した中央部分がアルミ色、スカートのような部分はこげ茶色で大きさは親指のツメぐらいだった。音は全く

に11枚のシャッターを切った。うち六枚にUFOが写っていた。いずれも底の部分を見せた物が撮影されている。UFOは雲間に隠れるようにして姿を消したが、およそ五分間の出来事であった。

当時の天候は晴れ、西に雲が少し、月が出ていた。

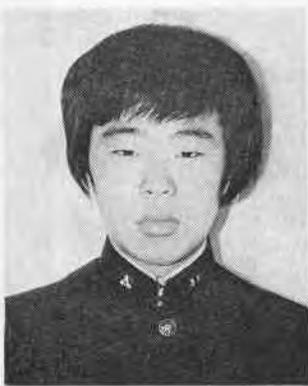
UFOの大きさは直径約二五メートル。UFO特有のジグザク飛行をする。色の変化はなく、たまたま光る(肉眼でわずかに確認するくらい)。接近してきた速度はものすごく速かった(フィルムを一巻きしてシャッターを切るときよりも速い)と、つけ加えていた。

そして、龍崎君がこの写真を発表したのは、九月に入ってからのこと。その理由を龍崎君は「信じてもらえそうになかったから……」という。

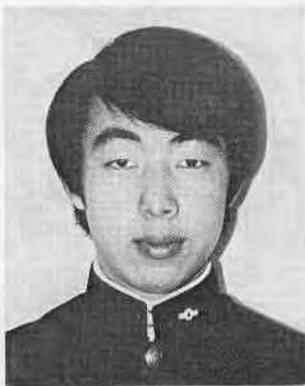
また龍崎君は「UFOと宇宙」のNo.2からの愛読者でもあり、本社に宛てた報告に――読者の皆さんに言いたいのです。僕ら同じUFOを信じ、UFOの存在を認める者にとって、もっと心のつながりというものを大切にしようではありませんか。これからも「UFOと宇宙」を読み、新しいUFO事件もしくは目撃報告を楽しみにしております。また、これからの「UFOと宇宙」の発展に期待してここにペンを置きます――と書かれてあった。

聞こえなかったという。

驚いた昇一君は恵二君にカメラを取りに自宅に戻ってもらって、上空に飛んでいるUFOを見つけた。やがてカメラを手にした昇一君はたてつづけ



龍崎恵二君



龍崎昇一君

●北海道千歳市の龍崎昇一君が同市で撮影したUFO。UFOの左下に月が見える。
(キャノンEXオート・キャノン50mm・絞り自動・1/125・ネオパンSS)

円盤、またも千葉県に出現！

千葉県内で円盤を見たという報告がこのところ相次いでいる。昨一九七四年六月六日の夜外房一帯を大型円盤が出現したり、また一昨年一九七三年八月二五日(?)に内房の君津にも出現、あるいはことし一九七五年の一月二日千葉市に飛来するなど、千葉はUFOの飛行コースになっているのだろうか。それら目撃者の報告をもとに君津市と千葉市のUFO出現の模様を現地取材し、目撃者の話をまとめてみた。

そのI 君津市の目撃例

昨一九七四年一〇月二八日の消印で編集部にかういう報告が届いた。

「前略、この写真は昨年(一九七三年)八月二五日頃写したものです。この写真は僕が写したものでなく友だちの榎本君が写したのです。それは榎本君がカメラを写しながら遊んでいる時でした。突然円盤が飛んで来たのです。ちょうどカメラを持っていたもの



榎本君

で写せたのです。

榎本君は写した写真を学校に持って行ってみんなに見せました。すると以前から興味を持っていた四人が榎本君のそばに現れました。その人は僕と上野君と山田君と海老原君でした。僕たち四人は場所、時間などいろいろ聞きました。(場所・榎本君の家、時間・午前一一時頃)僕たち五人グループはこの写真をもとに円盤の研究を進めました。

僕たちは円盤が急に現れるのはおかしいと思いました。そこで君津市付近で円盤を見た人はいないかと探しました。すると斎藤君が授業中見たといいました。それに対して僕は『なぜその時間円盤と騒がなかったのかね』とききました。すると『こわくて……こわくて』の一言でした……」

年明けた二月の上旬、本誌は現地を訪れて調査をした。

現地は、君津市の鹿野山の中腹にあたるところで、目撃者の榎本君の家はそこなのである。鹿野山はマザー牧場で有名なところで、春から夏になるとこらあたりは観光客でにぎわうところだ。この地は東京に比べ空気の透明

度が高いので空中にある物体なら、それを見分けるには好都合だ。榎本君宅はワラ屋根のある農家で、その庭からは空が一望できて見晴らしはよい。

目撃したのは榎本匡宏君と須藤千博君の二人で、案内に立ってくれたのがこの報告を寄せてくれた川俣浩俊君だ。共に君津市立小糸中の三年生(現在)である。

インタビューはこの榎本君の家の庭で行われた。

「この写真の物体(左の写真を示しながら)は飛行機か鳥ではなかったか。

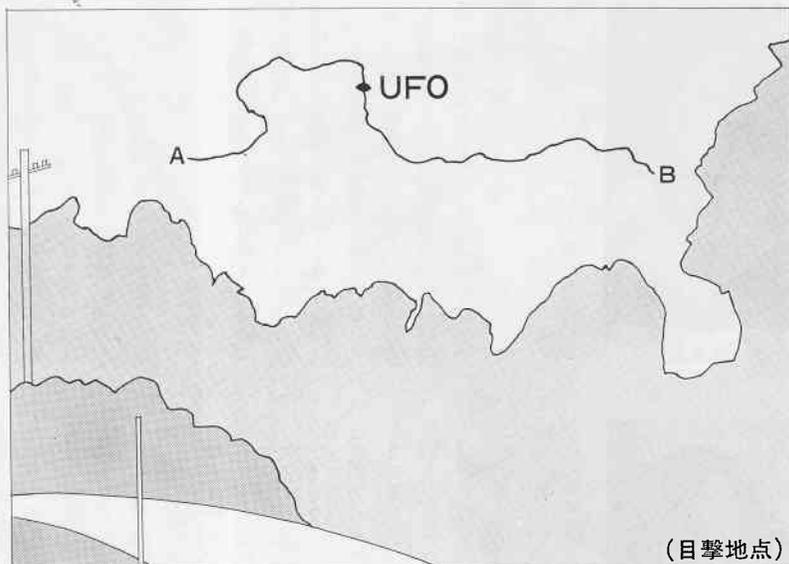
榎本君 飛び方が特殊だからそのどち

●目撃地榎本君の家は鹿野山の中腹にある。

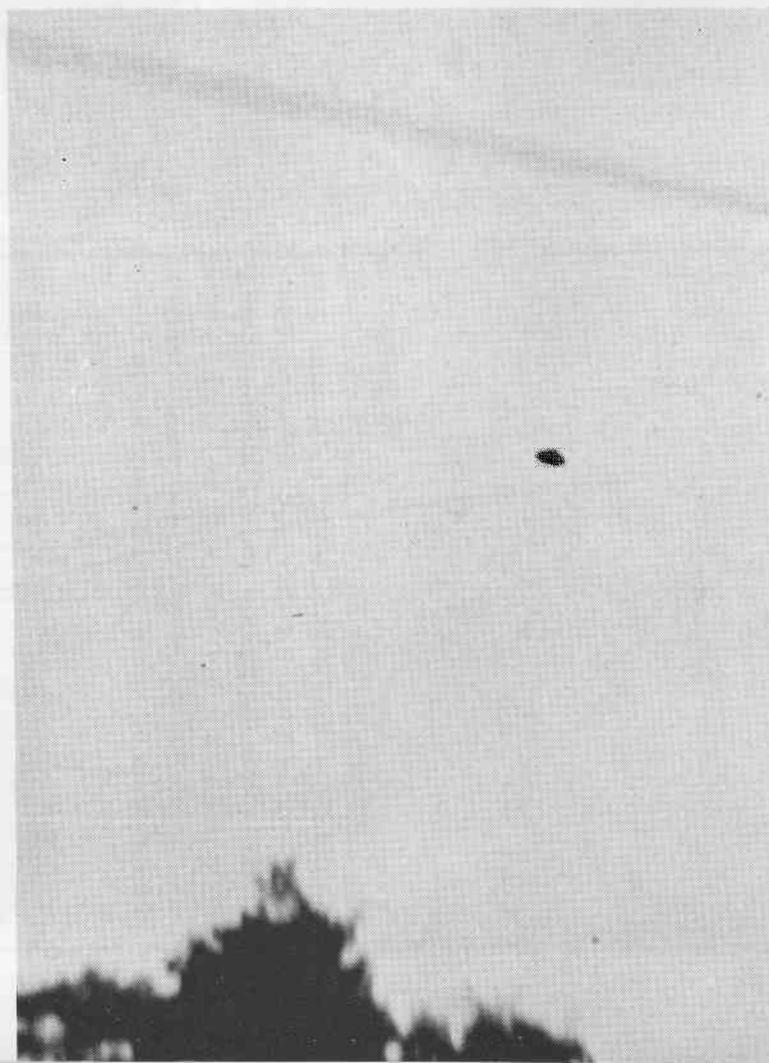


らでもないようだ。飛行中のスピードが急に落ちたり早くなったり、あるいは途中、ガクンとスピードを落ととして止まるようになり、少し落ちてからまた上昇した。それから猛スピードで消え去って行った。これらをも飛行機や鳥でないことがわかる。

右上图のAからBまでの間はどれくらいのスปีドで通過したか。
榎本君 一〇秒くらいだ。
 ——その物体はどれくらいの高さだったか。また色は……
榎本君 四ノ五メートルの大きさだったろう。それは近づいて計ってみた大きさが、図で見たとおそらく四〇〇メより大きく遠く、おそらく四〇〇〜五〇〇メートルの上空を飛んでいた。



- 榎本君の庭から見た円盤の航跡図、AからBへ移動した。
- シャッターは1度押しただけ。ピントは円盤に合っているので下の樹木はボケている。



たと思う。この円盤は意外と小型で二人乗り円盤だと思う。色は黒っぽかった。
 ——円盤は特別変わったような動きをしていたか。
須藤君 それはある地点から別の地点へ向けて一目散に飛びつづけているというような感じを受けた。
 ——カメラぶれなどなかったか。

榎本君 がっしりと構えていたのでブレなどなかったと思う。ただ円盤に動きを合わせてカメラを動かしていたので下部に写っている樹木はブレている。
 ——形の変化や音などなかったか。
須藤・榎本君 固体として見えただけで形を変えたり色を変えたりはしなかったようだ。また音は少しも聞こ

えなかった。

「低かに目撃者がいたというが、みんなは何と言っていたか。」

川俣君 クラスの友だちの斉藤君、上野君にきいたが、やはり目撃していつびっくりしていた。榎本君が目撃した時間や方向の一致については聞きただしても、これという一致点は見つからなかったが、印象としてはどうも同じものだったらしい。あれが目撃されたのは八月の夏休みの終わりだったし、みんなにきいたのは九月の2学期の始まったばかりのときだったので、まだ印象の新しい頃だった。

以上の話によると、円盤は一瞬のうちには現れ、すぐさま消え去った。目撃者ははっきりしているところでは四人で、みんな同一の物体をみているらしい。ただ目撃しているが、榎本君の父親達弥さんの言うところでは「写真の円盤は鳥などのカメラぶれでは？」と疑問を挟んでいる。

(円盤撮影時のデータ サクラパック、35mmフィルムASA100)



鈴木君

そのII 千葉市の目撃例

「夕方四時頃でした。いつものように天体観測をしようとして二〇〇ミリズームレンズをつけたカメラをもって僕たちが家を飛び出すと、近くの児童公園にいた赤ちゃんをだいた四〇代ぐらいの男の人がびっくりした声で『あれは何だ』と、空中にあるものを指さして叫んでいました。」

僕たちもとっさにそちらへ目をやると黒字んだ物体が空中に浮かんでいてゆっくり動いていました。『これはUFOだ!』と、ちょうど持っていたカメラを向けると、ちゃんとファインダーにその物体が入っている。夢中になって、六回シャッターを切った。『撮れた!』とそのとき思って、興奮してしまいました。今までこうしたUFOを撮ったことはなかったものだから!。UFOを写すときは、はじめ児童公園の外の道路上でシャッターを切ったのですが、木が邪魔になり、公園の中に入ってゆきなおもシャッターを切



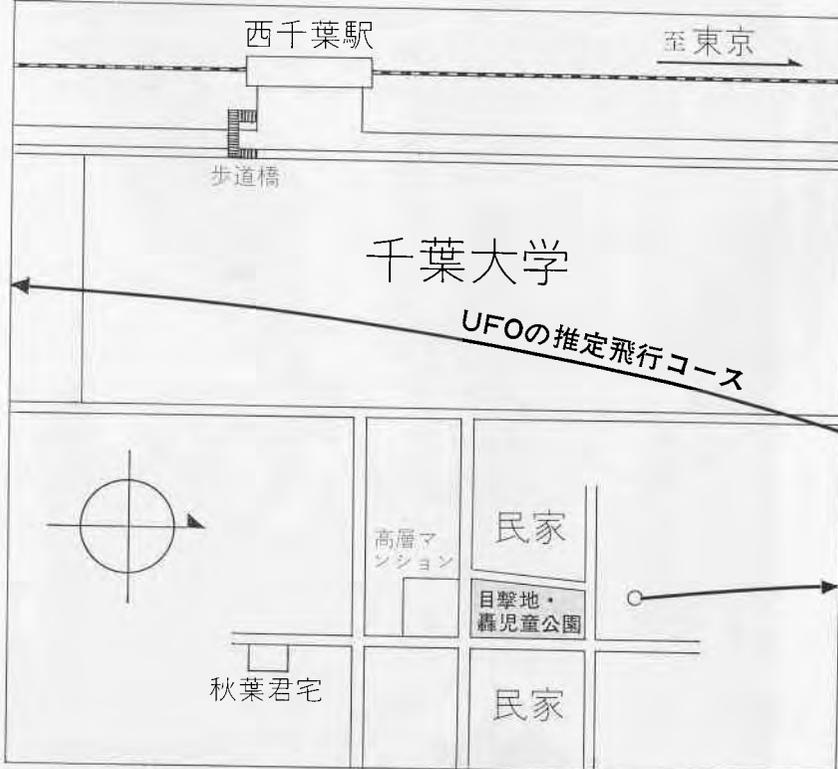
秋葉君

りつつげました。

はじめ物体は浮かんで少しずつ動いているようでしたが、手前の方にぐんと傾いたかと思うと一八〇度近く回転して楕円状になった。すると、急にスピードをあげて遠のいてゆきました。しばらくするとまた、自分たちのいた

上空にきました。そのときは初めとは違って高度はずいぶんと高くなっている、豆つぶほどになっていました。そのあと物体ははじめ見た方向、つまり北の方向とは逆の方向に飛び去ってゆき、見えなくなりました」
一月三日、当時(一九七五年一月

●轟児童公園は千葉大学の裏手にあたる。





B



A



b

写真のA B C D E Fは、鈴木君がシャッターを押した順に並べてある。また下段のa b d f y zは、当社取材班が後日現地に行き目撃した場所を写したものである。したがってAはaの場所から写したものであり、Bはbの場所から写したものである。下段のa b d : 内に写っている少年二人は鈴木君と秋葉君。ただ上段のCとEの現場写真は載せてない。下段のyは、目撃地の轟児童公園の全景であり、zは円盤が見えた最後の方向を撮っている。



a



C

二日)の模様を語
 ってくれるのは、
 千葉市六川在住の
 鈴木千秋君(一六
 歳・電気工事手伝
 手)と、秋葉正君
 (一六歳・千葉工
 商高等学校二年)
 の二人である。

その一人、鈴木
 君は一九七一年一
 月発足した「SI-
 RSN and SIRIUS
 天文同好会、みの
 むしクラブ」とい
 う天文クラブのリ
 ーダーをしており
 (会員七、八人)、
 秋葉君はそのメン
 バーである。

定期的な天体観
 測日にあたるその
 日秋葉君の家(千
 葉市轟町二一三
 一)に集まり、
 近くの児童公園
 (轟町二丁目三番
 地)に行こうとし
 たとき上空にそれ
 を認めたもので、
 写真は鈴木君が撮
 り、A、B、C:

D



d



f



F



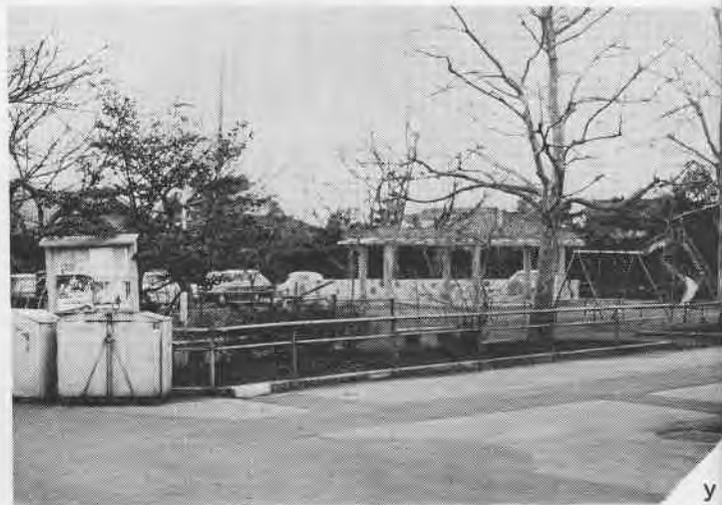
E

の順にシャッターを切った。
 天候は薄曇りでも夕方、約一〇分間目撃、形は写真のようにいわゆるコーヒーカープの受け皿みたいな形をし、色は黒っぽく、やや中央に白っぽい部分をもとめた（鈴木君）。飛行中の色の変化はなかった。
 この目撃した物体が鳥か飛行機ではないかということについて「以前、三機一べんに飛んでいた物体が、今回の目撃したのと同じ灰色をしており、間隔を一定のまま飛び、しかも光の点滅や音などなかったことから、それをUFOだと思っているが、今回も全く状態が同じだった」と鈴木君は語る。

（円盤撮影時のデータ ペトリV6 II ズームレンズ80〜200mm F5 トライX）

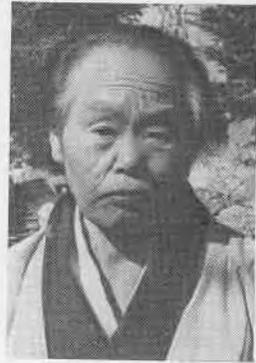


Z



Y

長野県に 落下した 小型円盤!



目撃者

寸田けささん

一九一八年の春、自宅の屋根をかすめて落ちた円盤を目撃、七十二歳のおばあさんが当時の模様を語る。

ことし二月二十五日、本紙編集部に報告があった。報告者は長野県小県郡東部町に住む柳沢知義さん(46)である。柳沢さんの隣に住む七十二歳のおばあさんが今から五七年前の一五歳の娘時代に小型円盤を目撃したこと(本人は人魂というのだが)を聞き出し、その話をまとめたものが詳細に書かれてある。そのおばあさんの名は寸田けささんで、目撃地点は東部町新張地籍の烏帽子岳山麓の標高約七〇〇メートルの南面傾斜地の部落である。けささんの話は、自身の体験による迫力に満ちたもので、またその話に柳沢さんの分析も加えてあり、真実性を高めている。以下その内容。

まず、順を追ってお話しします。

今年になってUFOなるものが長野県的美ヶ原(夜)、佐久市(夜)、丸子町(夜)、東部町(夜と昼)というように一月一日から二月一日まで連続して目撃されています。そのようなわけで話題がつい夜光る円盤の話になるのです。

このあいだ隣に住む年寄の寸田けささん(七十二歳だ)がまだまだ達者なんです)が私の家に来て茶飲み話を始めました。そこで私が円盤が夜光って飛ぶ話をしたので。それを聞いたおばあさんがつぎのようなことをしゃべりはじめました。

「私は人魂(ひとたま)を見たわい。今までこんなことだれにもしゃべったことはないのだが、今あんたが赤いものが飛ぶというので初めて言うのだが、昔(一五歳当時、実家でのこと)人魂が飛んできてな、うちの庭へ落ちたんだ。その時は人魂を見ると不吉だ

というし、親に絶対に見てはいけないと言われた。だいいち恐ろしくて気持

が悪いので、その夜は寝てな、翌朝、恐いもの見たさで見に行ったら丸くてこのようなもの(手で直径三〇センチぐらいでボール鉢を伏せたかっこうをしてみせながら)が地面にベチャッとしていたよ。コンニャクより軟らかいもので、そしてネズミ色をしていた。

これが人魂だわい。これは人の油で、人は死ぬ時油汗がいづばい出るからこれは人の油のかたまりだわい。こんなことを人に話すとは不吉なことが起こるからと思っただれにもしゃべらなかつたけれど、あんたがそういう話をするので初めて話したわい。こんな話、だれも信用しやしめえ……」

私も「コンニャクの軟らかい玉が赤く光って飛ぶ」とはどうしても考えられなかつたけれど、そのときは「フーン」と不思議な話として聞いていました。

その夜のこと、この話のなかに気になるところがあってアダムスキー著の『空飛ぶ円盤同乗記』（高文社刊）の小型円盤のところを読んで大変びっくりし、もしかしたらアダムスキーのいう小型円盤と同じでは」とあらためておばあさんに詳しく聞きただしたというわけです。それによると次のようなものでした。

「春の頃だと思いが、夜の11時頃だった。人魂の高さは二階の屋根より少し高く、約二〇〇メートルぐらい向こうから赤く光ってそんなに速くないが直線に飛んできて、自分の家の平屋建ての屋根を越えて見えなくなった。裏庭へ落ちたな、と思ったが恐ろしくて見に行くこともできませんでした。親も「見てはいかん」といっているののでその晩は見に行くことはしなかった。翌朝の七時頃、食事がすんでから恐いもの見たさでそっと行ってみたら、このような形（次ページ写真）と大きさで、色はネズミ色、固さは今のことばでいえばゼリー状か油のかたまりのようだったわい。形は前目思っていた円型とは違い楕円型だったのは意外だった。その後は親が「見てはいかん」というのでそっとそのままにしていた。ところが気になったものだからその日の午後、再び行ってみると火山灰土の土に卵形そっくりに油が浸みたまような跡が残っていた」

●左手のワラぶきの家は目撃当時住んでいた家で、写真に出ているところは台所だったという。小型円盤は左の屋根を越えて（南の方向から）落下した。けささんの指さしている白い楕円状の物体は模型。（撮影は柳沢知義さん）



こうしたおばあさんの証言がほんとうであるかどうかアダムスキーの『空飛ぶ円盤同乗記』と比較してみた。

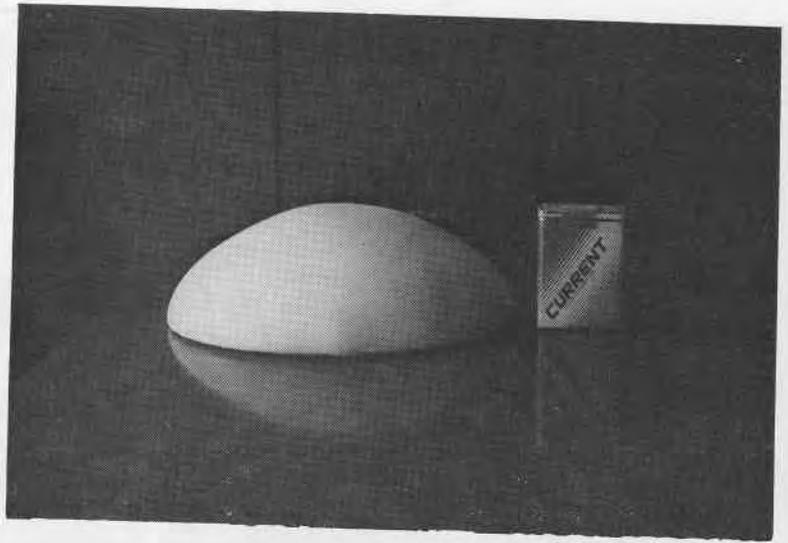
『機体はかがやく滑らかな材質で出来ていて、（中略）この極小型円盤は装着される観測器の大きさに応じて直径一〇インチ（約二・五センチ）から一二フィートまで（中略）。もし故障して地球へ落下する危険を生じた時、地上の生命、財産などが危機に瀕する場

合などは一種の爆発、或は緩慢な分解を起こさせることも可能である。

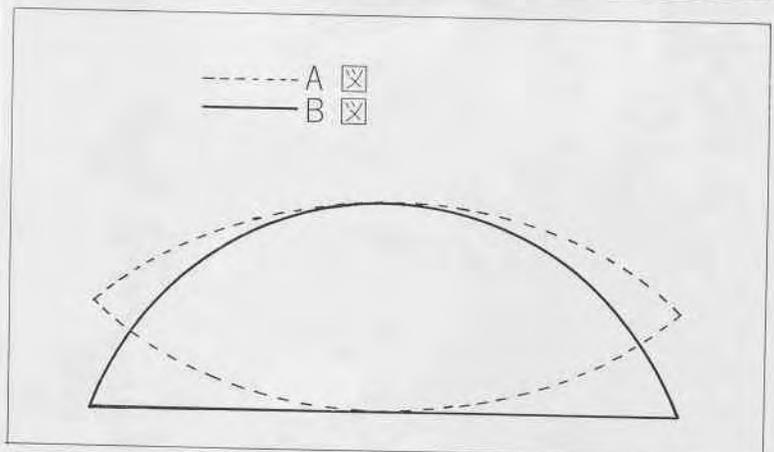
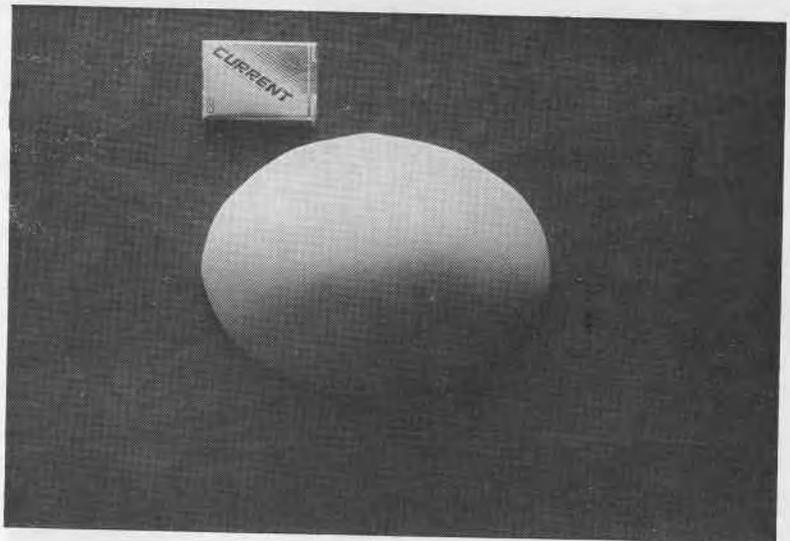
この円盤はときには地球上を低空で通過します。夜になると光るのです。（中略）ときには何かの理由で連絡が絶たれ、遠隔操縦が不可能になって地上に墜落することもあります。この場合緊急処置がほどこされます。（中略）円盤が故障を起こすとそれを分解するために放射線が出されるのです（中

略）また遊星（地球も含む）の地表付近で故障が起こった時は、地上へ降下させそこへ幾分弱いエネルギーを送り、それによって徐々に金属を溶解するので。最初は柔軟になり次第に一種のゼリー状に変化し、やがて液状になって、最後はガスになるので、あとには一かけらの破片も残りません』（二一八〜二四頁）

この引用からすると次の推察が成り



●写真は模型による物体の形態の再現。高さ8～9センチ、長い方の幅が25センチ、短い方の幅が18～18.5センチ。



立ちます。

1. ゼリー状物体について

a. 真夜中に落下したのを知っているのは父親と二人であり、父親としてもこの物体を恐れるあまり他のだれにも見せなかったため、だれも知っていないこと。

b. 家の裏三メートルの所に落下したため隣家をすっと離れていることから

他にもれることはまずないこと。

c. 今から五七年前にゼリーと思われるネズミ色のものを大ドンブリに一杯作ってそこへ捨てるようなことは考えられない。(けささんもそんなことは絶対ないと言っている)

d. 形が整っていてしかも楕円型であること。当時のナベ、カマに楕円型のものはないと思われる。

2. ネズミ色について

a. 色についてはアダムスキーは何も言っていないがネズミ色から想定すると金属は銀色の物体であると思われること。

3. アダムスキーのいう「小型円盤」ではないかと思われることについて

a. 夜光って低空で飛来したこと。
b. 落下の時の状況がアダムスキーの

いうのに似ていること。たとえば人魂と考えられる球形の玉で落下した場合、つぶれると円盤になるはずなのに楕円形状であることだ。それにその形が整っていること。あるいは軟らかいゼリー状で飛来して落下した場合、飛び去って原形をとどめないはずなのに、整った形をとどめていたこと。これらのことから考えられるのは、



どうしても固いものが落下してその場で軟らかくなったものと思われる。

また、次の日の午後になって行ってみたら卵形のシミ状の跡があったということはアダムスキーのいう「緩慢なる分解」に必要な時間に適合すると思われる。そしてその結果がゼリー状であったことは特筆すべきことだ。

c. 模型による推定。おばあさんから話を聞いたことをまとめて図をつくり見せたところ「よく似ている」といつてくれた。その模型は右写真真だが、これから見ると軟らかいものが落下したとは考えられない。

4. おばあさんが目撃したのは円盤を側面的に作図してみると前ページ下図の大体B図のようになる。これはAの状態からBの状態に軟らかくなって地表に垂れ下がったと思われる。

また、「空飛ぶ円盤同乗記」の「はしがき」にはこのようなことが出ています。「もっと豊富な証拠が世界に出現すると思います」

『同乗記』は本当に信じられないような話です。その証拠は私たちに見つけることのできるものとなりますが、それは地上へ落下したものを偶然発見するのを待つ以外にないのです。しかしたといそれを発見したとしてももともと何も知らない人が見たらそれは証拠としてとりあげられないわけで

すが、幸いにして小型円盤が落下したのを年寄りが話をしてくれたおかげでそれとわかったわけです。

古い先短い年寄りが子、孫に嘘の話をしていくはずがありません。私も事実のことと思っています。

さて、こうして分析してみると、あまりにびたりとアダムスキーの言うのとおばあさんの言うのが一致するのにびっくりしてしまいます。

だが念のためこれが本当にそうであるかどうかをもう一度しっかり確かめるために、今もあるおばあさんの実家につれていってもらったところ「ここに落ちていたわい」とすぐ指摘してくれました。その状態からして「これは本当だ」と確信することができました。そしておばあさんは今も言うのです。「こんなおかしな出来事はよく覚えてるさ。本当に見たんだもの。父は人魂は見る人によって大きさが違うと言っていたが、これは本当に人魂だったんだね」

それからおばあさんはしみじみ言うのです。「あたしゃ昨年病気になるまで、もう死ぬのかと皆に言われていたのですが、どういうわけか不思議に元気になったのです。そのとき命びろいをしたおかげでこの話が出来てうれしい。死んでいたらこの話は人に知られることなく埋もれてしまっていたらろうに……」

UFO情報

夜の富士山にUFO現れる
 ●マニアが富士山中腹で撮影
 一体何の光の軌跡だろう?。UFOブームの一つの舞台富士山中腹で富士宮市内の空飛ぶ円盤追跡マニアがキャッチした写真がある。

一九七四年十一月二日夜7時頃から、新5合目から駿河湾方面の上空に飛ぶ「怪光」を目撃して望遠レンズ測ミリで撮影した一部。

光源がタブリながら横に流れる動きからジグザクの軌跡と飛び方にも奇妙な変化がある。軍用機だ、発光体のある鳥だのいろいろな説が飛び出す。富士宮署の日高愛文巡査(23)と同事小泉、塗装業工藤保夫さん(29)らグループは、未確認飛行物体、つまり円盤にちがいないと疑わ

ここ数カ月間、夜の富士山で観測を続けており山頂付近からも時折折リナゾの発光物体が現れてすぐ消えるという。今は信じてもらえないが、正確な証写写真をとって発光物体の正体を解明しようという熱が上がっている。(一九七四年十一月17日付、静岡新聞)

釧路市でUFOの講演会
 ●サイボーグ(改造人間)が操縦か
 一九七四年四月、UFO(未確認飛行物体)に出くわし実際に円盤に乗ったとして話題になった北見市の

農業、藤原由浩さんが11月17日、ユニバース・コンタクト釧路市部の招きで来釧、釧路市幸町の福祉会館でUFOについて、講演を行った。会場には学生、主婦、O.LなどSFファン50人余りが詰めかけ超満員の盛況。今や遅しと藤原さんを待ちわびた。演壇に上がった藤原さんは、まず円盤内の装置をこまごま説明、円盤は高さ15メートル、横幅5メートルの小型中には皮膚をもったサイボーグ(改造人間)が装置をコントロールしている。またサイボーグとの通信によると「円盤は太陽熱をエネルギーに転化して動き、反引力装置をもっているため、空中での静止も可能だ」と熱弁。

一時間余りの説明の後、質問に移ったが「円盤は電柱の3倍の高さの空中で静止していたと言いましたか、どうして地上では見えなかったか」という会社員の問いに「雲に隠れて見えなかったのではありません」と回答。余り説得力をもちたこの講演会はナゾにつつまればなし。(一九七四年十一月20日付、釧路新聞)

群馬県の中学生在がUFOを目撃
 ●円盤の形をした白い物体
 久々に「空飛ぶ円盤」の目撃者3人。勢多郡大胡町の大胡中学2年、石原慎一、星野雅両君からの報告で「18日午後2時35分頃、校庭で空を見ていたら、円盤の形をした白い物体が10秒間ほど光りながら、小学校の屋根の向こうに消えていった」という。

石原君はさらに「教室でこのことを話したら、その物体なら前に見たことがあるよ」という友だちがいちも一人は前橋市第7中学2年の福田健太郎君。福田君は19日午後5時25分頃、自

転車で広瀬団地の自宅に帰る途中、西北の空に赤い光を放った物体を目撃した。物体は団地の上空で上がったが、下が青に変わり2分ほどして消えなかったという。(一九七四年十一月20日付、上毛新聞)

ナゾの物体の目撃者が続出
 ●時間、形などほぼ一致
 一九七四年十一月20日と前日について「私もナゾの物体を見た」という小・中・高校生が続々。目撃内容は18日午後2時30分頃①19日午後5時25分頃の2組に分かれた。

①は、大胡中学2年の横沢博郷君と大胡小5年の美香ちゃん兄妹、前橋市元総社小5年の石井久雄、小高弘幸君、5年の石井偉雄君ら7人。②は前橋市荒砥中2年の加藤秀典、福島進、奥野昇君、富岡市から車で前橋工業短大へ通う齋藤昭夫さん、前橋女子高3年の須田順子さん。

見た時間も光る物体の形もほぼ一致しているのだが、さて正体は? (一九七四年十一月21日付、上毛新聞)

UFO問題を研究
 ●医学と哲学との結びつきから
 UFOの鈴木善一さん。釧路市東区広町8の鈴木善一さん。鈴木婦人科医院院長は断言する。最近市内で実際にUFOに乗ってきたという人の講演会が開かれ、主婦、O.L、学生など広く聴講者を集めた。それだけ市民間の関心が高まっていることを示すのだが、なにせ出会ったことがない人が多く、不信心は常につきまとうもの。しかし鈴木さんは断言する。それは「UFOの話や写真の中にはもちろん作りものもある。しかしその中でどうして否定しきれないものもあるのは事実。一体それは何か。それこそ、UFO(未確認飛行物体)ではないのか」と。

鈴木さんが興味を持って調べ出したのはもう6年前になる。当時、鈴木さんは学問的な立場から「人間とは何か」をふまえての医学と哲学との結びつきを進めていた。そして人間について研究を行っていた時、人間が昔から潜在能力として持っているといわれるテレパシーなどの超心理現象に目を向けざるを得なくなり、霊といわれるもの、四次元といわれるものを調べているうちに同じ未知の現象としてUFOにも興味をもつて現ははじめた。

その間、日本で出版されているUFO関係の本は100冊余りも読破したという。

調べによると北海道でよくUFOがみられるのは北見、旭川、函館付近ということだ。鈴木さんも一度そこのようなところを見た。それは北見郊外5キロの路上、「北見の街がみえてきた」と思い、前方を見上げると丸く光るものが4つ山の方へ飛び去った。「確証はないが」とUFOだろう。まだその時の興奮が残っているようにだ。

また鈴木さんは「超心理現象が現存するのはまがいのない事実、少し前ブームになった『スプーン曲げ』も手品ではない。日本の科学者はこんな出来事に目を向けようという気がアメリカやほかの国では超心理学ははっきりとした学術分野の一つになっている。だから私たちが単なるブームではなく本気で考えてみるという気持が大切なのではないかと話している。今一番の望みは円盤に乗ることと話す鈴木さん。これからの調査が楽しみだ。

(一九七四年十一月23日付、釧路新聞)

千歳上空でUFOをキャッチ
 ●親指のツメぐらいの音はない
 またUFO(未確認飛行物体)の話題。こんどは千歳市上空にその姿を現した写真好きの高校生がカメラ

にとらえた物体はラグビーのボール型で、ハッキリとその奇妙な姿を見せた。

千歳市でUFOを撮影したのは同市上長都九六四、公務員、龍崎千代喜さん(51)の長男昇一君(18)と喜小枝駒沢高校3年。6月下旬の午後4時35分ごろ学校から帰宅したあと、弟の恵二君(15)と千歳中学3年と近くの千歳少年院グラウンドでキャッチボールをしていたところ、ゴマ粒大の物体が上空に浮かんでいた。その物体はいきなり動き出したかと思うと、昇一君たちの方向へ移動したその距離は、わずか50メートルぐらいだったという。接近してきた物体は、突き出した中央部分がアルミ色、スカートの部分はこげ茶色で大きさは親指のツメぐらいだった。音は全く聞こえなかったという。

驚いた昇一君は恵二君に自宅へ戻ってカメラを取ってくるように命じた。その間に物体は上下左右にと自由自在に飛びまわっていた。カメラはキヤノンEXオート一眼レフ。フィルムは35ミリ型。たてつづに11枚のシャッターを切った。うち6枚にラグビーボール形の物体がハッキリ写っており、6コマ目のものは、月が白く写し出されている。いずれも腹の部分を見せられているが、肉眼では中央の部分が突き出していた」と昇一君は話している。

この物体は雲間に消えるようになくなったが、この間約5分。発見したのは午後4時35分と覚えているのは腕時計で確かめたので間違いないという。

昇一君がごく親しい友人以外にこの話をしなかったのは「信じてもらえそうになかったから」というのがその理由。若小牧市民館が主催する写真講座に参加するようになったのが9月、たまたまその場で「おかしなものを撮影したのだけれど」ということで、話題になった。昇一

君は「千歳に住んでいて飛行機やヘリコプターをずいぶん見ているが、それらとは全く違った飛行物体だった」と語っている。なお、本社写真部が問題のネガを十分検討したが修正などの手がほどこされていないことが確認されている。

★詳細な解説は写真つきで33ページに掲載

●夜空のロマンからUFOに興味

福島市宮代字上川原、福島警察署交通事故係 佐藤三男さん(25)

夜空を見ていると、仕事の疲れがスーッと抜ける感じがいいですね。いま興味を持っているのは、例のUFOです。3年くらい前に本屋でUFOの専門誌を見たのがきっかけで、UFOに興味を持つようになった。10万円をはたいて買った天体望遠鏡を毎晩のぞいてはエツに入っています。これまでそれらしいものは何度か見ましたが「これがUFOだ!」といえるシロモノにはまだお目にかかっていないのが残念です。絶対、UFOは存在すると思います。

あのエジプトのスフィンクスにしても、古代人の宇宙人に対する敬服の念を象徴しているものだと思うられますし、古代から宇宙人が存在したのではないかと推測し得ることです。高い確率で推測し得ることです。なか毎晩、望遠鏡をのぞくわけにいかないのが、チョロビリ残念です。ま、必ずしも見るのは、UFOだけでなく、必ずいわけで、ぼくの場合、きりめきわたる夜空をながめているだけで満足です。

よく同僚から「お前はロマンチストなんだよ」とひやかされますが、こればかりは、小さい時からの趣味でなんともいえないのがないのです。もともとUFOがいるかどうか

よりも、たえず微妙な変化を見せる夜空に、ロマンを感じていったことも確かです。

●「ナツの物体」は飛行機か

前橋の小・中学生の間で話題に「一九七四年十一月十九日午後5時25分ごろの「空飛ぶ物体」のこと、僕も同じころ目撃しましたか、あれは自衛隊の飛行機じゃないかと思いませんか」と前橋、城南小6年、柳井豊君が伝えてきた。

柳井君の説明によると、飛行機の胴体と思われる緑色と赤の点滅が見えたという。「僕もこういうものには興味があるの、アレっと思っ注意深くみたのが、緑色をしている飛行機は自衛隊機しかないの、」という説明。これが事実だとすれば、一連の「空飛ぶ物体」目撃も一夜の夢物語だっただけになる。

そこへ、また新しい話。一九七四年十一月十八日午後4時ごろ前橋、元総社小6年、坂井伸広君ら8人が県庁裏の利根川にかかる中央大橋を渡っていたところ、突然キーンという音とともに風が吹き、全員らんかんに押しつけた。そのとき空に銀色した凸レンズのようなものが見えたという。

前橋、七中一年、森田泰宏君から「22日午後3時ごろ、出玉団地近くで2本の白い光を見た」という報告。

前橋市内の小・中学生の間では、このところ「物体」の話でちかきりだ。一九七四年十一月二十四日付、上毛新聞

●宮崎市内でUFOグループの討論会

スライド、映画上映も加えて日本宇宙UFO研究会が24日、宮崎市宮交シティ宇宙ミュージアムで

講演、討論会が開かれた。小、中学生らファン約百人が集まり空飛ぶ円盤など未確認飛行物体に質問が集中した。会員の並幸夫さんがUFO学として基礎的な知識を解説、スライド、映画上映もあつた。県内では宮崎市の高校生がある一九七四年4月27日、不思議な飛行物体を目撃するなど数件の「体験者」が出ています。月にウサギが住むとは思われない現代でもSFでじみわたUFOには大きな夢を持つていらしく「発進地はどこと思われるか」

●江戸時代にもUFOが出没

古い資料に詳細に記述江戶三百年の出来事を詳細に伝えている資料として「武江年表」が今日でも高く評価されている。ところどころでひんばんに空飛ぶ円盤らしい記述がひんばんに空飛ぶ。たとえば寛政4年6月18日亥(い)の刻、光り物西南より東北へ飛ぶ、大きき鞆(まり)の如く青みあり、といった具合である。戦後空飛ぶ円盤が各国で話題となり、宇宙人の地球侵略などとして映画や小説の好個の素材となつていくが、すでに江戸時代にそれらしいものが日本の上空に出没していたのである。だが当時の人たちは宇宙人の地球侵略などと騒ぎたてての知恵を持ち合わせてはいなかった。ところが科学の進歩に従つて宇宙戦争といった発想もなつてくる。SF小説の荒唐無稽いな話のうちにはいいのだが、その被害もう想像地球の国と国との間で発揮されること、とんでもないことになる。科学の進歩というものは、まことに厄介なものである。

一九七四年十一月二十五日付、西日本新聞

「空飛ぶ円盤は本当にいる」●鹿児島徳森さん、20年の研究歴「空飛ぶ円盤は本当にいる。これまで

で10回以上見てるんですよ」UFOのことになると目を輝かせて熱く語りだす。少年時代からこの道の研究20数年。県下でもついで先日、指宿地方でそれらしい光る物体を見た、撮影したりした騒ぎがあつたが、この研究家は「宇宙には地球のような惑星が1億もあり、信じられないほど科学は進歩している惑星があつても不思議ではない。国ももっと真面目に研究すべきだ」と熱が入る。

●空飛ぶ円盤に興味を持ったのは鹿

空飛ぶ円盤に興味を持ったのは鹿島工業高3年生の時。アメリカ人ジョージ・アダムスキーの「空飛ぶ円盤同乗記」という本を読んでから、初めてそれらしい光る物体を見たのは中郡小5年の時だ。当時は「火の玉」と思い、こわがっていたが、本を読んでからは円盤の存在を信じ、興味は募るばかり。専門書を読みあさり、そういう目で目撃してからはいくつもの円盤を目撃している。社会に出てからは忙しい仕事の合間をぬって円盤熱はいよいよ高まり、42年には東京ある宇宙友好協会の年会、鹿児島支部長もした。支部はその後、会員の転勤などでなくなったが、中学生から鹿児島大学教員まで30人が月1回、観測会を開くなどなかなか熱心だったという。

「42年夏の夕方、一人で帰宅中、市内の護国神社付近で、上空約1キロ先に現れ、小野町の方に飛んで行った。直径30センチぐらいで、七色の光を放っていた」と身ぶり手ぶり。これまでの経験だと円盤は午後6時から午前零時ごろまでがよく現れるという。UFOはアメリカやソ連をはじめ外国では研究が盛んだといわれる。「円盤は大宇宙からの使者。円盤を見た」と念じ、テレパシーが宇宙人に通じる証拠だ。やがて宇宙人も友だちになれる。大宇宙へも行けるようになる。一夢はとどまるところがない。本當

に空飛ぶ円盤はあるのだろうか。本職は南日本放送(MBC)のディレクター。住所は鹿児島市本吉町六〇四、徳森 勇(40)さん。一九七四年十一月二十五日付、読売新聞鹿児島版

●高岡市西部にもUFOか

赤、白交互に光を出しながらUFO(未確認飛行物体)をめぐる話題が今夏県内でも盛んだったが、一九七四年十一月二十七日午後6時15分ごろ高岡市西部の丘陵地帯上空で、それらしいものを見たという2人連れの会社員がいる。

同市中保のAさんが同僚と乗用車で帰宅途中、四日市市内の県道を走っていたところ、同市石堤方向から守山方向へ、赤と白交互に光を出しながらゆくり浮いているような感じで飛んでいる小さな物体をみつけた。

車から降りてさらにみていたところ、守山上空で突然、この物体はUターンして、石堤方面の丘陵上に姿を消した。まるで着地したようにみえたという。その間約5〜6分だった。

Aさんは、これまでとくにUFOについて関心をもっていたわけでもないが、これだけ鮮明に光を放ち、ふんわりと飛ぶものに偶然出くわしたことで「もしかしたら、あれがUFOでないかと瞬間的に感じ、だれかほかにも見ただ人はいませんか」といつている。

一九七四年十一月二十八日付、北日本新聞

●帯広市の少年がUFOを撮影

空に浮かんだおかしな物体UFO、ナツの飛行物体はいまでも静かなブームを呼び研究グループまでできています。帯広市内の少年がUFOの写真を写したと本社に届けた。この写真を写したのは、帯広市西三南5、飯野義治さん(41)の長男

義嗣(11)、次男克次君(11) 小學生の双子の兄弟。一九七四年11月12日の暮ころ写しているもの。

自宅の裏窓から見ていると空にボツカリ、おかしな物体? これはUFOだ、とさそく愛用のカメラでFオリ、パチリ。4枚写したところ、スリットと雲間に消えたという。全部写し終わってこのほど現像したところ、たしかにUFOが。この世には不思議がいっぱい。(一九七四年12月28日付、十勝毎日)

オレンジ色に輝く物体浮かぶ

●呉市、母子連れが目撃 呉市内で一九七四年12月18日夜、UFOを見たという母子連れが現れ話題となっている。目撃したのは同市3条4、海上自衛官、林一義さんの妻、ツギ子さん(36)と長男の美幸君(11) 三河小5年。

2人は銭湯からの帰り、家並みを過ぎて空が白ける三津田橋にさしかかった午後6時45分ごろ、三津田高校の上空に車のタイヤほどもあるオレンジ色に輝くナゾの飛行物体が浮かんでいるのを発見。一緒に見守るうち旋回しながら音もなく右にゆっくり動いてゆき、5分間も飛び続けて灰ヶ峯の方向に消え去ったという。

美幸君は「ビッグニュースや」と、飛んで帰る父親の一義さんにこの話をした。「一義さんは「ヘリコプターなら音がするし、ライトも点滅するはず、UFOに間違いないだろう」といっている。

美幸君はさそく見た通りを絵に書き、学校の友達や先生に見せたがUFOの発見は呉地方でははじめてだけに、学校中が円盤熱にかざされていった。

(一九七四年12月20日付、サンケイ新聞(広島版))

京都市の学童がUFOを写す

●関係者に「鑑定」を依頼

各地でUFO(未確認飛行物体)を目撃した人が多く、話題を呼んでいる中で、京都市右京区の1学童がこのほどこれをばつちりカメラにおさめた、と各方面の関係者に「鑑定」を頼んでいる。カメラでとらえたケースは珍しいが、いまのところこれをめぐって諸説ふんばふん。UFOをカメラでとらえたのは右京区海津上田町、海津北校6年、山田信司君(12)。一九七四年11月15日午後4時46分ごろ、お母さんの信子さん(49)が、頭の上をゆっくり移動している物体を発見、すぐ長男の信司君を呼んだ。信司君は買ってもらったばかりのハーブサイズのカメラで撮りまくったという。物体を追いながら9回シャッターを押した。信司君は買ったばかりの、少しブレているものの9枚全部に小さい白筋がくつきり写っていた。カメラ店では「全部に同じものが写っているのでフィルムムの傷ではない」といっている。

山田さん母子の話では近所の人たち約20人と一緒に見たが、飛行物体は葉巻形の金色で青は全く聞こえず頭の上をゆっくり西から東へ移動していったという。だが信司君がとらえた写真については「米子から打ち上げた観測用気球が、季節風に乗って飛んできたことが今までもあったので、気球とも考えられます。また京大花山天文台の神野光男助教は「うちでは見えていませんし問い合ってもありません。フィルムムの傷でもない」とする。と、スピードの点から考えて人工衛星と考えるのが最も妥当か、がゆっくり動いて行くように見えるはずで、肉眼で形までわかるものではない」とのこと。

一方、国際UFO観測隊の三上皓造さん「中京区猪熊通三条下ル」は「写真を見たが、今のところ何ともいえない。うちの機関で研究のうえ、機関誌に発表するつもり」と、結論は自分おあずけのようだ。(一九七四年12月24日付、京都新聞)

「未来」についてアンケート ●福島民報、地元小学生対象に 小学生も6年になるといういろいろ空想を働かせ、読んでいても楽しい空体的に人類の未来に希望を抱いているが、人口が増え食糧不足になり滅亡するという悲観論も少数ながらあった。

1人でいろいろな意見を述べ、数多く例を挙げているので必ずしも数字は一致しないが、まず「交通機関」では電気自動車がトップ、次いでリニアモーターカー、エアー、公害のない車、コンピューター操作車など未来の乗り物には夢がある。従って道路も車道と歩道が区別され立体交差となるという意見も多い。その歩道も屋根があったり、ベルトコンベヤー式など。

西伊豆で怪飛行物体を発見

●4人の現職警官が確認 最近下田署内では、「謎の飛行物体」についての話題でもちまちま話では、一週間程前、須崎御用邸を警ら中の警察官4人が、午後8時30分ごろ頭上の空に、3個の光を放つ物体を発見した。光の色は写真撮影のフラッシュのような感じで、点滅しながら空中を小さく上下しつづつ爪木崎の方向へ消えたという。光る謎の物体については、2、3年前西伊豆方面で大騒ぎになったことがあり、「宇宙人の気球」説から、「気象観測」「大気の異常光現象」など、諸説が乱れこんだ。しかしこの西伊豆地方の事象は屋間の4人の警官が確認しているだけに、作り話や幻覚とは考えられず、須崎地区では、この話題でもちまちま話では、4人の警官が発見すると早速、追跡をはじめ、爪木崎へ急行した。すると、一方の山陰からももう一方の山陰へ、ゆっくりと消える所を再び目撃し、さらに5分位して、一旦姿を消した山の方向から、この飛行物体が現れ、今度は海の方へ飛び去ってしまったという。

この怪発光体の高度や、距離などは、暗夜ではつきり確認できなかったが、かなり大きな光の輪が認められたと話している。飛行機、あるいはヘリコプターなどと違うことは全く音がしないこととちょうど鳥か気球のような感じだったようだ。

人間の将来

1人だったら、見まぢがいや、あるいは幻覚ということも考えられるが、勤務中の4人の警官が目撃しているという点で、確かな話として今もつづらる評判。この警官以外にも浜崎小学校の近くにある警察署に住んでいる別の警察官も、この謎の発光物体を確認している人があり3回も見たという体験者までいる。中には、ぜひカメラでキャッチしたいと張り切り、警戒と監視をしている人もいられる。

この他、怪飛行体が出没するという須崎地区の住民の中にも、見たという人が多数いるようで、同地区でも、物珍しき半分、気味悪さ半分では、2、3年前に西伊豆方面でも話題になり、目撃者が現れて「宇宙人の飛行物体」説や、気象観測気球ではないかと大騒ぎになった。しかし、この西伊豆地区に現れた謎の物体は、白昼か夕方など、明るい時間に出現しているところが違っている。この時も、防衛庁や気象庁などに問い合わせがなされたが「そんなものは知らない」ということで、結局わからずじまいになってしまっている。

(一九七五年1月14日付、伊豆新聞)

下田版

東北、東関東で多数が目撃

●花火の流星のような明るい火の玉
成人の日の一九七五年一月十五日夕、横手市の上空を火の玉のような飛行物体が飛んだのを多数の市民が目撃、サターン・ロケットの燃え殻が地表に落下して間もないだけに宇宙の軌道を描いている人工天体の一つが大気圏で燃え尽きず落下したのか、それともいん石、UFO説など諸説ふんぶん。

目撃した1人、同市黒川字下和野(一七七一)、市議伊藤孫五郎さん(49)は、自宅前で久しぶりの星空を見上げていた午後6時ちょっと前、北側の空に突然花火のような流星のような明るい火の玉が現れ、いったんスーッと見えなくなったが間もなく3つばかりの火の固まりとなって北の方に消え去った。音はしなかった、という。

秋田地方気象台に尋ねたところ秋田市をはじめ、大曲、角館などの各地方から問い合わせがあったとのこと。テレビや新聞でUFOのことを知っていたが、その正体は果たはた首をかしげていた。

15日夜、茨城県の中郡上空から県東部海上へ向かって10数個の光が移動するのを目撃され水戸地方気象台には「UFO(空飛ぶ円盤などの未確認飛行物体)では」などの問い合わせで電話が数10件も殺到する騒ぎ。

目撃者の話では、午後6時ごろから約1分間にわたって、10数個の光が水戸市の上空付近から勝田市、那珂湊市方面にフワフワと飛び、東の海上に消えたという。人によつて「オレンジ色の尾を引いて飛んだ」、「白い光だった」とまちまちだが、気象台への電話は笠岡市や日立市などからもあり、かなり広範囲の人が目撃したことになる。
(一九七五年一月16日付、秋田魁新

報)

札幌市の上空に奇妙な物体

●「タコ」か? 翌朝には消える
一九七五年一月7日夜、札幌市北区新琴似地区の上空に奇妙な物体が飛び続け「なんだか気味が悪い」という電話が北海道新聞社に相次いだ。

「午後7時ごろ、帰宅途中でザワザワという音が空から聞こえたので見上げてみると三角形の姿な物体が飛んでました。真ん中に円のようなものが見え、周囲は銀色に光ってました。まだいるんです。気持悪くて」とO.L.「絵や写真で見るとUFOとそっくり。薄曇りのせいが見えたり見えなかったり。飛び方がなんとも奇妙な動き」と真剣な男性の声。

外に出て見物する人もたくさんいたが、真夜中になってもいっこうに消えない。「タコではないだろうか」というのが一応の結論。最近ではビニール製のシボもない奇妙な形のタコが売られており、電線にでも引っかかっていたか風の具合で舞い上がっていたのではないかと。それが、翌朝、早起きして確かめてみるとすでに姿はなかったという。糸が切れて飛んでいってしまっただのか。子供が揚げておいて朝に取り込んだのか。みんな割り切れぬ表情だ。
(一九七五年一月9日付、北海道新聞)

●人工衛星の落下か
一九七五年一月15日午後から5時50分過ぎ、県内各地で正体不明の20数個の発行物体が発見され話題となったが、郡山市で同物体を見た天文研究者、白河天文台の藤井旭さん(34)「郡山市在住で東京の誠文堂新光社から多くの天文書を出版している」は、16日朝、福島民報郡山支社に電話で「人工衛星が大気圏に突入し分解したのではないか」と知

らせて来た。
藤井さんの話によると、現在アメリカ、ソ連などの人工衛星約3000個が地球の周りを回っており、そのうち数個が勢いを失って大気圏に落下し、太平洋上空で尽きたという説をとっている。「数日前話題となったサターンと同じ現象で非常に珍らしい」と藤井さんはいっているが。
(一九七五年一月16日付、福島民報)

夕暮れの上空を飛ぶUFO

●白色の光が高スピードで消える
一九七五年一月15日午後6時前後、東上空に奇妙な光が見えたとの情報。長野地方気象台などは「何ともいえない」といっているが、夕暮れの上空を飛んだ「未確認物体」が目撃者は話に持ち切りだった。

目撃者の一人、上高井小布施町山王島、公務員土屋一郎さん(50)は「近くの千曲川の堤防を散歩していたら、午後5時50分ごろ、東の山のやや上方を北から南へ、白色の光が幾すじも尾を引いて、かなり速いスピードで消え去った」という。また、松本市筑摩東の薄川付近に、三人が午後6時10分ごろ、東方の数ヶ原頂上付近に「奇妙な光」を目撃している。

この光は▽茶わんくらしいの大きさ▽火花が散ったときのよう▽5、6センチの長さなど、見た人によつてマチマチ。色も白っぽい、やや黄色がかっているなど差がある。これについて長野地方気象台や東京天文台乗鞍コロナ観測所(南安曇安曇村)は、「天文学的には心当たりのない」という。しかし県下2ヶ所ではほぼ同時刻に目撃されていることから、青木天文台(諏訪富士見町)の青木正博台長は「何らかの光が存在したことは確かだろう。人工衛星の一部とか流星が落ちる時に爆発して破片になった、などの可能性

はある。しかし、天文学的にはなんともいえない」と首をひねっている。
(一九七五年一月16日付、信濃毎日新聞)

秋田市にも「怪物物体」

●帰宅途中の会社員が目撃
時一九七五年一月7日午後5時22分、場所「秋田市手島町の渡線橋上。車を運転して帰宅途中だった秋田市の会社員Wさん(24)は夕やみせまったこの日、同渡線橋を走り抜けた時、前方かなた上空に、30センチほどの細長い青白く光る物体を発見。その「怪物物体」は空を「〇〇メートルほど走って見えなくなった。もしあれがうわさのUFOでは……」と思ったWさん、目をこすってみて考えた。「流れ星か、スイ星にしては大きすぎる」。秋田市内には残念なことに天文台がない。さっそく秋田地方気象台に問い合わせたところ「今、もう一回問い合わせたが、おそろく衛星か、それとも夜間のライトが反射したのでは」とさほど気にとめない様子だが……。さて、あなたならどう思う?」
(一九七五年一月13日付、秋田魁新報)

●米国では半数がUFO存在を確信
東海地方でも、つい未確認飛行物体、UFOの研究団体が、愛知学院大学にこのほど誕生した。先進国アメリカではUFOを目撃した人は11%、さらにその存在を確信している人が51%という。日本でも昨年に北海道をはじめ全国各地で「目撃者」があるところから「愛知学院大学UFO同好会」の成果が見も。(一九七五年一月19日付、毎日新聞名古屋版)

●埼玉、千葉にも目撃者続出
一九七五年一月15日、東北地方から茨城県にかけて上空に現れた「ナゾの光物体群」のうわさは、その後も広がり、17日、読売新聞社に「ナゾの飛行体を見た」という、新たな通報が12件あった。
埼玉県大宮市の中学生今井義路君(13)は、15日午後6時すぎ、オレンジ色の大きな星のような光る物体の大群が北から南にノロノロ走り、そのあとに2、3個の星のような物体が追っていったという。
また千葉県でも房総半島の南端の同県安房郡千倉町白間津の海岸で、いそ釣りの中の3人が目撃するなど、10数人が目撃していたという。
(一九七五年一月18日付、読売新聞)

●群山・会津・いわき市でも
●数個の「光」の編隊
一九七五年一月15日午後5時50分すぎ、県内各地で正体不明の20数個の発行物体が中空から落下するのを目撃された。イン石か、最近話題を呼んだアメリカのサターン・ロケットの燃え殻の残りか、あるいはスイ星などか、明らかではないが、飛行機にしては速度が速く途中で消えてしまっており「UFO(未確認飛行物体)ではないか」と福島民報社に問い合わせが殺到した。
1月15日午後6時ごろ、東北自動車道、東京から一九九キロ地点(白河、矢吹の中間付近)で郡山青年会議所のメンバー4人がUFOを発見した。発見したのは同会議所直前理事長佐藤栄作久さん(35)現副理事長長本名昇三さん(34)同専務理事事井紀勝さん(35)福島ブロック委員丹治さん運転の乗用車で自動車道を郡山市に向けて走っていたところ北の方(オリオン座の方向)から約16個の「光の編隊」を見つけた。車を左側に停車させ、ずっと観察していたが東京方向へ消えた。その間約3分といている。

東関東のUFO、その後も話題に

本体は暗くて見えなかったが後部からブルーとオレンジの炎を噴き出して... 盛岡署内は今、時ならぬ宇宙論議で沸いている。...

2、塗装業大桃勝治さん(31)も須賀川市内の県道でこの飛行物体を目撃... 大木大さん(42)も自宅前でこれを目撃している。

会津方面でも1月15日午後6時前、会津若松市門田町提次、東北電力社員須佐哲雄さん(46)は、雪いじりをしているふと空を見たところ...

新屋、農業山谷敏幸さん(20)も同じような飛行物体を見た。その間15秒という。2人の話では、1個の円盤からは3メートルの尾が引いており、10数個の間隔は全く乱れがなかったという。

いわき市でもナゾの物体の目撃者が相次いだ。その1人、警城高校教師論戸沢幸さん(25)は、平北町目町82ノ3... 光から南南東へ長く尾を引いた赤く光る物体25、26個が飛び去った。

満月ほどの「光る物体」が高速で飛び盛岡署内で話題「あれは空飛ぶ円盤か」「いや宇宙

ロケットがまた爆発したのでは!盛岡署内は今、時ならぬ宇宙論議で沸いている。... 山下で飛行したという所もあつた。

岩手郡玉山村の家具商小向伸さん(41)が同日午後5時58分、自宅前で星空を見上げると、満月ほどの大きさで光り輝く物体が周囲に小さな無数の光を従えながらジェット機の2倍近い速度で大船渡方面へ飛び去っていくのが見えたという。

例によって目の錯覚か、と半信半疑の同署員。その後、同じ物体が玉山村のほか水沢市や花巻市、上閉伊郡宮守村、さらには遠く福島県内でも確認されているとわかってからは、さすがにビックリ。慌てて航空自衛隊などに問い合わせる手を尽くしているが、確たる回答もなく「これでは得意の裏付け捜査もお手上げだ」と今度は目撃者らと一緒にナゾの物体解明に想像力で挑戦している。

●新潟付近で多数目撃 つい先日、サターン・ロケットの落下騒ぎがあつたばかりだが、一九七五年一月十五日夜、新潟日報長岡支社に「今、頭の上をナゾの飛行物体が飛んで行くのを見たが、何でしよう」という電話が相次いだ。

目撃者の話を総合すると、その物体は午後6時ごろ、北寄りの方向から南の方に向けて赤っぽい黄色い光を発して飛んで行ったという。しかも5、9個が一団となつていたとい、時間は10秒前後から1、2分間とマチマチ。

連絡してきたのは長岡市内のほか、南魚六日町の人もおり、新潟市

内でも2、3人の人が目撃しているという。長岡市内では、たまたま「さいの神」を見ていた30人余りが同時に目撃したという所もあつた。空飛ぶ円盤か、人工衛星か、それとも流星か、UFOの正体が気になるところだが、新潟地方気象台では「私どもの方にも2、3件の問い合わせがありましたが、調べようがありません」と言っている。

●鹿児島のあるデザイナー 最近、UFOに関心をもちています。私自身はまだ一度も見たことがないのですが、指宿郡喜入町役場に勤める私の友人は写真撮影に成功し新聞で報道されました。

果てしない宇宙のことを考えると「君の人生観は?」と聞かれたら私は即座に「UFOにかけている人間です」と答えます。よく一笑に付す人たちがいますが、自分の心のささえになつていふものを笑われたら腹が立ちます。別にそのような人生観を他人に強要するわけはありませんが、興味ぐらひはもってほしいものです。

大みそかの晩も、喜入町の友人と2人でUFOを探するため喜入の山に登りました。UFOは自分にとっていわば宗教みたいなもので、死んでも何かがあるのだという気にさせます。UFOの存在を信じるだけで、自分が「救われる」という気持ちになりますし、それくらい愛を見いだします。

UFOのこと、宇宙のことを考えると世の中の出来事がちっぽけなものに感じられますし、来世というも

のを信ぜずにはいられません。私の場合、UFOに心のよりどころを感じるわけですが、このような心のささえをだれでも持つておく必要があるのではないのでしょうか。

石塚時信(デザイナー) (一九七五年一月十七日夕付、南日本新聞) 津軽地方でも「ナゾの物体」 オレンジ色に近く相当大きい (一九七五年一月十五日午後5時57分ごろ、津軽地方の上空を北から南へ怪光を発しながら飛び去つた物体の目撃者が続々現れた。

青森市では中学生が「円筒状でオレンジ色に近い光を出していた。形がわかたらくらいだから相当大きい物体」と科学的。弘前市でも数人が見たが、こちらは「少し黄味がかつた青白い色。スパークするみたいになつて2つに分かれた。絶対空飛ぶ円盤です」とSF好み。

南郡大鵬町のNさんは、以前にも怪物物体を見た経験があるそうで「スキー場の裏山へ消えるまで見たが、飛んでいる鳥みたいな形。途中で5、6個に分散した」と観察が細かい。さきごろアメリカのサターン・ロケットが大気圏突入、インド洋へ火の雨を降らせたばかりとあって、通報者はいづれも「どこかへ落ちていってしまったか」と気をもんでいた。

●知らない間に写つていた (一九七五年一月十五日夕、県内各地で上空を光る物体が飛んだのが目撃されたが、会津若松市で市役所職員が写真撮影に成功した。たまたま市内で行われた歳の神の撮影にきていて行ったもので、光る物体は白っぽくなつたり、オレンジ色になつて15、16秒で消えたという。一方、浪江町の女性が「空飛ぶ円盤」をカラ1写真におさめ話題になつている。

女性「円盤」をカラーで撮影 (一九七五年一月十五日夕、浪江町の女性が「空飛ぶ円盤」をカラ1写真におさめ話題になつている。

ところ、当の女性は「撮影した記憶はないのだが」と興味惹かっているが、12枚撮りフィルム8番目に円盤らしきものがはつきりと写っており、なんとミステリーじみている。これを聞いたUFOファンや町の人たちは「空飛ぶ円盤の実在が証明された」といながらも「どうして写つたのだろう」と首をかしげている。七五年一月十五日夕、光る物体の写真撮影に成功したのは、会津若松市秘書広報係のカメヤマ、渋谷民夫さん(28)。たまたま同市指折鍛冶屋敷敷地内で行われた正月送りの歳の神の撮影にきていた。

午後6時3分ごろ、警備山の方から芦の牧温泉方向へ(北から南)光る物体がスーッと流れていくのが見え、渋谷さんはシャッター速度8分の1、開放で3枚撮つた。現像してみたところ、光る物体が撮影されたという。

当日は、会津若松市では雪がなくて珍しく夕焼け空。現地には7、8人おり、全員これを目撃している。

渋谷さんらの話によると、光る物体は白っぽくなつたり、オレンジ色になつたりして15、16秒前後で消えたが、10数個の物体が隊列を組むように尾をひいて流れていったといつ

ところ、15日夕は、県内をはじめ東北各地でこの光る物体が目撃されているが、その正体はまったく確認されていないだけに「サターン・ロケットの燃え尽きたり」や「UFOだ」といった話題でもちやい

「空飛ぶ円盤」の写真撮影したのは浪江町南津島宇島見53、家事手伝い、待子美枝さん(18)。美枝さんは昨年9月の中旬、家に兄弟たちが集まったのを機会にスナップ写真を撮るうと、4年前に買ったカメラ(コダック)を持ち出し、自宅の周辺で12枚を撮つた。その後、現像することなくそのまま置いていたが、お正月に見せてやろうと昨年暮れに福島市野田西岡原の高橋写真店で現像し

ところ、15日夕は、県内をはじめ東北各地でこの光る物体が目撃されているが、その正体はまったく確認されていないだけに「サターン・ロケットの燃え尽きたり」や「UFOだ」といった話題でもちやい

でもらったところ、スナップ写真にまじって、シャッターを切った記憶がまったくない写真も1枚出てきた。この写真は空の中に円盤らしきものが飛んでいるもので、しかも円盤が手に取るようにはっきりと見える。美枝さんははじめて「何かのまちがいだろう」と思っていたが、フィルムを調べたところ、8番目にはっきりと写っていた。それから撮影の当時に思い出したが、どうしても空に向けてシャッターを切った記憶がないという。それでも気味わるがた美枝さんが親兄弟や親類にこの写真を見せたところ、「フィルムに写っているのだから、シャッターを切ったことはまちがいない。しかもこれは空飛ぶ円盤ではないか」ということになった。

このためこれを聞いた町のUFOファンは胸をおどらせて写真を回覧「宇宙人がカメラのシャッターを無意識のうちに切らせたのだ」「これははっきり写っている円盤の写真は世界でも珍しい」「空飛ぶ円盤にまちがいない」と大さわぎしている。

美枝さんの話 私は写真をとるのとが大好きなので、12枚は全部私がシャッターを切りました。しかし、円盤らしきものが写っている写真は、いくらか考えても記憶がありません。現像する際のいたずらかミスではないかという人もいましたが、どうみただけいたずらミスではありません。ですからまったく不思議です。

高橋写真店の話 うちで焼き付けたものには間違いないし、カラー写真の場合は合成もできない。(一九七五年一月十七日付、福島民友)

●奥多摩でUFO目撃者が増加

●マニアが毎晩、撮影チャンス狙う
このところ、東京都の西北部、青梅市や西多摩町方面で、晴れた夜空を音もなく飛ぶUFOを確認したと

いう人が続出している。カメラでキヤッチした人もいて、飛行物体がよく見える奥多摩町鳩ノ巣の青梅街道の民間駐車場には、一目見るとマニアや若者たちが、毎晩、双眼鏡やカメラなどを持って集まり、寒さの中でナゾの物体の「出現」を待ち受けている。15日には、地元、青梅市の三田農協が有線放送で「軌道や時間がほぼ同じなので、人工衛星か、話題のUFOか、正体を突き止めてほしい」と流し、騒ぎはますますエスカレートするばかりである。

ナゾの飛行物体を最初に確認したのは、青梅市御岳本町300、塗装業沢島美さん(25)。さる7日午後5時30分から6時30分の間、鳩ノ巣の駐車場であと南の空を見上げたところ、オレンジ色の豆電球を数個並べたような円盤の飛行物体が、東から西の山陰に消えるのを見た。そのときは気にもとめなかったが、1日置いて9日午後8時40分ごろ、奥さんの美名子さんと再び駐車場にいたところ、7日とほぼ同じコースを、同様の物体がヘリコプター以上のスピードで飛び去り、やはり山陰に消えた。不思議に思った沢島さんは、友人たちにこの話をし、翌日から毎晩駐車場へ出かけては飛行物体を確認した。

10日午後8時35分、11日午後8時25分、12日午後8時20分、13日午後8時29分と8時35分の2回。観測できなかったのは空が曇っていた14日夜だけだった。

沢島さんの話では「3回目からはチカチカ光っている感じし、白閃へ消える飛行時間は約1分ぐらい」という。明るさは1等星ぐらいで高度は約600メートルだった。もしヘリコプターや飛行機ならば、爆音が聞こえるのに爆音を聞いた人はまだもない。
そのうえ、一九七五年2月13日夜には東村山市秩山2の13、都多摩目

自動車事務所職員塩田正夫さん(26)が、ナゾの飛行物体に成功した。鳩ノ巣の駐車場のそばに三脚を構え、シャッターを開放して絞りを全開(F4・5)にしたニコンの300ミリ望遠レンズでキヤッチした。

1回目(午後8時30分ごろ)、2回目(同8時35分ごろ)とも、レンズが「物体」をとらえたのは10秒足らずだが、2回とも、光が直線に走り、等間隔で、下方に向けて、かなり強い光を点滅させている状態が写っていた。また1回目の写真を拡大したところ、2つの光が上、下の光は細長いタ円形を作っている。(一九七五年2月16日付、読売新聞)

●歯の形をした奇妙な物体

●カリフォルニア州の砂ばに出現
歯の形をした何千という物体が突然カリフォルニア州、ベーカー付近のモハービ砂漠にまっすぐ立って出現し、ベーカーの住民を驚かせた。約5000の奇妙な物体は各々底部が広がり、先端は狭くなっていて、7インチから13インチの長さがあり、乾燥した湖床に、最近出現した。

その物体は湖床を横ぎり半マイルにわたって直立して立っている。米国土土地管理局警備隊員のグライアン・ブーア氏は各々の物体はあたかも手で作ったかのように見え、それらの物体のいくつかは指の跡があったと述べた。(一九七五年一月21日付、ジャパン・タイムズ)

●愛媛でUFO目撃者続出

●一九七五年は目撃者ふえる
一九七五年一月十四日夜、愛媛新聞社八幡浜支局に「空中で光る物体は何でしょう」と電話があった。13日夜も八幡浜市千代田町「ニューいづ

み」屋上で多くの市民が空を仰ぎ、怪物体の行方を追ったものだ。手の込んだ人は自宅から天体望遠鏡を持ち出しての観測ぶり。
電話してきた同市昭和通、屋上豊明さん(28)の話だと、市中心部から西南の空に午後6時半ごろ正体不明の光る物体を確認したという。望遠鏡なしで、見かけの大きさは月に近く、下半分がオレンジ色に光り、ゆるやかに南へ移動した。気球にしておかししいし、パラボランテナだと鉄柱がないといけないし、他にも目撃者は多く「錯覚ではない」。そう。

2日連続のこの光る物体の正体は何か? 市内の書店にはUFO関係の書籍、雑誌を求め人もいるらしい。実は1と真相がわかってしまうより不明のままの方が「現代のロマン」めいているが予言によると「一九七五年は目撃者がふえる」というから、やはり何かあるのか、と話題ひとしお。(一九七五年一月十六日付、愛媛新聞)

●那覇市にオレンジ色の物体

●自宅の窓から少年が目撃
那覇上空に円盤現る? 21日午前1時ごろ、那覇市古島に住むA少年(16)が、自宅の勉強部屋から南西の空に輝くオレンジ色の物体を目撃したという話。A君は翌日、早速、この話を友人に話したところ、これまでに同じような発光体を見たという人が3人も出て来たとした。円盤騒ぎとなった。すっかり円盤の虜となったA君、つぎの日から張り込みを開始したが、時間を凌いで3日連続出現したという。

得体の知れない発光体を目撃したという場所は、バイパス内間イオンタウンの南西方向。ちょうど米人住宅の小山丘と天久の東急ホテルの上空。最も新しい目撃者のA君は、円盤?の出現の状況を克明に記録してい

る。(一九七五年一月21日) 午前1時ごろから15分ごろまで。カーテンをあけて外を見ると、オレンジ色をした半月のようなものが、米人住宅の上で光っていた。また月だと思っているうちに月の両端がじだいに消え、葉巻きのようになった。星ぐらゐの大きさになった。しばらくするとだんだん増え、また上弦の月のような格好に戻った。それを4回くり返した。

(22日、午前2時ごろ) きのうとだいたい同じ場所に白熱灯の色をしたやがて半月の円盤らしきものが現れ、色が白から黄色へと変わった。天久の方が停電していたのではつきり見えた。15分後また現れた。1日に2回も現れたのでこれは円盤かもしれないと思う。

(23日、午前3時ごろ) 場所がやや右に移っていた。左右に動くことはなく5分ぐらゐ現れて消えた。24日からは全く見られない。
大きさが肉眼でもはつきり見え、月よりもちょっと大きな格好をしているという。沖縄气象台の説明によると、21日の月の入りは零時51分。22日が午前1時48分。月は上弦で半月。古島からだ那覇空港から右寄りの南西方向に見えるはず。

また、月の色もすうすう雲がかかったりすると、だいたい色に見えたりすることもあるという。目撃者も半月のようだと述べている。このことから月の可能性もあるわけだが、最終目撃の23日は午前2時28分に月は沈んでいる。夜間工事やビルのネオンなどが都市では錯覚を招く材料が多いが、A君の目撃以前1年前と5年前にもだいたい同じ場所で色違いの発光体を目撃している。
お月様のいたずらなのか、米軍基地内の何かの原因しているのか、天久上空の発光体の真相はナゾ。「円盤」の電波障害で停電が起こったかも……との目撃者の推測だが、偶然

の一致かどうか停電の原因は「オイルスイッチが焼けていた」と沖配は説明している。(一九七五年1月30日付、沖繩タイムス)

写真家「ナゾの光跡」を撮影

●桜島噴火の近くに現れた現象を 桜島爆発の光跡か、それともUFOか。「この光源が何か、わからないものでしょうか」と本社に持ち込まれた写真がある。撮影したのは鹿児島市郡元町、写真家島津久敏さん(45)で、47年10月2日夜、桜島が爆発し山火事を起こした時に撮ったもの。島津さんは光源が何か疑問に思いつながらも、そのままにしていたが「最近、仲間がUFOではないか」といい出したため、光源究明?に乗り出した。

この写真、爆発45分後に開放で20分間撮影したが、場所は同市与次郎ヶ浜で、このような光を出すものはなかったという。爆発の光源については「火山雷が考えられるが、光跡が全く違い、しかも爆発から時間がたっており、桜島とは関係なさそう(鹿兒島地方気象台)。さてUFO説は、UFOに興味を持つ人は「まさしくUFO。こんなすばらしい写真は、最近では集団で飛んでくるんですよ」と大喜びだが、当の島津さんは「シンキロウみたいなものは……」と自分でも、「新説」を考え、目下思索中。

三重でUFO研究グループ誕生

●会員の職業はいろいろ UFO(空飛ぶ円盤)の研究で地球の危機的状況を打開しようという愛知、岐阜、三重など東海地方の円盤研究者たちが11日午後、三重県津市丸之内の津商工会議所で「国際UFO研究会」(森田寛会長)を充足させた。

会員数は学校教師、中・高生、サラリーマンなど約50人。同研究会メンバーの話によるとUFOは昼夜の別なく、空に観測される「未確認飛行物体」のこと。形は円盤型、葉巻型などさまざまだが、いずれも無音で飛び、スピードはジェット機より速く、空中で停止したり、急角度のターンなど思いのままといわれる。他の天体からの訪問者か、とアメリカなどでは国家的規模で研究が行われている。(一九七五年2月12日付、中日新聞)

高校生がUFOを写す

●「カノープス」の撮影中に 群馬県山田郡大間々町の天文好きな高校生が、双眼鏡とカメラを手にその努力のたまにあって、関東地方から北ではなかなか見ることが出来ないといわれる、全天の恒星の中で2番目の明るさを誇る「カノープス」の観測と写真撮影に成功。さらに同じ写真には「空飛ぶ円盤」の名前で騒がれているUFOも写し出されるという付録もついて、仲間の話題を呼んでいる。

この高校生は同町7丁目、桐生南高2年の村田富克君(17)。村田君は高5年1月14日午後10時すぎ「カノープス」を観測するため、いつものように自宅の屋根にあがり、夜空を双眼鏡でのぞいていたところ、南の水平線に近いところで念願の「カノープス」を確認、35ミリカメラで3コマを撮影した。露出は10時40分から2分間(①)、10時43分から3分間(②)、10時47分から4分間(③)。同夜現象したところ3枚の写真に2つの移動する発光体が写し出され、そのうちの1つが「カノープス」であることがわかった。しかし、その右側にタテに並んだ2つの発光体が、3枚とも等距離で写し出され、村田君は「なんだらう」と首をかしげている。

村田君の説明によると①「カノープス」は2/4分間という露出時間に比例して白い線を描いているのに、別の発光体は3枚とも静止している。②写真の専門家は光のかけんや現象のムラでないことを証明している、ということ、同校地学部の仲間、村田君が苦労して撮影した「カノープス」より、偶然の付録となったUFOの方に興味を示しているようだ。

村田君は桐生南高では地学部と写真部で活躍しているが「カノープス」は一度観測しようと思いつき、2年前から夜空が晴れ渡った日には、双眼鏡とカメラを手にがんばってきたが、ようやく観測のチャンスに恵まれ、カメラにもとらえることが出来たという。(一九七五年2月9日付、上毛新聞)

「UFOは現実的な段階」

●下野新聞に研究家が投稿 空飛ぶ円盤、その現象の不可思議さと、その存在の神秘性は従来のロマン主義的考えから現実的具体的考へへと次第に変化してきた。円盤がはらむその潜在的な意味は実に大きなものがある。円盤それは銀河系宇宙からの使者なのか、それとも地球空洞説から生じた地球内部からの使者なのか、それはまださだかではない。現代科学はこう教えている。生命活動に必要なのは地球が持っているような環境、第一に気温(セ氏0度から100度の間)、生物が呼吸するための大気、熱を与えてくれる太陽である。そしてわれわれの銀河系でも、何百万という恒星が生命を宿すにたる条件を持つ惑星を持つといわれる。

空飛ぶ円盤UFOは、気象現象や天体現象のように単にその量的スケール、メカニズム、客観的性質などを定義するのではなく、直接人間(地球人)とのかわりから考えるべきものように思う。円盤は、絶えず

高い所から人間一人一人の日常的行いを見守っていると言っている。宇宙人たちは、そのたぐいまれなる純粋意識と超絶的な科学性を披露しようとしている。彼らは毎日のように人間らしい人間、つまりいつも清く正しく人生を歩んでいる人々を探し続けているに違いない。それが彼らのわれわれに示し望む必要条件であろう。

だから日本のみならず、世界各国で宇宙人とコンタクトが続いている人たちは、いわば宇宙人から選ばれた彼らに望む前にまずやらねばならぬ事は、日常的俗性に包まれた社会の衣を脱ぎ捨て、一個の人間としての原始的な姿に立ち帰ることが必要であり、また人間、社会自然に対する無知無関心を反省し私利私欲の想念を洗い流すといった浄化作用が必要なのではないか。(宇都宮地方気象台 岡正行)

滝川市でUFOが出現

●上下運動しながらゆっくりと飛ぶ 一九七五年2月18日午後6時40分ごろにかけて、空知管内新十津川町上空を飛んでいるUFOを通行人がカメラにおさめた。滝川市景町134、酒類販売業安達充幸さん(26)で、同日午後6時40分ごろ同市西町の札幌土木現業所滝川出張所付近の道を車で自宅に帰る途中、前方の新十津川町2つの星のようなものが互いに接近したり離れたたりして北方に移動しているのを見つけた。安達さんは近所の自宅にカメラを取りに帰り、近所の同市景町127、電気製成品販売業川西宏治さん(32)と一緒に、北電滝川発電所裏の石狩川堤防に分て、同日午後6時45分から約15分間、飛行物体の写真を10枚撮影した。

2人の話によると、2つの物体は

ゆっくりとしたスピードで上下運動しながら北方に移動、次第に高度を下げて雨竜町付近の山陰に落ちるようにならなくなった。色は最初白っぽい強い光から、次第に赤みを帯びて消えた。(一九七五年2月19日付、北海道新聞)

パトロール中の警官が目撃

●「UFO」か、議論百出 UFO騒ぎが全国各地で起きているが、このほど田布施、熊毛の上空で「空飛ぶ円盤」を目撃したという人が続出、周南地区は、このところUFO談議でもちきり。目撃者の話を総合すると、「16日から18日までの3日間、2ヶ所の上空にはつきり確認できた」と信じて疑わない。「まさか、そんなばかな」と、一蹴せず、まずはこの人達の話の聞いてみることにした。

この起こりは、16日。同夜、平生署の当直員がこの日は何事もなく平然としているところへ、1台の無線機に「空飛ぶ円盤現る」と、けたたましい声で、徳山から通報の届けがあった。「なに、円盤」と当直員はパトカーで出動、上空をキョロキョロ。しかし、何も見えず「あわて者が何かを見間違えたのだらう」と、引きあげた。

ところが、翌17日にも出現した。目撃者が今度は、署員の岡嶋貞吉交通課長ときたから、署員の表情は一変した。岡嶋係長によると、同日午後6時ごろ、田布施町米出干拓地の国道188号線を巡査する5人とパトロール中、前方の岩城山の頂上あたりに怪しい2個の物体を見つけた。5人は「首の明星だろう」と、別に注意も出さなかったが、時間的に見て、まだ星が出るほど暗くなっていないことに気がつき、とたんに5人は顔を見合わせて、ゾゾッ。再び目下をすて、観察すると、物体は、上下に並び、その輝き具合は、まさに異常。オレンジ色の強烈な明るい光

を発していた。「大きさは、遠くで判りませんが、かなり大型でした」という。

UFOか。さらに5人の話は続く。初めての経験。テレビのルポで見たことはあるが、まさに直接、まのあたりにはとどきとどき。やはり怖さがある。今思えば、物体の異常な輝きは、まるで下界の人間を見下して、その人物の目を射るようだったという。

さらに18日夜にも、新たな目撃者が目を射るようだったという。さらに目撃者は18日午後7時ごろにも出た。田布施町砂田、田布施報話局の石井豊局長(53)。同夜、山口の出張から帰宅後、局舎を見回り、妻の豊子さん(49)と2人で、岡崎係長らが目撃した岩城山頂上付近で、上下に並んでオレンジ色に輝く2個の物体を発見した。石井さんらは、先の5人より具体的に記している。話によると、下の物体が大きく上の方はその半分ぐらいで、光は、やはり強烈だったという。しかし、石井局長の方は、いく分判断している。しかし、一定場所から不動状態であるため、だんだん「円盤」の仮説を信じるようになったらしい。しかも、円型をしており、大型の方は「太陽が沈む時、一時的にパッと輝くことがあるが、まさしくそのもので、異様としか言いようがなかった」と説明した。物体は午後8時ごろ、消え去ったらしい。

こうした話を総合すると、2個の物体は16、17、18の3日間、夕刻ごろに岩城山頂上付近に出現していたことになるが、このほかにもかなりの目撃者がいる。いま、同地区をはじめ周南一帯までこの話は広まり、UFOか、目の錯覚か議論が百出している。

●室内上空に異常に光る物体
●道内各地で連続して現れる

22日、室蘭民報社に「18日午後、市内上空で異常に光る物体を見たUFOではないか」と通報があった。

目撃したのは室蘭市本町、会社員、古館和雄さんと同日27、スナック経営者、清見光弘さんの2人。古館さんは同日午後5時50分ごろ帰宅途中、電信浜上空で異常に光る物体2つを発見した。清見さんら2人は「2つは一定の間隔を保ち、並ぶようにして少し移動したあと、突然オレンジ色の光を放ち海側の方向に消えていった」と話していた。

18日は道内でも各地で連続してUFOをみたとの通報が相次いだ。この日の室蘭地方は星空だった。2人は「星の輝きとはまったく違った」という。

(一九七五年2月23日付、室蘭民報)

●星座の写真の中にUFO
●オレンジ色の物体をカラーで

ナゾの飛行物体カラー撮影に成功。このほど宮崎市内の中学生が、星座を撮った写真の中に、オレンジ色に輝く物体が写っており、UFOの輝きが巻き起こっている。

撮影したのは同市大坪町第2団地、大淀中1年倍敏郎君(12)。今年1月15日夜、裏庭にカメラを3時間ほどセット。現像してもらったが、ネガを見ていたところ、中央に細長い物体があるのでびっくり、焼き付けたところ、星の軌跡をバックに「ナゾの物体」がバッチリ写っていた。豆科植物学たちが「UFO」に間違いないと今も奇異。先生たちは頭をひねるばかり。それにしても不思議。ここ当分は話題をひとりでじめよう。

(一九七五年2月25日付、熊本日日新聞)

●学校上空にナゾの飛行物体
●授業は一時中断、クラスは騒然
24日午前11時ごろ、富山県立神明

小学校の2年1組で4時間目の授業中、教室の真ん中付近にいた児童が突然、席を立ちて窓ぎわへ。続いて他の児童たちもいっせいに席を離れたため、担任教師はびっくり。

児童たちは「鳥羽山の方角に、青空の中で白く光る飛行物体が通った。UFOかもみたいな」と大騒ぎで授業は一時中断。だが、「ナゾの物体」は、2分後には姿を消し、先生が窓ぎわへ行ったときは「何も見えなかった」。

さらに6年生の一部も同日午前8時半すぎに「UFOを見た」というなど、この日はUFOの目撃者が続出。だが「見た」というのは児童だけで、教師の中には一人もおらず「本当なのか」と信じられない様子だった。

(一九七五年2月25日付、北日本新聞)

●アベックのUFO現る
●三角形でオレンジ色

山形県朝日村小針の農業伊藤好昭さん(27)ら4人が、去る一九七五年2月17、19の両日、空飛ぶ円盤らしい「物体」を見つけた。日没後の夕方6時から30分間、いずれも薄いオレンジ色の光を放つ正三角形で、アベック飛行だった。年ごとによくUFOファンには、心がざわく情報。さっそく伊藤さんに登場願った。

発見場所の伊藤さんの家は、村役場のある落合から荒沢ダムに行くほぼ中間の集落。道路両側に1000メートルクラスの山から連なる高低の山が重なっている。1回目、つまり17日夕6時ごろ、伊藤さんが家の中から西の方(温海町方面)に2つ大きな星が異常に明るく輝いているところを見つけた。妻の一枝さん(23)隣の農業伊藤正さん(27)の3人で確認した。

狩猟用の双眼鏡でのごく三角形で、ハダカ電球の照明に似た薄いオレンジ色の輝き。段違い平行棒のよう

な位置で2つが並んだまま、真下にジグザグ、ユラユラという感じで山のかげに落ちていった。

稜線から約10メートルの高さから姿を消すまで約30分間。大きさは普通の星の3〜4倍だった。距離にして3〜4キロということ。

2回目、19日の同時ごろも同じ方角で、やはり30分間の飛行。2つの間隔だけがはじめの2メートル位から5メートル位に広がっていたという。この時の目撃者は伊藤さんと、一枝さん、それに母親のみよ子さん(46)の3人。

1回目のときは、飛行機が後方高く赤色ランプを点滅して飛び、物体の距離感、色彩をハッキリと対照できた。確認の2回とも雪空がきれいに晴れ、視界が広く天候だったことはいずれもでない。

山の反対側の温海町には、小針地区と直線の形で道路があり、自動車ライントのいたずらは、1000メートルクラスの山があるうえ、距離があって可能性がなく、さらに山を走っている高圧送電線も工事や、故障もなく、今のところ物体に事なり「既存」の予想物はない。だとすれば、このアベック飛行物はいったい何なのか。

空飛ぶ円盤―正確には未確認飛行物体という。英語の頭文字をとってUFOとも呼ぶ。一九四七年(昭和22年)の夏ワシントン付近で3つのふしぎな「飛行機」が23マイル(36.8キロ)の彼方を時速1200マイル(1920キロ)で飛んでいるのを見たというのが初めてで、これが円盤のように見えたところから「空飛ぶ円盤」と名づけられた。

「姿を消すまで30分間もひきつけられた。不気味な一方で何か大変なものを見つけたという興奮があったの」という伊藤さん、晴れば「一時も観測を怠ることがない」。

庄内地方では、48年秋のたそがれ時に酒田工業高写真部が遊佐町で同じような飛行物体を見つけ、写真撮影に成功したほか、2/3件の情報があった。

(一九七五年2月27日付、山形新聞)

●那覇市に謎の物体
●静止のあと去っていく

一九七五年2月23日午後5時半ごろ、那覇市石嶺の銀行員、上原英夫さん(31)が南西の空に怪飛行物体を発見。先端が金色、ダイダイ色の炎のようなものを発し、約5分間も静止。南の方に落下するかのよう

に去っていったという。ちょうど家族のスナップ写真を撮り終わった直後だったため、カメラのシャッターを切った。フィルムを沖繩タイムス社へ。現像してみると残念なことに物体は写っていないが、上原さん「怪飛行物体の話は信用しなかったが、自分の前に現れると本気にしたくなる」と興奮した口ぶり。

那覇空港の管制によると、その日同時刻半時間にかけて、米軍、民間機、小型機あわせて9機も那覇上空を飛行中だった。「飛行機を見まわしたのでは」とあざむきられたのが、UFOブーム、真相究明はなかなかというところ。

(一九七五年2月27日付、沖繩タイムス)

●朱色に輝く葉巻形出現

●小学生の間で「UFOブーム」

UFOを見たという小学生が30人近くも出た。一九七五年2月26日午後4時55分ごろ、板野郡板野町那東の板野西小学校庭と、校庭から約500メートル西の地点で西南の空に「朱色」に輝きながらゆっくりした速度で飛んでいた、と小さな目撃者は証言する。さらに同時刻ごろ、鳴門市で同じような飛行物体を見た大人も現れた。この人は「空飛ぶ円盤など信じない」と笑う。もちろん正体が不明だが、子供たちは「宇宙人が何かの下見に来たのだ」と信じて疑わない。現代っ子たちにとって、UFOはメグレンのものらしい。

●奇妙な物体を農婦が目撃

空飛ぶ円盤ブームの折り田辺市下三栖で農作業中の婦人が不思議な物体を目撃した。去る一九七五年2月17日午前9時半ごろ、市会議員、竜見利一さん(48)の妻、一枝さん(44)が自宅から約1キロ南のフランク畑で作業中、何気なく約100メートル離れた前の山を見ると、松の頂上に、赤い物体が風船のようにふくらんでいた。突然、左側半分が赤色から紫色にかわりさらに銀色に変化したと思ったところ、目玉のような物が2個輝いた。大きさは風呂敷を敷けたぐらいで、子供の遊ぶコマのような型をした物体が約半時間後、ゆっくり約5メートル頭上を上富田町岡方面に音もなく飛び去ったという。一枝さんは「こちらに向かってきた時は落下しないかと恐ろしくてふるえましました。風船や気球、タコとは違っていました。畑に行くのが気味悪くなりました」と不安がっている。現場は、昨春秋、大塔村の山仕事中の3人が銀色の物体を目撃した新庄町長井谷典。(一九七五年3月7日付、紀伊民報)

●多数が目撃、写真も撮影

空中に円盤状のものが浮かぶ。中標津町ではこのところUFOがひとしきり話題となっている。期日を同じくして「明るく輝く円盤状のものを見た」という人が次々に現れ、中には写真におさめた人もいる。話題が話題を呼び、その信ぴょう性を確かめようと、毎晩夜空を見上げている人、天体望遠鏡にカメラをセットして手ぐすねひいて待ち受けた男たちが現れている。

●夜空にまたUFO?

秋田市でまた「夜空に怪しく光る物体を見た」という人が現れた。この人は、秋田市将軍野に住む会社員Aさん(30)。さる一九七五年2月18日夕方6時半ごろのこと、あたりはもうすっかり日が暮れ、家路を急いでいたAさん。自宅近くでふと空を見上げると、「白っぽく光る電球ほどの物体」が視角を横切った。その間約3秒か4秒。「流れ星に似ては大きくさかしく、飛行機には速すぎる」ところから「もしやUFOでは」とAさん。この「怪物」キミならなんだと思う。(一九七五年2月24日付、秋田魁新報)

UFOの世界会議を開催

メキシコで世界13カ国が集まり空からロケットの燃え殻が降ってきたり、アルゼンチンに原因不明の火の玉が落ちたり、物騒な話の多い昨今、「宇宙人はき」といって「空飛ぶ円盤がその証拠だ」と固く信じているグループが、未確認飛行物体(UFO)に関する初めての世界会議を近くメキシコで開くと、発表した。

●秋田上空に電球ほどの物体

秋田市でまた「夜空に怪しく光る物体を見た」という人が現れた。この人は、秋田市将軍野に住む会社員Aさん(30)。さる一九七五年2月18日夕方6時半ごろのこと、あたりはもうすっかり日が暮れ、家路を急いでいたAさん。自宅近くでふと空を見上げると、「白っぽく光る電球ほどの物体」が視角を横切った。その間約3秒か4秒。「流れ星に似ては大きくさかしく、飛行機には速すぎる」ところから「もしやUFOでは」とAさん。この「怪物」キミならなんだと思う。(一九七五年2月24日付、秋田魁新報)

●夜空にまたUFO?

秋田市でまた「夜空に怪しく光る物体を見た」という人が現れた。この人は、秋田市将軍野に住む会社員Aさん(30)。さる一九七五年2月18日夕方6時半ごろのこと、あたりはもうすっかり日が暮れ、家路を急いでいたAさん。自宅近くでふと空を見上げると、「白っぽく光る電球ほどの物体」が視角を横切った。その間約3秒か4秒。「流れ星に似ては大きくさかしく、飛行機には速すぎる」ところから「もしやUFOでは」とAさん。この「怪物」キミならなんだと思う。(一九七五年2月24日付、秋田魁新報)

私は宇宙人?を見た

電車の中で、テレパシー通信を試みる。

山形県・中川友也 (35歳)

ただこのことは他の人はなにも知らないことで何一つ証拠がないのであるから、そのつもりで読んでもらいたい。

私は仕事の関係で東京や他県に行く機会が多く何カ月も家庭をはなれる生活を送っています。が、同僚と一緒に故郷に帰ろうとした一九七四年六月十日の夕方から秋葉原に着き山手線の電車に乗り、上野駅に着くまで5〜6分の間の出来事でした。

電車の中は空席が無いので電車の一番端の3人がすわっている席の前に立った私は、吊り輪に手をかけ、その3人を1メートルぐらい離れた所から代わるがわる見ていた。そして女2人に男1人がすわっているな、と思いつきながら、その2人の女性を見ていた私は少し他の女性と違っているのに気付いたのである。それは私の内部の何者かが知らせたかのようにであった。ともかく、細かく観察することにして見た。都会の中では、さま

ざまな人間がいるのがあたりまえだが、2人の彼女らを見てみると、本当の人間らしさが、満ちあふれている感じがでならない。どうしてだろうか？

その時、私の心は地球以外の人間であると考えたのである。と言っているのは、彼女ら2人は、お互いに向かい合っていていたが、その年齢は22〜23歳ぐらいに見える、化粧や、アクセサリーなど、何一つしていない。そのくせ2人とも、美人であり、子供のようにすき通るような、きれいな皮膚をしていた。はき物はかかとが低いサンダルをはき、その顔形は卵型で鼻はほど良い高さで、すじが良く通り、髪は耳の所より少し長く、とても良く整っている。そして2人の彼女は姉妹のようによく似ていたのである。スタイルはバツグンに良い。ちょっと見たところ、なんの変わりもない姿であるが、たしかに我々地球人の女性とは違うのである。よく絵画にある天女のような感じのする彼

女らである。

その語る言葉は電車の雑音で良く聞き取れなかったが、私は高なる胸を押さえ、待て！もし違っていたらと考え、そうして出来るだけ心を静め、1つの実験をして見ようと思った。もし宇宙人であるならば、テレパシーで私の心がわかるはずだと、私の方を向いている1人の女性に無言のまま語りかけた。私自身は寝ている時など、ときどきテレパシーで人の声が聞こえてくるが、意識のはっきりしている時などは、からきしだめなのであるが、ともかく無言で語りかけたのである。また横を向いている1人の女性にも代わるがわる送って見たのである。

そうしたら私の方に向いている女性が横を向いている女性に對して今まで話をしていただけなのに、こんどはウインクを何度もしましたのである。だが、横を向いている女性は絶対に私を見ようと振り向きはしなかった。ウインクと言っても、ウインクラしきウインクではなく目にゴミが入ったかのようにであるが、目に手をやる様子もなく、顔の筋肉がケイレンしているかのように作り動作を繰り返し、たくみに彼女らは通信をしているようである。

そして、そのとなりにいる1人の男性にも無言のまま、私は語りかけてみた。前を見てぼんやりしていたその男性が、なにか得体の知れない想念が飛び込んできたのびっくりしていた。私は思わず笑ったが、男は私の顔をジロジロ見ながら、変な顔をしていた。この男は、かっぱくの良い40過ぎのメガネをかけた、しらがのある人で、隣の彼女らとはなんの関係もなさそうだった。

そうこうしている間に電車は上野に着いてしまった。私は残念でならなかった。出来るならば彼女らのそばにいて話をしたかったのであるが、上野では電車が私を待っている。

私が彼女らを見た時の気持は男性が女性をいとおしむ気持ではなく、母を思ふような気持であるのに気付いたのである。

私に彼女らから言葉があったわけではないが、彼女らが他の世界の人であると言う確信を受けた。もう少し彼女らを見ていたかった。が、話をするきっかけがなかったし今となってはそれは出来ない。だが希望はある。他の世界の人々に必ず会え

るという心を私は捨てない。

●テレパシーは訓練によって開発できる。

「UFOと宇宙」誌(No.10号)の21ページにユリ・ゲラーの3歳の時の出来事が書いてあるが、これは人体にある7つの「力」のどれかの1つが目覚めたのだと考えられる。その「光」は目をつむっていても目を開けていても、超能力が目覚めたら、本人がなにも知らなくても、その力が現れるのである。それは訓練によって開発するか、事故によるショックによって目覚める場合もある。

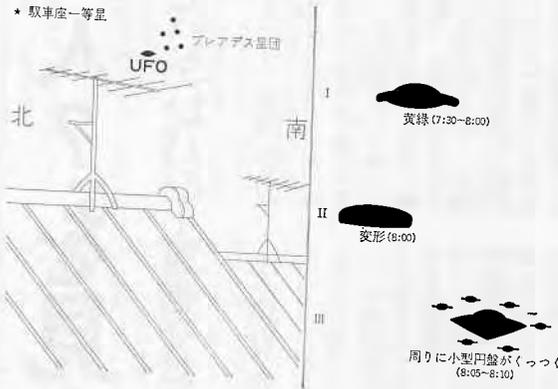
それは電氣的、靈的なものである。我々は常にその中にいて、すべての生物の生命を働かせているのである。弘法大師・空海も、この「光」を体験しているが、ヨガでは、この「光」を「明星」(チャクラ)と言っているが、私も少し前からいろいろな本を読み心の訓練などをやり、今では少しながらも様々な現象が起き、目にも見えるようになった。また私の目からは我々の心臓を動かすエネルギーとなる現象が見える。それは人間だけではなく、万物を生かしている源である。

それはジョージ・アダムスキの言う自由エネルギー(宇宙空間の英知と意識を持つ創造的な力)のことである。

UFO 目撃レポート

- ① 北海道立函館西高等学校地学部
- ② 一九七四年十一月五日午後5時15分頃
- ③ 北海道函館市弥生町
- ④ 晴（少々雲あり）
- ⑤ 約10分
- ⑥ 肉眼
- ⑦ I機、赤色をしていて円形。無音、物体の直径40メートル、高度一〇〇〇メートル。
- ⑧ 函館市東山上空に浮かんでいるUFOを発見。約3分間静止ののちゆっくり移動しはじめたが、時間の経過とともに光も弱まり小さくなっていった。飛行方向から駒ヶ岳方向に行くのではないかと思われたが、発見から10分後

・駅単座一等星



カペラ位の大きさになった時フツと消えた。

(千〇〇) 北海道函館市元町七一七

* * *

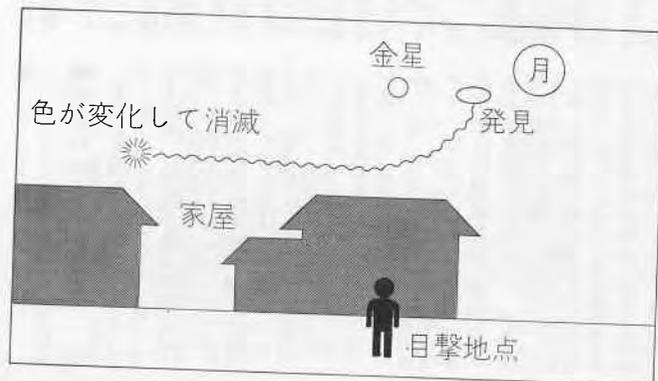
凡例

- ① 氏名(年齢)・職業・学校名
- ② 目撃日時
- ③ 目撃地点
- ④ 天候
- ⑤ 目撃継続時間
- ⑥ 同時目撃者
- ⑦ 観測機器・方法
- ⑧ 物体について
- ⑨ 飛行状態その他

()内は目撃者の住所

そして同年11月5日、観測中ハッと気づいた。プレアデス星団と同じ位かちょっと下にまるでタバコのまん中がふくれあがっているように見えるものを見つけた。色は黄緑色をして火星の2倍ほどあった。近くを歩いている人

そのときの大きさは10メートル位はあったと思う。近所の人たちは直径約30センチともいっていた。これは高知市に出現した円盤と同じだ!と僕は心の中で思った。それから毎夜、天体望遠鏡で夜の星を眺めた。月のクレーターを見たり、木星を見たりした。そうしているうち飛行機の飛ぶ時刻を覚えたり人工衛星らしいものを幾度か見たりした。



(千〇〇) 兵庫県姫路市福居町四二

* * *



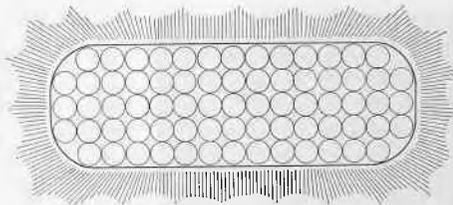
にもそのことを話し一緒に観測した。経緯台をのぞいて吐がづぶれた。タバコ型UFOのまわりに小さな赤色に光っている形は土星形で少しぼやけているのだ。そのとき「あっ」と驚いた。というのは同年6月に見た小型円盤と同じだと思ったからだ。そのことから姫路に基地があるのだろうかと思っただけで経緯台をのぞいて見た。すると今までいたUFOがいなくなっていた! せっかくのチャンスを見のがすことになってしまった。残念!

①磯塚一誠(26)短大助手
 ②一九七四年11月22日(金)午後6時1分
 ③埼玉県志木市本町3-7-33
 ④晴、微風
 ⑤約40秒
 ⑥なし
 ⑦肉眼
 ⑧大きさは金星の約二倍、白色に輝いていた。
 ⑨最初歩きながら月を見上げた時には物体に気がつかなかったが、5、6歩歩いた後、再び空を見上げた時、月と金星の中間位置に物体を発見、東から西に小さな振幅を繰り返しながらかなりの低速で飛行しており、速度に変化はなかった。
 約40秒後、物体は停止し突然、白色からオレンジ色に変化、約5秒後に消えた。高度は約300~500メートルで無音であった。

UFO発見は以前からの念願でありこの突然のできごとに多少興奮気味で観測したので目撃継続時間、高度など決して正確とはいえない。これによって宇宙の知的生物が地球を観測し、あるいはコンタクトしようとしていることが100%確信できるようになった。人間に醜い欲望と傲慢さがあるから宇宙からの来訪者が公の立場に立つのは、かなり先のことと思われる。そのため一人でも多くの人間が宇宙に目を開く



- ③自宅付近(風呂に行く途中)
- ④晴
- ⑤約5分
- ⑥次男

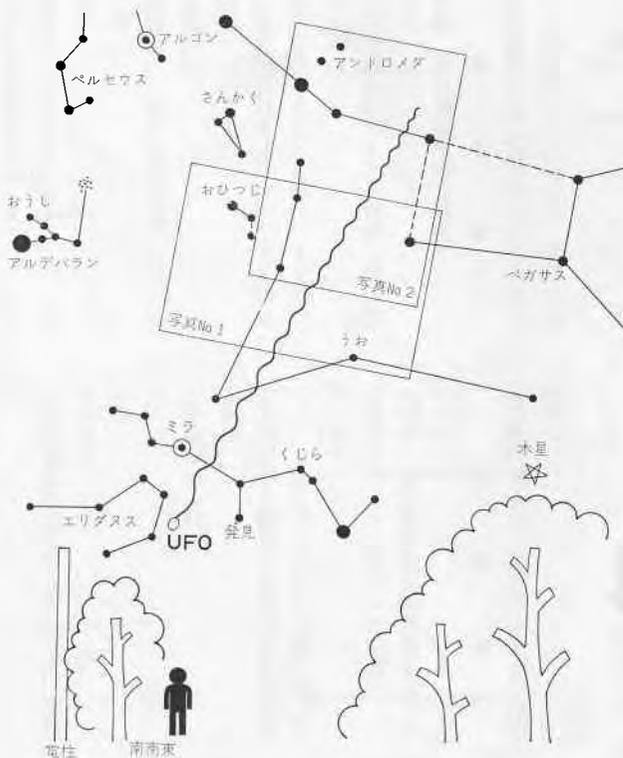


物体拡大図

①大野道男(42)社員
 ②一九七四年12月22日(日)午後5時30分頃

ことこそが急務であり貴社(ユニバース出版社)が宇宙的使命を背負っているというのは決して大きな表現ではないと思う。
 (〒所 東京都世田谷区上祖師谷四一三一一六)

- 1等星 ●2等星 ●3等星 ●4等星 ⊙変光星 ※星団



⑦肉眼
 ⑧一面が電灯のような光源でおおわれヘリコプター位のにぎやかさで明るい黄ダイダイ色に輝いていた。無音。
 ⑨地図のA地点で見えはじめた。東から西へ比較的低空をゆっくり飛行していてそのうちカーブして少し南の方に位置を移しながら下方に降りて来て止まった。歩いていたので一時建物にさえぎられて見えなくなったが、B地点でまた見えた。やはり同じところに止まっていた。そのうちにまた旋回しながら更に下方に降りて来て低空に止まった(BからCへ)。(しばらく止ま

っていたが、いつまでも見えていないで風呂屋に入ってしまった。車がたくさん通るし二歳の子供を連れていたので。
 (〒所 東京都葛飾区東金町二一〇、水元小倉住宅八八八)
 * * *
 ①松本誠司(14)当時柏市立柏中三年
 ②一九七四年12月1日午後8時3分頃
 ③千葉県柏市明原四二一三
 ④晴
 ⑤約4分
 ⑥なし
 ⑦肉眼および双眼鏡(6×25)、カメラ

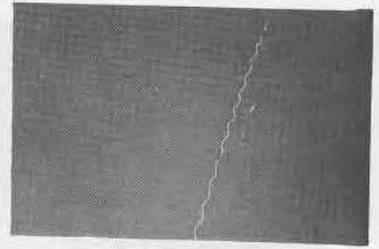


写真1

ラ(コニ
カE Eデ
ラックス
F 2.8 40
mm 絞り開
放30秒、
40秒/1
分フ
イルムSS
三脚レリ
ズ使

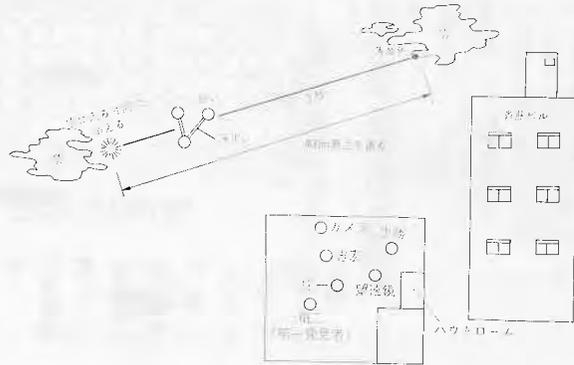
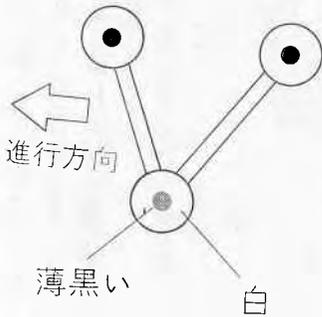


写真2

用) ⑧オレンジ色をしていて木星位の大き
さ。無音。

⑨仰角20°、方向・南南東から天頂付近
まで。南南東20°、オレンジ色で天頂付
近に近づくほど薄くなってきてその後
消えた。光度の変化は南南東20°で約2
等星位、その後天頂付近より約2等星
に下がった。これらは星座写真を写す
つもりで外へ出るとUFOらしき物体
を発見、はじめ人工衛星と思ったが、
動きが不規則でUFOと確信してい
る。これで私がUFOを見たのは2回

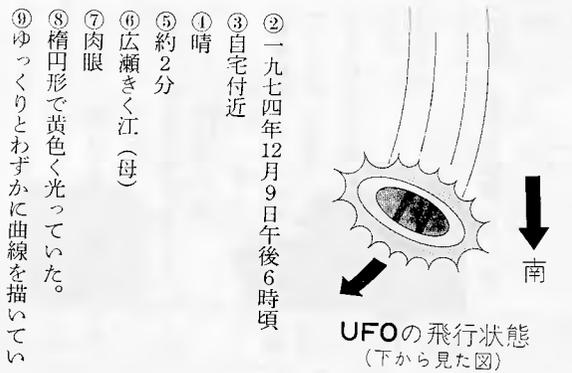
〈拡大図〉



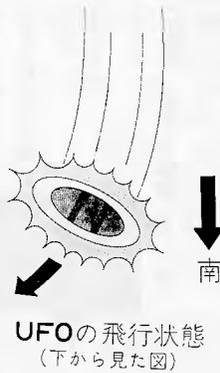
目だ。
(千17) 千葉県柏市明原町四一―二―
三) * * *
①斎藤庄一(13) 中学3年



- ②一九七四年九月初旬(土)
- ③東京ハットロームの屋上
- ④快晴
- ⑤3秒
- ⑥真野竜二(10)、真野忠勝(14)、石川吉宏(14)
- ⑦肉眼
- ⑧三角形の格好をしていた。3つの球形状のものうち2方向にパイプがつながっていた。
- ⑨これが猛スピードで一直線に飛んでいた。
- (千16) 東京都荒川区日暮里
- * * *
- ①石川吉宏(14) 荒川第十中学3年
- ②一九七四年12月27日(金) 午前9時



- 頃
- ③東京都港区南麻布五―六―八、愛育病院屋上
- ④曇
- ⑤4分
- ⑥斎藤庄一(13)
- ⑦肉眼
- ⑧1回目は2個見て薄黒い皿型円盤だった。2回目は1個で半円型で銀色っぽい色だった。
- ⑨非常にゆっくり飛行していた。
- (千16) 東京都荒川区西日暮里五―一―八一(八)
- * * *
- ①広瀬辰実(10) 当時名古屋市立稲西小4年



- ①晴
- ②約2分
- ③自宅付近
- ④一九七四年12月9日午後6時頃
- ⑤約2分
- ⑥広瀬さく江(母)
- ⑦肉眼
- ⑧楕円形で黄色く光っていた。
- ⑨ゆっくりとわずかに曲線を描いていた

て飛行していた。

(〒桐) 愛知県名古屋市中村区荒輪井
町一―一二三)

* * *

① 森本茂雄 (12) 佐倉市立下志津小6年

② 1回目・一九七四年12月25日(水) 午後7時30分頃、2回目・同日午後7時42分頃

③ 千葉県佐倉市上志津角栄団地内

④ 晴

⑤ 1回目3分、2回目4〜5分

⑥ 斎藤 敦 (12)

⑦ 肉眼

⑧⑨ オレンジ色で1回目は東北の方面に高度地上から500〜600メートル上空に見え、はじめは停止していたが、発見して70〜80秒ほどたったとき、動き出した。明るさはあまり強くはなく、大きさは火星の5倍ほど。音はなく3分ほど東北から南へと飛び去った。

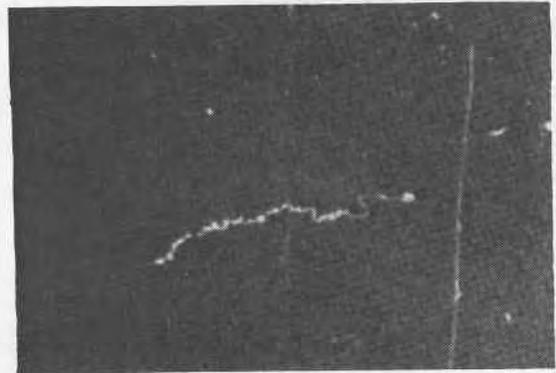
2回目は北の上空から南へ向かって動いているところを発見、発見後少したって消え、また少しして消え、ほんの少しずつ上昇しながら南の方へ行き途中で急に薄くなり波のようにウエーブしながら飛んでいった。

(〒郷) 千葉県佐倉市上志津一七〇一角栄団地一八三号)

* * *

① 釜石南高等学校地学部員数名

② 一九七四年8月6日午前3時25分頃



③ 岩手県釜石市甲子町の釜石南高等学校屋上

④ 晴天、雲が3〜5

⑤ 約20秒位

⑦ ミノルタSRTIII f55mm トライ

Xバンドール 固定13分露出

⑧ 色は赤い光線で写真のような形をしている。

⑨ 約20秒位発見のち一時消えたあと再び発見したがそれもすぐに消えた。

(〒郷) 岩手県釜石市甲子町、県立釜石南高等学校地学部)

* * *

① 鈴木 博 (52) 公務員

1回目

② 一九六〇年8月? 日午後9時頃

③ 愛知県海部郡蟹江町大字今蟹江浦 (当時自宅)

④ 晴

⑤ 約1分間

⑥ 妻、幸子 (42)

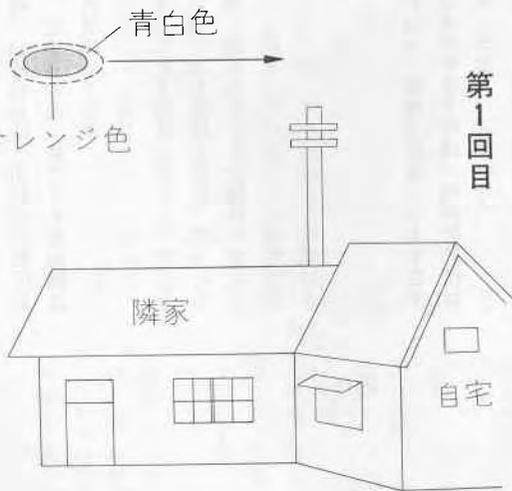
⑦ 肉眼

⑧ 庭に出て涼んでいると星がきれいだったので、ふと空を仰ぐと図のようなUFOを見た。先にアダムススキーの、『空飛ぶ円盤実見記』を読んだことが

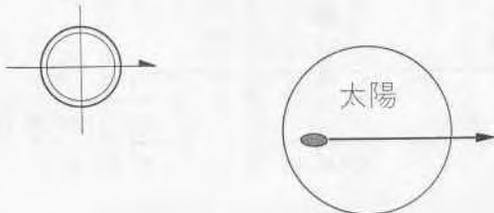
あるので、すぐ葉巻型母船だとわかった。高度はよくわからないが一〇〇〇メートル位ではないか。無音で仰角40位で西南西から西の方へ水平に飛んでいた。速度は高速と思われる。妻にあわてて合図したので妻も10秒位見ることができたが、UFOを信じていないので不思議なものとしか認識していない。

これからは常時カメラを携行しチャ

第1回目



第2回目



ンスがあれば必ず写してみたいと思っ
ている。

2回目

- ②一九七二年10月某日午後5時頃
- ③蟹江町大字西の森長三郎一四一―二の
自宅

④晴、風なし

⑤約5秒間

⑥なし

⑦アスコ100mm反経、50倍で沈む太陽を
見ていると、偶然凹盤らしい直径2メ
ートル位の物体が太陽面を通過した。

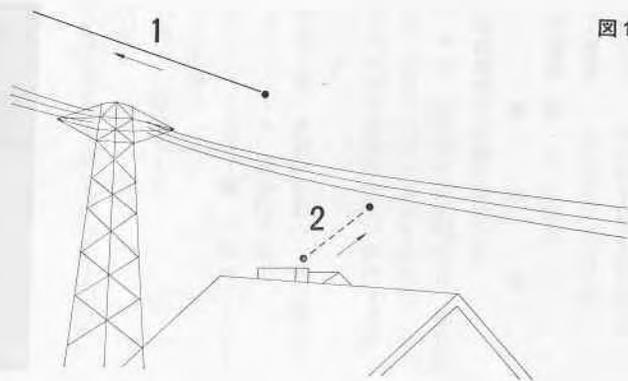
焦点が合っているのでかなり遠いと考
えられ、逆光だから黒く見えていたが
発光はわからなかった。全く凹形に見
えたので、地上の飛行物体ではない。
やはり相当の速度で南から北へ水平に
飛び、ちょっと目を放したスキに見失
った。

(干柳 愛知県海部郡蟹江町大字西の
森長三郎一四一―二)

星谷好寛

私は超常現象についての資料を集め
研究している者。私は数々の不思議な
体験をしてきた。予知能力、テレパシ
ーといったことなど。その中でテレパ
シーに非常に興味を持ち訓練してい
るが、ある時のこと、中岡俊哉氏の「続
・私は宇宙人を見た―テレパシーで凹
盤を呼んだ男」という本を読んで私も
テレパシー実験をしてみた。

図1



テレパシー実験そのI(一九七四年
10月24日午後10時から午前1時頃迄
テレパシーを送り続ける)

(1) 午後11時頃オレンジ色のマッチ
棒の頭位の物体が突然現れ、ものすご
い速度で1〜2秒間オレンジ色の尾を
引きながら北方へと消えた。

(2) 午後0時35分頃から1時頃迄テ
レパシーを送っていると消えたり光
ったりしている青白色の発光体を発見
した。その物体をしばらくながめてい
ると1等星位の大きさだが良く見つけ
るとオレンジ色にも点滅している①〜

②迄移動した時間は約30分である。場
所は、自宅の自分の部屋(2F)から
です。

テレパシー実験そのII(一九七四年
11月中旬午前8時30分から正午迄。
快晴。11時45分頃。川崎市川崎区扇
町、三菱石油内(株) 日本石油輸送
構内現場にて目撃)

テレパシーが通じたのかわからない
がUFOらしき物体が現れた。突然金
属性の強く光る物体が現れ、光ったと
共に黒く焼かれたような物体に変化し
南方へと消えていった。その状態は図
のとおり。光ってから消えた時間は5
秒位。

テレパシー実験そのIII(一九七四年
12月上旬午後5時頃。川崎駅前市営
バス(25番)バス停から)

ある一つの惑星に向かってテレパシ
ーを送信中、その惑星から赤色物体と
オレンジ色の物体がビューツ、ビュ
ーツと飛び出て来るのが、はっきり見え
た。快晴で少し風があった。目撃時間
は1分位。この実験では物体の状態は
わからないが、飛び出していたのを見
たことははっきり言える。

テレパシー実験そのIV(一九七四年
12月14日午後10時頃)

すみきった夜空の惑星に向かってテ

図2

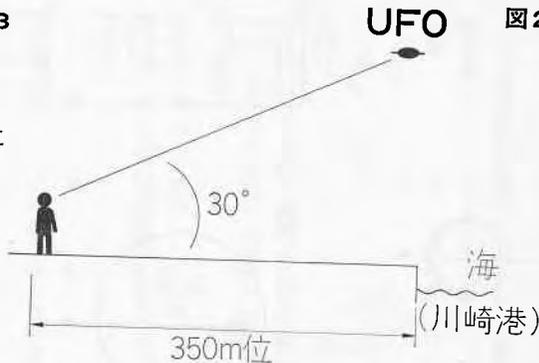
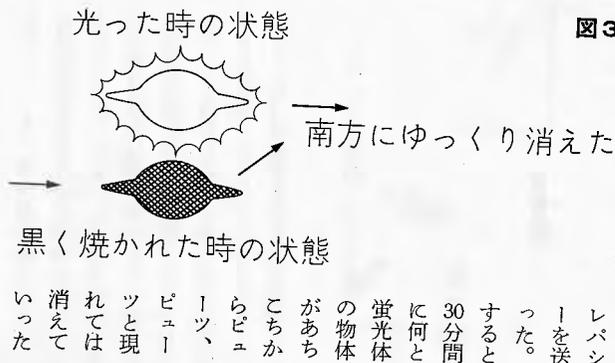


図3



速度はとても速く流れ星かと疑ったが一瞬に飛ぶ物体を確かめてみたところ何とも言えない物体であった。その数は20個にもなった。自分の2Fの部屋

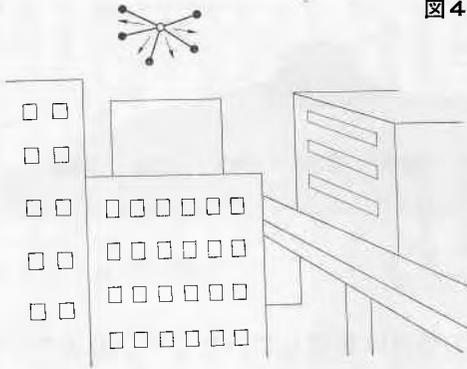
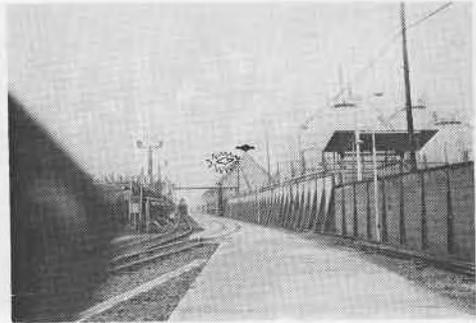


図4



写真中の“物体”は見たときの大きさを描いたもの

から目撃。

その他目撃例そのI (一九七〇年1月14日午前6時15分頃)

朝焼けの中にはっきりしないけれど、タバコの直径位ある物体を発見、朝焼けの中ではひときわ目立っておりオレンジより薄かった。2〜3秒停止していて突然消えた。場所は川崎駅より横浜市鶴見よりのビルとビルの間から目撃した。

その他目撃例そのII (一九七四年1月15日午後5時。晴天)

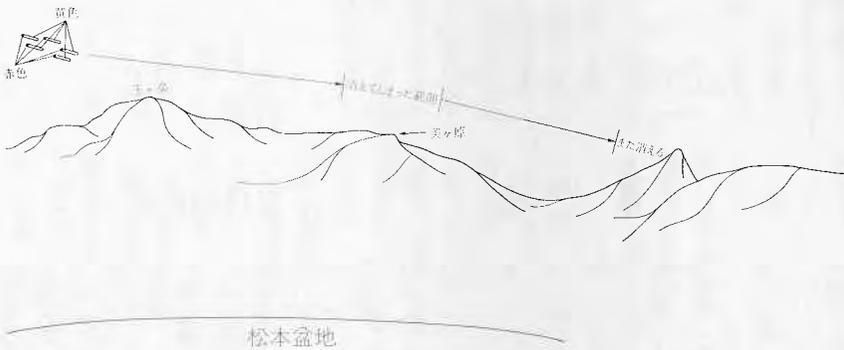
自分の部屋からなげなく夜景をながめていると赤色とオレンジ色に点滅して光っている発光物体(1等星より3倍大)が停止していた。その間10秒位点滅し突然スッと消えた。これらすべては自分以外の目撃者がいないことが残念だ。これらの目撃の物体がはっきり円盤だとは断言できないが、どうも本物のようだ。

(干洲 神奈川県川崎市高津区明津一九三)

* * *

- ① 斉藤恒彦 (14) 松本付属中2年
- ② 一九七五年1月15日 (水) 午後6時10分頃
- ③ 長野県松本市蟻ヶ峠の自宅の庭
- ④ 晴
- ⑤ 10〜15秒間
- ⑥ すずき川近くで子供たち数人

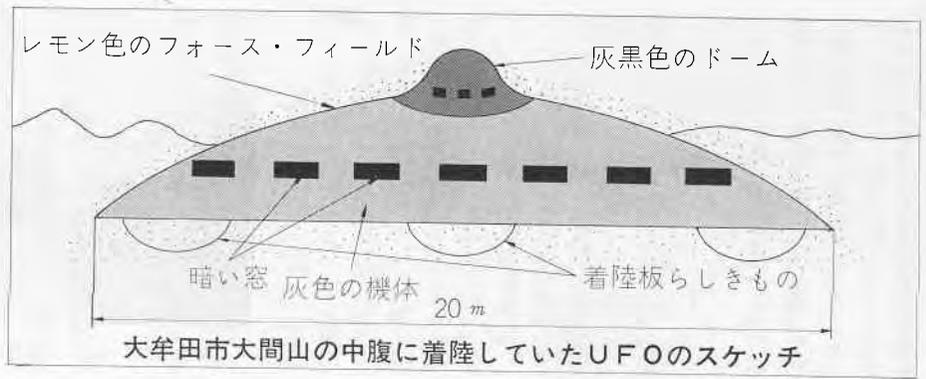
⑦ 肉眼
⑧ 棒状のUFOらしいものが5つ飛んでいた。
⑨ 北から南へ直線飛行(南下)していたが、初めは5つの編隊だったものが消え、ついで1つになり、山にかくれる前に消えた。光度は、3〜4等星



位。色ははじめ5つの色は黄色に輝やっていた。ただし船尾は少々オレンジ色だった。1つになったときはオレンジ色だった。
(干洲 長野県松本市蟻ヶ峠五二一八)

* * *

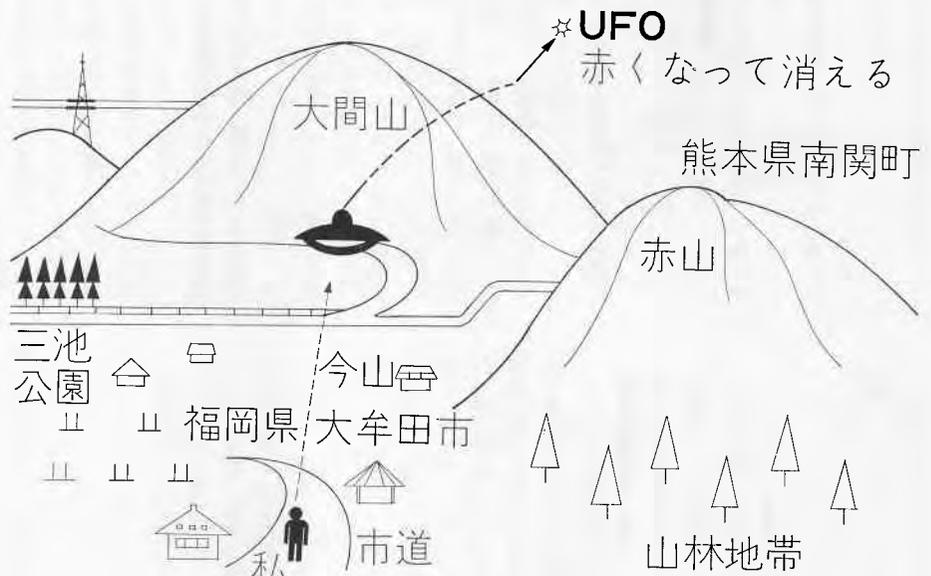
- ① 谷 弘之 (21) 僧侶
- ② 一九七四年1月27日午後11時30分から20分間
- ③ 福岡県大牟田市今山(大牟田市三池山)標高三三八メートル麓の車道(上)
- ④ 曇
- ⑤ 20分間
- ⑥ なし
- ⑦ 肉眼
- ⑧ 灰色の機体で下部着陸板部と付近一帯が長方形に明るく照光していてフォース・フィールドは、レモン色だった。
- ⑨ テレビ洋画「日曜ロードショー」を見た後、東部三池山麓を散歩中、向かいの大間山(標高二三三メートル)の中腹の車道上にUFOらしい物体が静止しているのを発見、誤認ではないかと注意して観察すると、下部が黄色に明るく照らし出されてそれらがはっきりした。いわゆる皿型の円盤で直径は20メートル位で着陸板みたいな丸いものらしいものが黄色に光って、あたりを照らし出していた。私が二〇〇メー



トル位の距離で近づくとフラットライト
が消えるように垂直離陸したようだ。
これで2回大間山に着陸しているのを
確認したことになる。

(千羽 福岡県大牟田市一ノ木八八五

UFOの目撃地図



- ① 興野雅典 (19) 大学生
- ② 一九七五年1月19日 (日) 午後1時

尾さんの考えではUFOは空から飛ん
で来たものでなく、桜島付近の山から
出てきたのではないかと語っている。
というのも最近では海や地中にUFOの
基地があるのではないかといわれてい

- ③ 鹿児島
の鹿島
の桜島
付近
- ④ 晴少し雲
があった
- ⑤ 不明
- ⑥ 笹尾剛一
(東京都荒
川区西尾久
五〇一〇一
一六)
- ⑦ 肉眼、カ
メラ (アサ
ヒペンタッ
クス) ゴ
ダックのカ
ラーフィル
ム
- ⑧ はっきり
した形はわ
からないが
バナナみた
いでもある
しブーメラ
ン形という
ような形と
いおうか。
- ⑨ 友人・笹

ることからいえるので、UFOに乗っ
ている人が地球人を観察しているの
ではないかと考えている。
(千羽 52 鹿児島県始良郡加治木町
諏訪五三)

- ① 登藤慎吾 (13) 網走市立第一中学校
1年
 - ② 一九七三年11月2日午後3時40分頃
 - ③ 網走市モヨロ貝塚海岸西防波堤入口
 - ④ やや曇り
 - ⑤ 約5秒
 - ⑥ 伊藤学君 (13)、山内康治君 (13)
 - ⑦ 肉眼
 - ⑧ 形は皿を2枚合わせたような形。色
は白で降下中、変化はなかった。音は
波の音でわからなかった。大きさは推
測で20〜30メートル位。
 - ⑨ 北北西から北西へ飛行。そのあと
は能取岬の陰の方へ行ってしまっ
て見えなくなった。高度は50〜60
メートル位。速度は水平線から出
て上に行くまではゆっくりだ
ったが、そこでいきなり横へ飛ん
で行った。その時はセスナ機位の
速さだった。
- 西防波堤から見る目撃したあたりの
風景は水族館や二ヶ岩などが見わた
せるところで、中に海をはさんでい
る。UFOはその場所からはっきりと見
える状態で飛んでいた。
- (千羽 北海道網走市南六条東一丁目
四一五四〇六)

科学 ニュース

多くなった呼吸器系疾患

●厚生省、国民健康調査発表

厚生省は48年度の国民健康調査の結果を昨年11月2日発表したが、それによると有病率がはじめて足踏み状態に落ちついたこと、また今度は人口高齢化によって微増の傾向が続くとみられるといっている。そのほか一般的な傾向として、慢性疾患の傾向がはつきりした。また急性の風邪が前年にひき続いて高い有病率を示していることなどを明らかにしている。

特に上昇しているのは風邪と呼吸器系、高血圧など循環器系、歯、胃腸や肝臓などの消化器

系、神経系、感覚器などの順になっている。呼吸器系が47年度から首位に出たのは、主として急性の風邪が異常に高率になったためで、これは環境汚染や都市の過密化が影響していると推測している。

地球の内部構造解明に一役

●南極観測隊が隕石を採取

「一度に82個の隕石（いんせき）を採集した。場所は昭和基地の南南西三〇〇キロ、やまと山脈の南側山ろく」との報告が南極第15次越冬隊長・村越望隊長から一九七四年12月20日文部省の南極観測推進本部（本部長・永井文相）にとどけられた。

「やまと山脈調査隊」を昨11月初めに編成し、やまと山脈A群の南東15キロの地点にベースキャンプを設け、隕石採集作業を進めていたが、ほぼ1週間の11月末までに82個という大量の隕石を集めた。そのほとんどが雪中に埋もれていたため、化学変化による傷が極めて少ないという「上質もの」。これらはおそらく「隕石シャワー」の名残りに違いないと話題になっている。

研究者の間では、これを分析

することによって地球内部の構造が解明できるし、地球形成のプロセスもわかると、もっぱら分析結果が待たれている。

宇宙から南米の地図づくり

●日本の国際協力事業団

わが国初めての人工衛星を使った地図作りが一九七五年早々海外技術協力の一環として南米ボリビアのアマゾン源流地帯ではじまっている。地上では調査不可能なところを「宇宙」から挑戦しようというもの。

わが国の地図作りは昭和のはじめから世界的にすぐれていて当時5万分の1の地図づくりで成功している。そして国際協力事業団は開発途上国の要請を受け昭和46年度から国内の技術者を東南アジアやアフリカへ派遣しており、すでにインドネシアとタンザニアの地図づくりに参加した。

今回担当するボリビアのチャパレー地区は首都ラパスから東へ約1キロの地点で日本からの移住者も多いところ。同国が今後重点的な開発を行うためには正確な5万分の1の地図が必要だが対象区域の2万平方メートルの60%は高さ20〜30メートル

の樹木でおおわれている熱帯性密林地帯で地上からの作業がむずかしいところ。

調査には「ジオシーバー」という受信装置をヘリコプターでジャングルの数地点におろしすでに打ち上げられているアメリカの電波衛星から発信される電波を地上で受信しそれを分析して作るというもの。この地図の完成は52年の予定である。

新しい甘味植物にステビア

●甘さは砂糖の三〇〇倍

砂糖にかわる植物を——ということで今新しい植物をさがしているが、パラグアイ原産のキク科植物の「ステビア」がその候補にあがっている。ステビアを持ち込んだのは一九七四年12月現在、農事試験場畑作部（埼玉県北本市）の主任研究官、住田哲也さんで、昨44年にブラジルへ農林省から派遣されたとき

ブラジル奥地やパラグアイで原住民が「甘い草」と呼んで珍重していることから発見した。

今、住田さんは「ステビア」の種子を持ち帰り、各地の農業試験場に配って試験栽培を始めているが、今全国43カ所で気候、土壌、肥料との適性を見き

わめるテストを続けている。ステビアは草丈約60センチで葉の長さは6センチ前後。甘さは砂糖の三〇〇倍、カロリーは砂糖の一〇〇分の一というところで「美容甘味料」として注目されている。

収量はてん糖に比べ5〜10倍の栽培効果をもつが、寒冷地の栽培はむづかしい。しかし関東地方では問題は少ない。5月頃定植すれば秋までに3回は切り取ることができるという。

問題点として考えられるのは①甘みが強いのでアブラムシなどがつきやすい②種子が小さすぎて発芽率が低い③このため採分が必要だが原料作物として採算が合うかどうかなどがある。

また一つ考えられる別の面として避妊の副作用があるのではないかとの説もあること。農林水産技術会議の坂井健吉研究管理官は「ネズミの実験で不妊率が高まったとパラグアイの医師の報告があった。しかしアメリカの学者が追跡調査した結果では、そのような事実はつかめなかった。ただブラジルのある州の原住民の女性がステビアを経口避妊薬として用いているといわれ、かれらは経験的に何か

をつかんでいるかもしれない」と話している。

H B抗原はウイルス！

●東大・志方助教が断定

血清肝炎、肝硬変、肝ガンの原因とみられ本態解明の待たれていた「H B抗原（B型肝炎抗原）」は直径四二〇ミクロンの球形ウイルス（DNA型、デオキシリボ核酸型）であることが一九七四年十二月末、東大医学部の志方俊夫助教（病理学）らの研究で断定された。同抗原はアメリカの学者らの最近の研究成果からウイルス説が有力視されていたが、いま一步のところで完全な証明に結びつかなかった。志方助教らの研究はこれに最後の決め手を与えたもので国際的にも高く評価されよう。この解明でこれまで手がかりのつかみにくかった難治性肝炎の予防、治療対策が今後飛躍的に発展しそうだ。

この結果について志方助教は「われわれの実験やアメリカの研究者らがすでに発表している報告などからみて、H B抗原がDNA型ウイルスであり、肝細胞のなかでふえることは一〇〇パーセント確実となった。肝

細胞に侵入したH Bウイルスは細胞質で、まとまっていたコアたんぱく（被覆たんぱく）の「着物」をぬぎすて「はだか」のコア（ウイルス粒子に特有な内部構造で直径二四〇ミクロン）は再び細胞質中に出て、ここでコアとは別な増殖を続けていたコアたんぱくと合体し、元のような完全なウイルスになり細胞外へ飛び出して行くのだ」と説明している。

ガン細胞を正常細胞に変える

●ガン治療に明るいきざし

ひとたびガン化した細胞は再び正常に戻ることはないと思われていたが、一九七五年一月四日報道によると、わが国の3つのガン研究グループがそれぞれ独自に白血病のガン細胞を正常な細胞に変える脱ガン実験に成功した。まだ試験管培養の段階だがガン完治へのカギとなることはまずまちがいないようだ。

ガン細胞を正常細胞に戻す実験に成功したのは癌研究会癌研究所（東京・池袋）、京都大学ウイルス研究所、国立ガンセンター（東京・築地）の3研究グループ。

まず癌研グループ（菅野晴夫所長、井川洋二主任研究員、古沢満・大阪市大助教）はネズミの赤血球のガン細胞（フレンド細胞）を培養、これにDNA合成阻害剤など細胞の増殖機構を阻害するいろいろな化学物質を与える研究中、DMSO（デイメル・スルフォキシド）という物質がフレンド細胞を正常な赤血球細胞に戻し、ガン細胞で失われる機能（ヘモグロビンを作るメッセンジャーRNAの合成）を回復することを発見した。ガン細胞は無色で単に増殖するだけなのに対し、ほぼ正常化した赤血球は色も黄色で、ほとんど増殖が見られず、酸素を運ぶヘモグロビンが生産されている。

これでは白血球は形成途上の赤血球にまで成熟できない分化異常が原因であることを明らかにした。

また、京大ウイルス研究所・市川康夫助教はネズミを使った研究でガンを正常化する有効成分を発見し「D1ファクター」と名づけた。

国立ガンセンターの穂積本男・共通実験室長らも、京大グループと同じように白血球細胞を

別の方法で正常細胞につくりあげた。これによってガン細胞を正常化する成分は分子量が五〇〇〇から一〇万の間にあるタンパク質であることも突き止めた。

最初のグループの菅野癌研究所長は「白血病細胞に限らずどんなガン細胞も原理的には正常細胞に近いところまで分化させることができるはずだ」という。また、DNSOや、D1ファクターの機能の詳細は今後の研究に待たなければならぬが、こうした物質はガン細胞が成熟するのを阻害している「留め金」を外す作用をすとみられている。

パイ中間子発生装置でガン治療へ

●エックス線の3倍の効果

スタンフォード大学の放射線科のカプラン博士、物理学科のシュベットマン教授らの研究グループは一九七五年一月24日、パイ中間子発生装置を使ったガン治療法を開発したと1月25日発表した。

カプラン博士によると、口腔（こうこう）、咽喉（いんこう）ガン、脳しゅよう、肺ガン

のほかに従来の放射線治療では効かなかった種類のガン治療に効果をあげ「エックス線照射より約3倍の破壊力でガン細胞を殺す」という。

実際に患者に適用されるまでには3～5年の実験が必要だがうまくいけばガン治療の一里塚になると期待されている。

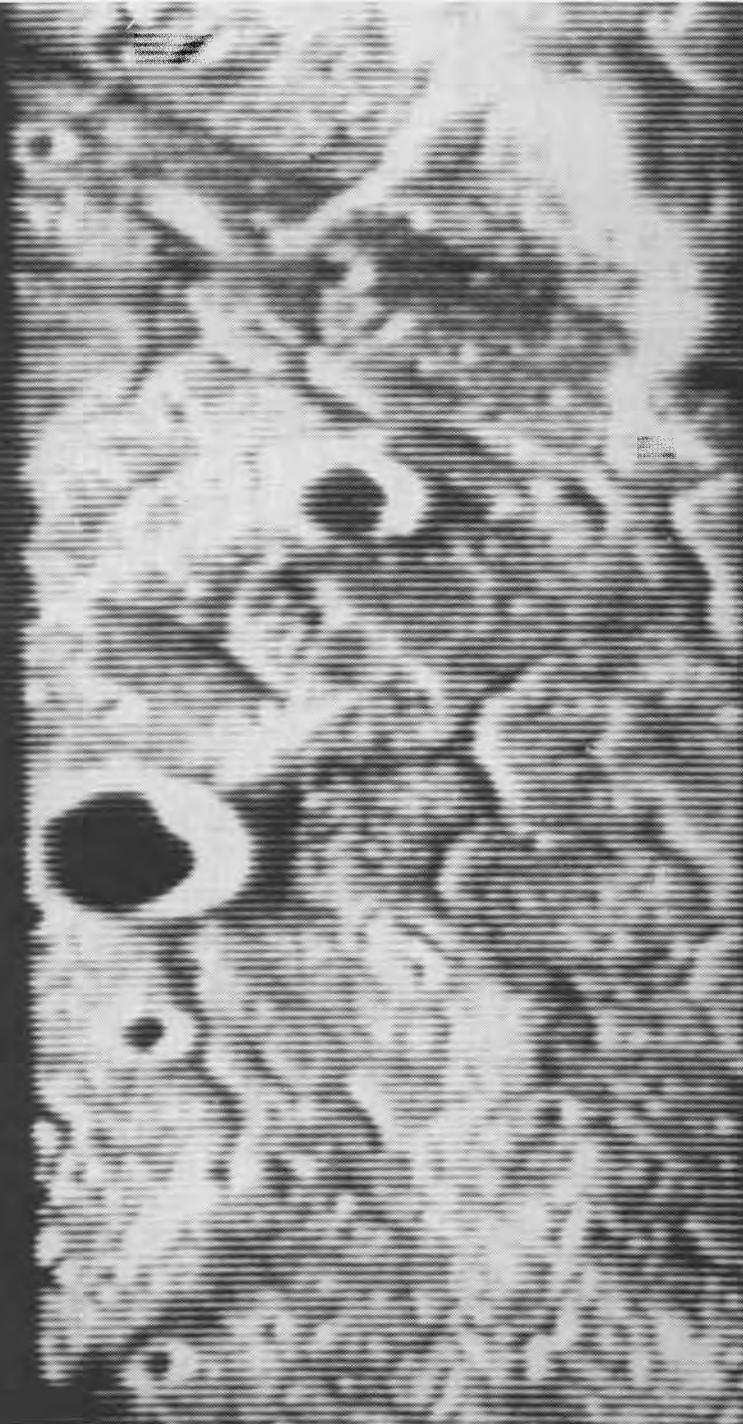
新しい装置は「医療パイ中間子発生装置」といわれ、高エネルギーの加速器によって発生したパイ中間子の流れを利用するものである。

骨を再生させる物質発見

●名古屋大の中川教授

骨からカルシウム分を取り除いた「脱灰骨」の中の「コラーゲン」と呼ばれるたんぱく質の一種などに、他の細胞に働きかけて骨を発生させる能力がある点に着目した名古屋大学医学部整形外科（中川正教授）が骨からその物質をとり出す方法を開発、このほど（一九七五年一月7日報道）骨に開いた空洞を埋める初の臨床治療を行った。治療結果は間もなく明らかになるが、経過は良好といわれる。

開発したのは同科の岩田久助手（37）を中心とした「結合織



●水星に150キロまで接近

米航空宇宙局ジェット推進研究所は、3月16日米国の無人惑星探査機“マリナー10号”が同日の日本時間午前7時40分、水星に150キロ接近し、その夜の部分の撮影に成功したと発表した。“マリナー10号”はこれに先立ち17日午前5時45分から同8時30分まで320枚以上の写真を送信してきている。

グループ(12人)。研究の結果、脱脂した骨を塩酸につけカルシウム分を取り除き、ついで塩化リチウム、水、酢酸にそれぞれ24時間以上つけて活性を強くし、最後に氷点下30度で冷凍乾燥するプロセスを編み出し、取り出した物質に「骨生成因子」と名づけた。

ネズミの骨からとった「骨生成因子」をネズミの腹腔に移植したところ、一カ月後に筋肉内に骨が出来、形成能力の強さがわかった。この後、手の骨からとった「骨生成因子」をネズミに移植しても同じ効果が現れた。

岩田助手ら同グループの説明によると、この「骨生成因子」の能力は直径2センチの空洞を埋めるに十分であり、外部から検査した結果では、手術経過は順調に進んでいるという。昨年11月に大タイ骨に直径2センチの空洞が出来た女兒にこの治療を応用したが、その結果、骨の空洞は埋まることが確実だとい

●ガン細胞からウイルス培養

米国で白血病のウイルスの分

離培養実験に成功したと1月8日発表された。実験したのは全米ガン研究所(NCI)のロバート・ガロ、ロバート・ガラハ

ー両博士。両博士の発表によると、この実験は61歳の白血病患者(女性)のガン細胞から抽出したウイルスを培養したという。この成功により白血病の早期発見はもとより治療効果の観察の向上、さらにはワクチン開発の基礎作りへの第一歩になると語っている。

ガン細胞からウイルスを分離培養したケースは過去3年間に数件あったが、その後の実験の結果、これらのウイルスが純粹の人間のガン・ウイルスだったとの確証は出ていない。したがって今回の実験が確実なものとなれば、初めて人間ガン・ウイルスの分離培養となる。

●ゴキブリ興奮物質を発見!

セイタカアワダチソウからおいを感じるとゴキブリが興奮して気が狂ったようにかまわるといことがこの1月発見された。発見したのは三菱化成

生命科学研究所副主任研究員の

西野親生さん。

セイタカアワダチソウというのは秋、黄色の小さい花をつける草で北アメリカから渡ってきた植物だが、いまでは関西、中部地方などで大変な勢力となっている。この興奮物質は炭素が15くっついているセスキテルペンアルコールの一種で、セイタカアワダチソウ7キロからほんの数ミリしかとれず、もっぱら葉の部分に含まれている。

この物質はミリグラムをワモンゴキブリを飼っている箱の中に入れてゴキブリたちは触角をふるわせ、この揮発性物質を感知しようとする。奇妙なことこの物質に近づこうとしないのだが、もともと光のきらいなワモンゴキブリが光のあるところに出てきて落ち着きなく動き回りはじめ。中には気の狂ったように走り回るものもあり、全体として狂暴になる。体がぶつかると、互いに噛み合う。これらワモンゴキブリの動き回る様は、ちょうどアルコールを飲んだ人間のバカ騒動に似ているところから一種の「酔い」の現象とみられる。

ただ、この物質をゴキブリ退治にどう結びつけるかは今のと

ころはつきりしていない。

●スカイラブに自爆装置

地球への落下時の被害予防に米航空宇宙局(NASA)は5年以内に軌道宇宙ステーション「スカイラブ」に飛行士のグループを送り、この巨大な実験室に自爆装置を取りつけることを考えている(一九七五年1月14日報道)。スカイラブは現在、高度三〇〇キロの軌道を回っており、その重量は1月11日に落下したサターン5型ロケット第二段の2倍に近い。

NASAではこの72トンのスカイラブが一九八一年以降に地球に落下する際に引き起こすと予想される問題を心配している。そしてどの程度の危険があるかを調べる作業にとりかかっている。それとともにNASAが考えているのは、70年代の終わり頃には実用化できるスペース・シャトルを使って7人の飛行士と技師のチームを送り込み、スカイ・ラブが降下してくる際の危険を取り除こうというもの。

マンモスの「メニュー」は?

●死因なども究明

ソ連の科学者たちがシベリアで発掘されたマンモスの遺体からマンモスの「メニュー」をつきとめた、と1月13日モスクワ放送が伝えた。

このマンモスは水久凍土帯で発見され保存状態がよく胃に食べたものがそのまま残っていた。調査委員会によると、「主食」は草の茎で「副食」にはヤナギ、シラカバ、ハンノキなどの芽を食べた。

炭素ラジオアイソトープによる絶対年齢測定法によると60歳のオス。四万一〇〇〇年前に沼に落ちて死んだことがわかり、専門家たちは極北の太古の動物の死因は急激な温暖化で水が解けツンドラ(凍原)が沼地化したためとみている。

●「気象兵器」ただ今開発中

米国防省が気候変化めざし

1月15日付クリスチャン・サイエンス・モニター紙が報じるところによると米国防省は「気象兵器」を開発中である。これは人工の洪水、かんばつ、潮の干満、ハリケーンなどを起こす

もので、開発予算は年間6億円以上も組まれている。

米国防省は去年5月、ベトナム戦争中に東南アジア地区で人工雨を起こす秘密実験をしたことを認めている。この実験の目的は橋や堤防、道路を破壊する洪水の研究だったという。

国連は74年の総会でジュネーブの軍縮委に対し国家間の安全生物や人間の生存に重大な影響を与える兵器として環境や気候を変化させるものを禁止する国際協定を起草するよう勧告している。

モーゼを追って死んだ王はだれか？

●3王のミイラから分析へ

カイロ博物館の研究者と国際的放射線学、解剖学の合同調査団が同博物館収蔵の全ミイラを調べなおし、とくにその死因を調べることによって旧約聖書、ローランにある三千数百年前の「出エジプト記」に初めて科学的研究を加えると1月22日発カエロの朝日新聞特派員が伝えている。とくにポイントとなるのはモーゼを追って紅海の波にのまれたエジプトの王（ファラオ）はだれかだが、これまでのところ、その王は第19王朝のメルネプタハではないかとの説が

有力になってきているが、科学者たちはその真偽を調べることに慎重である。

3年前にX線撮影で各ミイラの写真をとったが、昨年末からスタートした調査は各ミイラの死因を総合的に決定するのが目的で、最大の焦点は「水死体」の発見だった。

調査団はエジプト文化次官がマール・モクタール博士、アレキサンドリア大のアグデル・ラーマン・アサアール教授、ミシガン大のジェームス・ハリス教授、カナダ・トロント大のアーサー・ストール教授ら歴史考古学、放射線学、解剖学の専門家10人で、骨と皮だけのミイラからもその死因を判断する新しい技術を開発したという。

旧約聖書、出エジプト記には「モーゼが手を海の上に差しおると、海は陸地となり、水は分かれた。イスラエルの人びとは海の中の乾いた地を行った。エジプト人は追ってきてファラオの馬と戦車と騎兵もあとから海に入った。しかしイスラエルの渡った後、水は戻り、国王の全軍勢の戦車と騎兵を覆い、一人も残らなかった」（二四章）とある。

この物語の事実関係をさぐることにしているが、その決め手は何もない。学会の定説としてはモーゼがエジプトを出た事実には西暦前一二七〇年頃とされていることから出エジプトは第19王朝の間に起こったとし、中でもラムセス2世、メルネプタハ、シープタハ3代の内いずれかではないかと思われてきた。

しかし紅海の波にのまれたことが本当なら王の遺体は流されて残っていないはずだとの疑問も出ているが、これに対しローランは、おぼれかけた王が神にすがり自分も神を信じると哀訴するが、神の怒りは静まらないう。「しかし、今日のところは前を身体ごと助けておいて、後から来るものへの徴（しるし）にしよう」というところもあることから、王の水死体は岸に打ちあげられ、人々が手厚く葬ったと解釈されるので、3人の王のうちだれかに水死体があるはずだと、その究明を手がけている。

3国王の遺体のうちメルネプタハの遺体は白っぽい顔の形がくずれ、まゆ毛を塗料で直したところもあり、耳がなかに食いちぎられているように欠けた

ところもあり、また、全身に塩分が付着していることもあるのでこの王にまずまちがいないとの見当をつけている。

だが、死因の最終決定はX線撮影の再調査と皮膚組織の解剖学的研究後、総合的に下されるが、それは2月の下旬にまとまると報告されている。

見 古代エジプトの将軍の墓発見

●その名は「ハルエムヘブ」

エジプト、英国、オランダ3国合同の考古学調査団がこのほど（1月31日）UPI共同によれば、カイロ南、サッカラの砂ばくで古代エジプト新王国時代に将軍として活躍したハルエムヘブの墓を発見した。ハルエムヘブは第18世王朝時代にツタンカーメン王のもとで将軍としてエジプト軍を指揮、自らも紀元前一三三五年に王となった。将軍として第19世王朝ラムセス2世らがシリア地方まで遠征するほどの強力なエジプトの基礎をつくった人である。

この墓は同調査団が偶然発見したもので碑文にハルエムヘブの名前を記した柱石を掘り当てた。しかし墓そのものは砂に埋

まっっており完全に発掘するまでまだ3週間以上かかるという。団員らは現在知られていないハルエムヘブの家族や王になるまでの経歴など資料が見つかるのではないかと期待している。

硫黄島付近に硫黄が噴出

●日航の機長が報告

1月31日夕方、グワムから羽田に到着した日航九四二便の機長が「同日午後4時8分頃、小笠原諸島・南硫黄島の北東約9キロ付近（北緯二四度一六分、東径一四一度二七分）で海底から硫黄が噴き出しているのを見た」と東京国際空港事務所を通じて海上保安庁に報告してきた。同行によると、この付近は富士火山帯の延長上にあたっているとのこと。

休火山から噴気が発生

●大分県の鶴見岳

大分県別府市郊外の休火山・鶴見岳（一三七五メートル）が一九七四年12月に入って頂上付近から連日一〇〇～一五〇メートルの噴気を出し始めた。この異常な噴気が観測されたのは20数年ぶりのことで、大分地方気象台（河野幸男台長）は一九七

五年12月21日、河野台長ら4人の係員が現地調査した。

同気象台に入った情報によると現場は頂上から五〇〇メートル北西に下った地獄谷といわれる周辺。白い噴気は硫黄孔から常に出ているが、12月に入ってから急に高さ一〇〇—一五〇メートルぐらいの白い噴気が立ち上り始めた。付近にはこぶし大の石が散らばっている。

鶴見岳噴火の記録は、一一〇〇年前で、それ以来目立った火山活動はなかったが、昭和22、23年頃、今回と同じ程度の噴気が観測されている。

鶴見岳から5キロ離れた京大理学部付属地球物理学研究所に置かれた地震計には地震が記録されていないところから噴気が爆発によって吹き上げられた可能性は薄いという。噴気には水分があり、地熱が高まれば起るもので、地熱と水分の条件が重なり寒くなると水蒸気が凝結しやすく噴気がよく見えるようになったと推測している。

●九州一円に断続10日間も

1月22日午後1時40分すぎ九州一円に地震があり、熊本県阿

蘇山測候所で震度4、宮崎市延岡市で震度3を記録、九州ほぼ全域が揺れた。九州で震度4を記録したのは45年の日向灘地震以来である。

この震度4の地震のあと同日午後7時までに震度0の地震が40回も続いており、福岡管区気象台では爆発との関連性が皆無とはいえないと緊張している。

* * *

この地震は23日もひん発、とくに夜に入って強い有感地震が続き午後11時19分過ぎには震源地付近で震度5、4を記録、福岡、北九州市内でもビルが揺れるなど全九州でも地震を感じた。

阿蘇山ろくではこの大型地震で民家が倒壊、道路に落石があるなど被害が出た。また同山ろくの約2万戸が一時停電した。

23日の地震は昼間は比較的少なくなったが、同地方で同夜8時55分に震度3を記録してからは30分から数秒おきに断続的な大型地震に襲われ、住民はまんじりともしていない。

一の宮署は、署員50人を非常招集して特別警戒しているが、同署に入った連絡では阿蘇郡産山村の阿蘇山ろくに住む農業、

荒木初男さん方の裏山が高さ50メートル、幅10メートルにわたってくずれ、母屋の炊事場は土砂で倒壊した。

福岡管区気象台の観測によると22日の地震が発生した午後1時40分から24日午後零時までに阿蘇で震度5が1回、震度4が2回など有感地震が20回あった。

震源地はいずれも阿蘇山東側の同じ場所でごく浅い震源。

この地震の現地調査をしている京大火山研究所所長の久保寺章教授は「群発型の地震」と見ている。同教授の話では、この型の地震はさる40年8月から41年10月にかけて1カ月一〇〇〇回以上(有感)も発生した「松代地震」が、いまだに月1回の余震を続けており、これまでに6万回以上の地震を記録している。今回の地震についても「マグニチュード5—6程度で、マグニチュード7になる心配はないと思うがいつまで続くかは見当もつかない」と、第2の松代地震を予測している。

* * *

この阿蘇地方で群発している地震は25日は、午前11時までに4回の有感地震を福岡管区気象

台で記録した。

この地震で最も被害のひどかったのは阿蘇郡一の宮町手野地区の80世帯、一五〇人で24日もたんぼの中のビニールハウスでザコ寝して過ごした。被害は80世帯のうちほとんどが全壊、倒壊寸前になった。

25日は午後11時45分現在までに7回の有感地震を記録した。

* * *

この地震について京大火山研究所(熊本県阿蘇郡長陽村)の須藤靖明助手らが得たデータによると、これまで確認されていなかった「地震活動帯」が阿蘇西外輪山に沿って南北に伸びていることが明らかになった。

同助手らは、今回の連続地震もこの活動で地殻のひずみが起こったためではないかと「火山性」を否定する新しい説をとなえている。

西外輪山に地震活動があることとは昭和7年頃からわかっていたが、45年から須藤助手ら京大火山研の若手専門家3人が無感地震よりさらに小規模の極微小地震を含めたあらゆる地震を丹念に追跡したところ、47年1月中には西外輪山北部で20個の地震が観測されたのをはじめ、45

年8月、46年6月、同7月など毎月10数個の地震が起きていたことがわかった。このことから西外輪山に沿って南北に地震活動が確認されたという。

これらの地震はいずれも地下25、10キロの浅いところで起っているのがほとんどで、なかには地下20キロぐらいのものもあるという。須藤助手によるとこの地震活動帯は地質構造線にあるものと考えられる以外には説明がつけにくく、構造線の東西両線で地殻のひずみが起こり、それが地震になるのではないかという。

この「東北構造線」と大分—熊本の東西構造線がまじわる鞍岳(一一一九メートル)付近は地震の集中地帯となっていることも観測の結果わかった。今回の連続的地震もこの西外輪山沿い地震活動帯の地震とみれば説明がつくという。

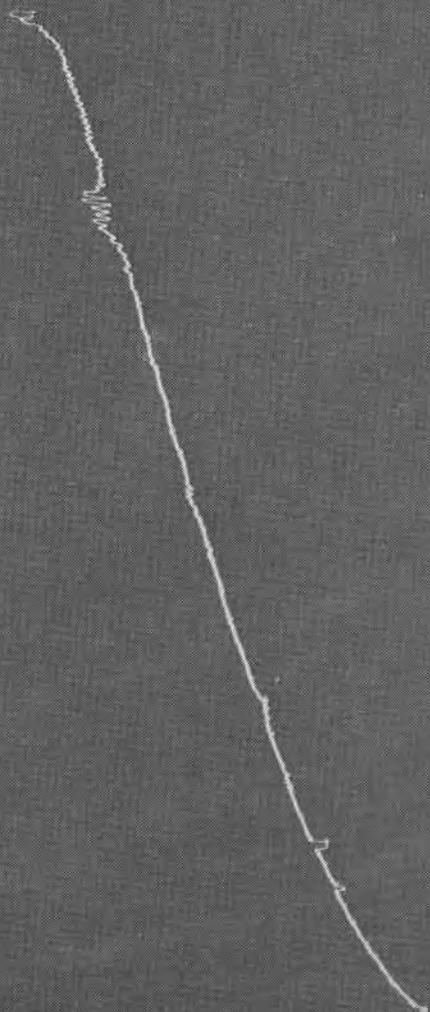
* * *

25日以来小康状態を保っていたが、28日午後7時6分また震度3を記録した。

30日は午後零時40分に震度1を記録、そのあとは31日午前6時55分に震度1、同8時49分と52分に震度2を記録した。

美しい白線の軌跡！

●1975年2月17日午後11時、横浜市の榎本秀夫君(13歳・当時中1)らクラスメート5人は屋上で天体を観測中、北の空に円形の物体が黄白色に光っているのを発見、約3分間目撃した。物体は1度止まり、また急に飛び去った。この写真は金子秀明君(13)撮影のもの。写真提供者は榎本君。(ニコンF・ニッコール135mm・開放・10秒・ネオパンSS・三脚使用)



●〈天空と大地〉科学シリーズ(10)

重力波とは何か

東北大学工学部助教授 千葉二郎

強力な重力波放射機を開発した東北大の千葉助教授が、世界のトップレベルをめぐり理論と研究現状を解説する。

——重力波はアインシュタインが最初に一般相対性理論の重力場の方程式の

答えとして示した光速で伝わる波動である——

1 重力波を予言するもの

音波も電波も通らないようなところでもよく通る波はないだろうか？ということは通信工学あるいは情報工学に関心をもつ人なら誰でも考えることである。静的な重力はしゃへいできない性質のものであることは理論的にも、あるいはなかなば経験的にも知られている事実であるが、現在の理論によれば重力波も重力と同じようにしゃへいが困難であって媒質による損失が極端に小さい波であることが既に明らかにされている。

ラジオやテレビジョンを例にとるまでもなく人間は音波と電磁波という二つの波を利用して通信をしている。通信路の途中で用いることもあるし、ま

た、少なくとも最終的には可視領域の電磁波に感じる眼、可聴周波数の音波に感じる耳で情報を得ることになる。

重力波が人間にどのような感覚作用を及ぼすかは不明であるが、物理的な性質は多くの重力理論が予想を与えてくれる。理論が示す性質の中で、通信工学や情報工学の立場から特に関心が持たれるのは重力波の発生、検出の困難なことと優れた透過性である。この波は理論に従えば、普通の大気中や真空中はもちろんであるが、その透過性から考えると海中通信、地中通信、あるいは電波、音波が通りにくい場所や媒質中への通信などにも適当であろう。このような新しい波の研究には通

信工学、情報工学上の意義が見いだされる。ここでは初め重力波に基礎を与えている重力理論について、従来どのような理論があつてそれがどの現象までを支配するものなのかをくわしく分析して重力理論の現状を把握することにした。そのあとで重力波研究の現状を詳細に知ることしよう。

アインシュタインは一九一六年彼が以前に発表していた一般相対性理論に含まれている場の方程式（アインシュタインの方程式）の答えの一つとして重力波という波があることを最初に理論的に指摘した。このようなことや時空に対する考え方の新しさの故に重力理論の中でもアインシュタインの一般相対性理論は特に有名である。ところが実際にはその他にもたくさんの方が研究者によって驚くほど多数の重力理論が提案されているのである。最近ウィルは論文を発表し、これら重力理論全部を理論的な「ふるい」にかけることに

よつて、現時点において育ち得ると認められる理論と現時点において育ち得ないと認められる理論とに選別した。それによると、既存の理論ではアインシュタインの一般相対性理論を含めて四つの理論が多くのテストに耐えて現在育ち得ると認められる理論ということになる。これらの理論は重力波を予言している。一九六九年にウェバーは自分の観測データを示し「これらのデータは検出器が重力波によつて励振されているという結論と矛盾しない」と発表した。

それについて現在世界の各地で追試が続けられており、白熱の論議が展開されている。けれどもこれまでの追試の結果はウェバーの報告した結果を再現していない。重力理論が異口同音に予言している重力波が音波、電波につづく第三番目の波として産声をあげるかどうかが、人類のものとなるかどうかは興味ある問題である。

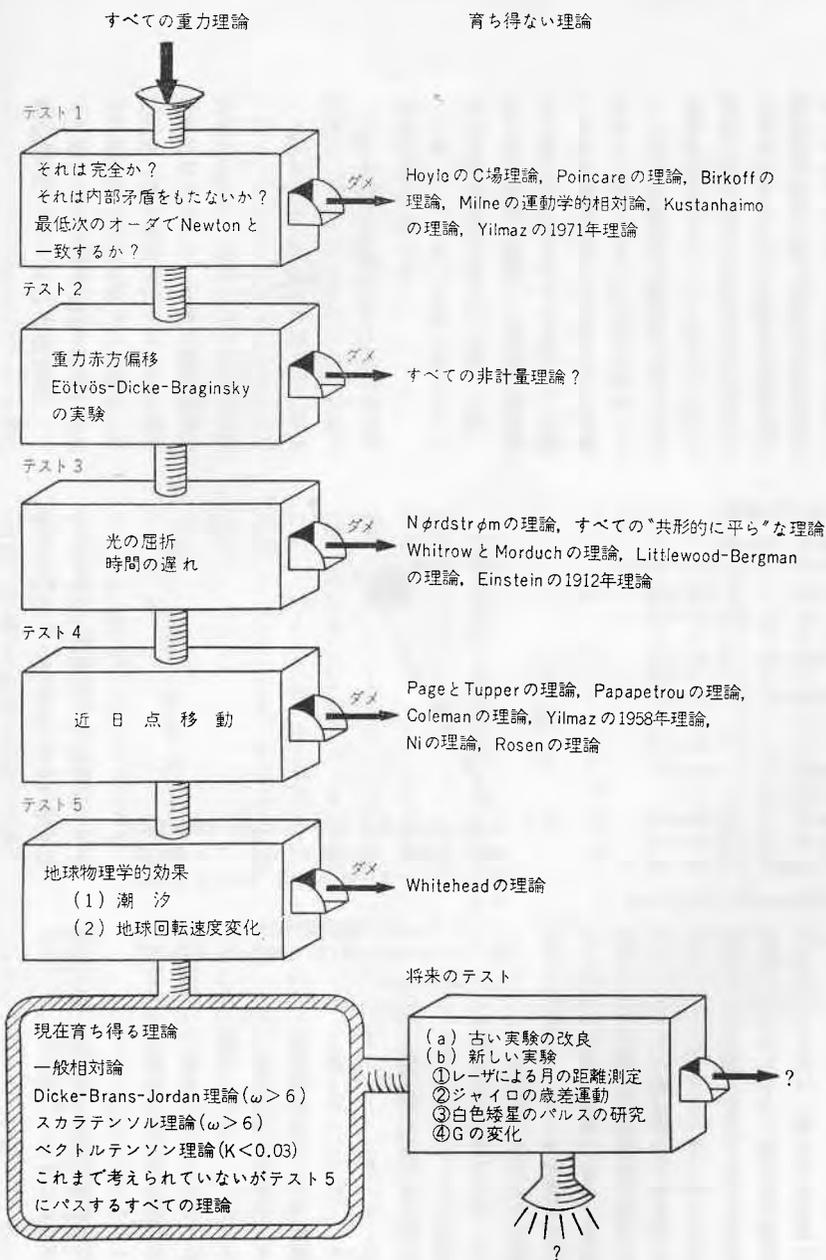


図1 重力理論のC.M. Willによる選別

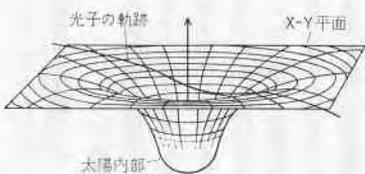


図2 太陽付近の空間の曲り(C.M. Willの論文による)。一般相対論の分野でよく用いられる“埋込ダイアグラム”(embedding diagram)。これにより空間の曲りを視覚化し、心の中に描くことが好んでなされる。ここに示したのは太陽付近の曲った空間、これにより相対論的な光の曲りと時間の遅れが生ずる

2 重力理論の現状

二・一 重力理論のウィルによる選別

最近、米国のウィルという学者はす

べての重力理論を図1のような一連の「ふるい」にかけることにより「現在育ち得る理論」と「育ち得ない理論」とに分けた。図にはまずテスト1の段

◆その理論は完全でなければならぬ
つまり、その理論は第1原理からすべての実験の結果を解析できなければならない。たとえば、「重力の場の強

階に全重力理論を送り込むところが示してある。テストを順を追って説明しよう。

◆内部矛盾を含んでいない
◆それは第1近似では普通のニュートン理論に一致しなければならない
◆たいていの理論は少なくとも最低次ではニュートンの物理学に一致する。ところが一致しないのはパーコフの理論である。これは一般相対性理論と同じ重力赤方偏移、光の屈折、近日点移動を予想するが、音波が光波と等しい速度で進むことを要求するので実験事実との間にはなほだしい不一致を生ずることになる。

さ」の異なる二点にある二つの原子時計が異なる速さで動くこと(重力赤方偏移)を仮定しなければならぬような理論は十分ではない。たとえばミルヌの運動学的相対性理論は十分な理論的機構をもっていないので重力赤方偏移の予想を立てることができない。

光の屈折とレーダの時間遅れ

太陽の近くを通る(図2参照) 光線(または光子)の太陽による曲がりの角度 $\delta\theta$ (秒)は式で、レーダー信号の時間遅れ δt (マイクロ秒)は式(2)で与えられる。

$$\delta\theta \approx \frac{1}{2}(1+\gamma) \frac{1.75}{d} \quad (1)$$

$$\delta t \approx \frac{1}{2}(1+\gamma) \left[250 - 20 \log \frac{d^2}{r} \right] \quad (2)$$

ただし、 d は光が太陽に最も近づいたときの太陽半径単位の両者の距離、 r は天文単位(地球と太陽の平均距離 $\approx 1.4960 \times 10^{14}$ mを1とする単位)で測った惑星または衛星の太陽からの距離である。式(1)は光の周波数に関係しない。式(2)は通常の往復時間に更に付加される非ニュートンの遅れの時間である。太陽による光の屈折の予想はアインシュタインの一般相対論の偉大な成果であった。第一次世界大戦の初めのころエドントンたちが屈折を確認したことはアインシュタインを有名にさせた。しかし今から見ればエドントンの時代の測定精度はかなり低かったのである。現在の技術を使えば原理的には角度や角度の変化を 3×10^{-1} 秒の大きさまで測定できる。電波天文学者は好都合な軌道をもつ準星の電波源を用いて過去数年にわたって方程式(1)の係数

(1)(2) $(1+\gamma)$ を測定した。これは一般相対論では1である。結果は表1に示してある。時間遅れの効果はアイン

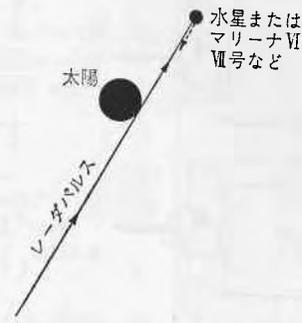


図3 太陽のそばを通るレーダ波の遅れ(相対論的効果)の測定。軌道要素の分かっている反射体(水星, マリナー VI, VII 号など)を利用する。レーダパルスが太陽表面付近を通るような位置になると式(2)に対応する時間の遅れが観測される。

表1 PPNパラメータ γ の測定 (C.M. Will の論文 による)

実験の形式	実験者(および期日)	$\frac{1}{2}(1+\gamma)$ の値**
ラジオ干渉計による光の屈折	1969年10月 Muhleman, Ekers, Fomalont	1.04 ± 0.15 -0.10
	Seielsted, Sramek, Weiler 1970年	1.01 ± 0.12
	Hill Shapiro and Coworkers*	1.07 ± 0.17 1.03 ± 0.2
	1970年10月と1971年10月 Sramek and Fomalont*	0.94 ± 0.06
レーダ測定による時間遅れ	水星, 金星への受動レーダ マリナー6号, 7号への能動レーダ	1.02 ± 0.05 1.00 ± 0.04

* 活字にされていない結果
** 一般相対論によればこの値は1である

シュタインによって予想されたのではなかった。これがシャピロによって一般相対論と他の重力理論の理論的効果として発見されたのは一九六四年である。その後これは図3に示すような方法で観測された。

往復時間を測定したものを詳細に解析して得た結果を表1に示しておく。テスト3によってあぶなくなっているのが全く捨ててしまわれるわけでもない理論もある。それはスカラートンソル理論でディッケ・プランス・ヨルダン理論はその特別な場合である。これには無次元の定められていない「結合係数」 ω を含んでいる。これは ω と無限大の間を変化することが出来る(ω が無限大の極限でこれは一般相対性理論になる)。これらの理論が時間遅れの測定と合うためには ω は6よりも大きくなければならない。ところが、 $\frac{1}{2}(1+\gamma)$ の測定において測定値のばらつきと誤差の可能性から現在の時点ではスカラートンソル理論を自信をもって捨てること

がで

きない。

近日点移動

ニュートンの理論は多くの天体運動の観測値と正確に一致したばかりでなく、海王星のようなそれまで未知であった天体の存在を予言したりなどしてしばらくの間はただ一つの場合を除いては力学的な現象の説明に困るようなことはなかった。ただ一つの場合とは水星の近日点移動である。水星は太陽に最も近い惑星だから太陽の重力場の影響を最も強く受ける。水星の近日点とは太陽のまわりを楕円軌道を描いて回っている水星が、太陽に最も近くなる点である。水星ではこの点がだんだん前方にずれてゆく。その原因についていろいろな分析がなされた。しかし、一〇〇年間につき四三秒の角度の移動はニュートン理論では説明できない謎として解決は今世紀への宿題のようなものになっていた(アインシュタイン方程式はこの四三秒/世紀をずばり算出する)。この移動はこの惑星についてのレーダー測定の結果から誤差は約1%であることが知られている。これらの近日点移動の説明には三つの効果があげられる。即ち、
1、古典的效果
2、太陽が楕円であることの効果
3、プリファードフレームシフトと呼ばれるもの

一般相対論については前にちよつと述べたように古典的な近日点移動が測定と完全に一致する。アインシュタインが近日点移動についての計算結果を発表し、その正確な一致を示した時世界中のこの方面の研究者はその素晴らしい結果に驚いたのである。ところがドイツ人たちの報告によれば、太陽はわずかに楕円形であるかも知れず、この楕円性が世紀につき四秒くらいの近日点移動を十分にひきおこし得る。楕円性が小さければ小さいほど余分な近日点移動は小さい。

太陽の楕円性の値が不確定であるため、スカラートンソル理論やベクトルトンソル理論を捨て去ることは不可能である(図1を見よ)。これらの予想は一般相対論に比べて一世紀につき四秒以下しかちがわぬ。

地球物理学的效果

さてテスト五に入らう。有名な重力理論の一つにホワイトヘットの理論とものがあり、これはすべての古典的なテストに対してアインシュタインの理論と一致し、前のテストには全部見事にパスする。ところが最近の研究によればこの理論は銀河による十二恒星時間の地球の潮汐をひきおこすことが示され、それが観測の許すものよりも二〇〇倍も大きいことが明らかになった。こうしてホワイトヘットの理論は

五〇年の命脈を保ったが、図1に示すようにテスト五によって除去されてしまった。

将来のテスト

我々の理論的「ふるい」に加わる将来のテストが二種類ある。それらは古い実験の改良と新しい実験である。現在有効な重力理論は、改良された「ふるい」2〜5に再びかけられなければならない。図1に示すようにこれらのテストの改良を含むさまざまな実験的テストが考えられており、一九七〇年代には実現するかもしれない。

二・二 アインシュタイン方程式

一般相対論は特殊相対論の自然な拡張である。またアインシュタインの重力場の方程式はニュートンの方程式の拡張とみなすことができ、一口に言えば時空内におかれた物質が、そのまわり、どのような重力場を生み出すかをきめる方程式であり、次のように書かれる

$$R_{\mu\nu} - \frac{1}{2}Rg_{\mu\nu} + \lambda g_{\mu\nu} = K T_{\mu\nu} \quad (3)$$

ここで $g_{\mu\nu}$ は重力ポテンシャルである。これは数学(幾何学)の立場から言えば計量テンソルと呼ばれるものなので、単に計量テンソルとも呼ばれる。

$R_{\mu\nu}$ はリッキのテンソルと呼ばれ $g_{\mu\nu}$ から作られたテンソルである。Rはスカラ1曲率であり、ガウスの曲率を拡張したものである。また $T_{\mu\nu}$ は物質のエネルギーテンソルと呼ばれ重力場の源である。式(3)の左辺第3項は宇宙項と呼ばれ、 λ は宇宙定数と呼ばれるが宇宙論以外では $\lambda=0$ とおかれる。Kはアインシュタインの定数である。さて最初にも述べたようにすべてのエネルギーは重力を生み出すので重力場では重力場自身が源となって更に重力場を作り出す。このような場の再生作用がアインシュタインの方程式に非線形の性質を与えるのである。非線形方程式であるため取り扱いは簡単でなくなるが、有限な質量源に対する外部時空についてのアインシュタイン方程式の厳密解もいくつか知られている。

二・三 最後に残る理論

これまでは五つの「ふるい」で除去された重力の理論の方を議論してきた。これらのテストにパスし現在も有効な理論についてはどうであろうか。一般相対性理論は太陽の楕円性が十分

小さくて水星の近日点移動への楕円性の寄与が実験誤差(0.4秒/世紀)よりも小であるかぎり五つのテストに見事パスしている。ディッケ・ブランドス・ヨルダンの理論とスカラートンソル理論は結合係数 ω が6より大きいかぎり五つのテストにパスする。将来光の屈折と時間遅れの実験の結果によっては ω がもっと大きくならなければならないということになるかも知れない。ベクトル・テンソル理論は結合係数Kが ∞ より小さい限り五つのテストにすべてパスする。これまで発見されていない理論で現在の五つのテストにパスするものがあるかも知れない。アインシュタインの理論ができてから五〇年以上になるこの間の理論は最前線にあつて未解決であつた古い問題を解決し新しい多くの重要な結論を導き出した。そして生きながらえてきた。しかし他のいくつかの理論も生きながらえてきた。一九七〇年代におけるこの方面の偉大なる目標の一つは重力理論に対する「ふるい」により最後にはただ一つの理論が残るまでそのテストを推し進めることとされている。残るのはアインシュタインの理論かも知れないし、何か他の理論かも知れない。

3 重力波研究の現状

一九一六年にアインシュタインは重力場が非常に弱いという仮定の下に重力場の方程式（アインシュタインの方程式）を解いた。その答によれば重力場 γ は

$$\sum_{\mu\nu} \partial^2 \gamma_{\mu\nu} = 2KT_{\mu\nu} \quad (4)$$

という形に書かれる。この式(4)は物理学の言葉で言えば波動方程式であって空間を波動（この場合には重力の波動）が伝わってゆく様子をあらわしている方程式であり、この式から重力場の波動は光速で伝播することが示される。これが重力波なのである。

ところがアインシュタインが最初に計算した重力波放射器の例では放射されるエネルギーが、10⁵ワットというようなあまりにも小さい値であったために今から一〇数年前までは重力波を実験的に検出しようとする人は一人もなかった。その後米国メリーランド大学のジョセフ・ウェバーが重力波の検出に関する一連の論文を発表してからは多くの人がこの方面の研究を推し進めるようになった。ここではその中から最近の主な研究を紹介してみよう。

ウェバーの実験

一九五九年に発行された小論文の中でウェバーは重力波の発生と検出の理論を検討しており、実験室的な装置を組み立てる試みや、一般相対論の予言

についての実験的研究をやってみる価値があるものであると決断をした。これは観測可能な放射の存在が理論的に明白には認められていない時期であったし、必要な工学が揃っておらず、文献の中にさえも必要な技術的水準が見いだせない時期であった。ウェバーは図5に示すような重いアルミニウムシ

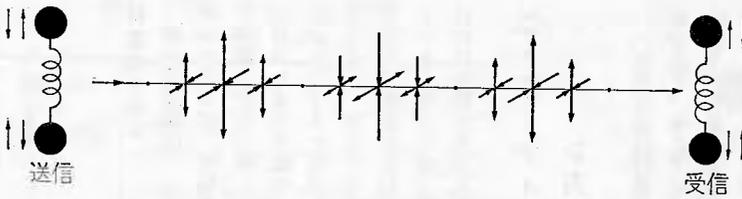


図4 重力波の伝搬，直交する矢印は伝搬の方向に対して垂直な平面上で試験粒子が平面重力波から受ける力の方向と大きさを示す。上下二つの粒子をバネでつないだのが送受点にある重力波共振子である。

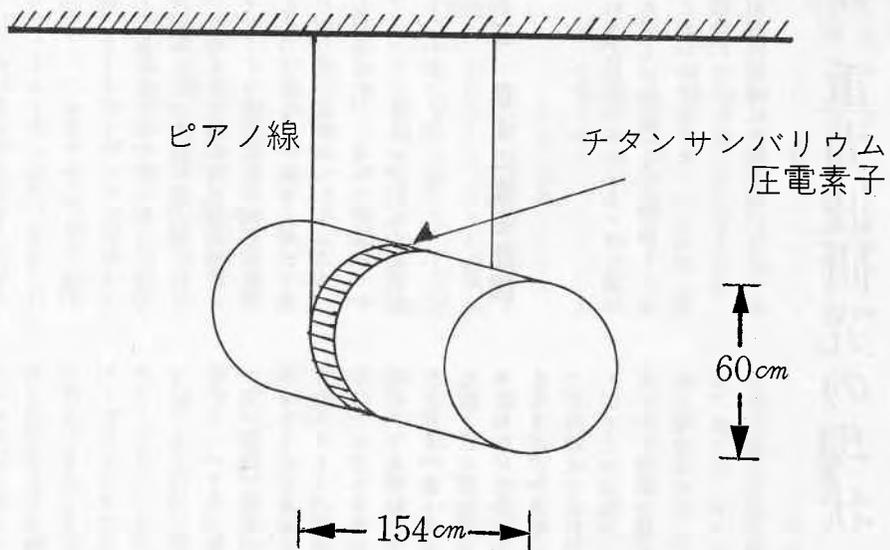


図5 Weberの重力波検出器

リンダーの中の非常に小さいひずみの観測を基本とする実験室的規模の共振型の質量四重極子検出器を設置する計

画を進めた。シリンダーの軸に垂直に入射した重力波は（図4にも示されているように）2つの試験粒子間の距離の

変動に対応して) シリンドーに伸縮モード(図6参照)を励振し、それは超高感度の圧電的な変換器(図5参照)に測定可能なひずみを発生させることになる。一つの原形となる実験の結果が一九六二年七月ワルシャワの相対論会議において報告された。ウェバーはこれら最初の断片的結果(「……これらの突発事件……記録器が夜の静寂の中で突然スケールを外れ、動いた……」)を重力放射の明証とは判断しなかつた。そしてまる二年間観測した後一九六七年にはじめて一・五トンのシ

リンドーを(一六五七ヘルツで)用いた実験における一〇個の事件として準備段階の成果を報告した。「重力波検出器は現在使用されている型式の地震計、傾角計、電磁界のみに応答する機器等によっては検出されない事件を取り出し、記録する……ある重力信号が観測されているらしい可能性を完全に締め出すことはできない」と。

一九六九年にウェバーはメリーランド大学内の彼の実験室にある検出器と、一〇〇キロメートル離れたシカゴ近くのアルゴンヌ国立研究所にある

る太陽や宇宙線の活動との重大な相関性があり得ることを提示した。タイムンやマクレマンたちはウェバーによって彼等に提供された一九六九年の四月間の代表的な二六二の事件データを吟味し、磁気圏の環電流の強度との相関性を発見し、またその結合機構の可能性を推論した。

しかし、このような相関性は因果関係の証明とはなり得ないから、この段階でいかなる相関性を結びつけても、恐らく確かなものとは言えないであろう。

ブラジンスキーというソ連の学者はウェバーの一九六九年の資料等を解析して「……(彼らの)主張では放射が銀河中心からのものであるという仮説が確認されてはいない」と結論した。また恒星時におけるピークを重力波によらずに説明可能であると発表している学者も現れた。しかし一方、一九六九年以降のウェバーの実験結果は恒星時に対してピークが記録され続けており、一九七〇年五月二〇日から一一月

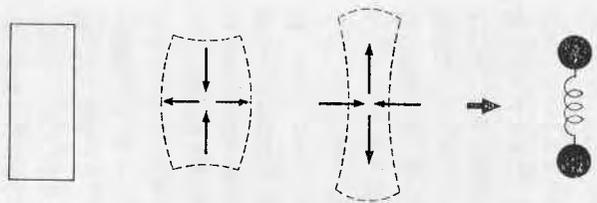


図6 検出器(左の金属円柱)が到来した重力波により駆動されて伸縮状態の振動(四重極振動)をする様子。右は縦振動のモデル(図4も参照)

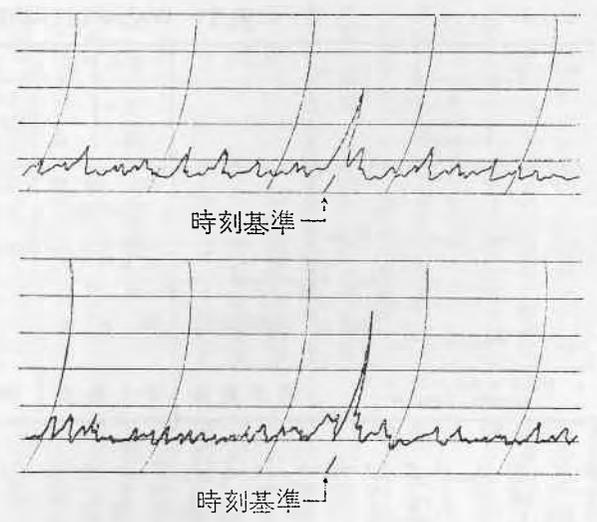


図7 Maryland 大学(下)と Argonne 国立研究所(上)で得られた同時振動(coincidenceのevent). (J. Weber による)

同じ検出器との同時振動を示し「これらのデータは検出器が重力波によって励振されているという結論と矛盾しない」と報告した。アレクセフをはじめ何人かの人は「これはウェバーの報告した事件と地球上における

重力波はどこからやって来るのか? という問いに対するウェバーの答え

一九七〇年七月にウェバーは太陽時に対するものと恒星時に対するものとのおりに記録された実験結果(受信結果)を発表した。太陽時に対する記録結果は規則性のないまちな値を示しているが、恒星時に対する記録結果は規則的な変化がある。恒星時の一七時四三分と五時四三分に検出器の(アンテナの)最大感度の方向は銀河中心を向いているのであるが、ウェバーは受信結果のピークの存在についてその源が銀河中心にある(太陽質量であると結論した。ところがダイソンとタイムンはランダムな極性の放射の場合(銀河中心を含む)いくつかの場所が報告された方向依存性と矛盾がないということを示した。

二〇日にわたる期間のデータは銀河中心の方向で受信器の出力がピーク（最大値）を示している。このことからウェバーは「2つの受信器（一〇〇〇キロメートルはなして置いてある受信器）に対する二時対称性は六カ月にわたる実験の中で証明されている」と述べている。つまりウェバーによれば重力波は銀河の中心方向からやって来ているというのである。

天体物理学から推論される重力波の源について

銀河中心にある四方八方に平等に重力波を出す放射器を仮定してウェバーは、観測された事件の数は一年当たり全部で一〇〇〇個の太陽質量が完全に重力波に変換していることに相当すると概算した（アインシュタインが質量とエネルギーは同等であって $E=mc^2$ という恒等式で結ばれることを証明していることはあまりにも有名である）。他の人の見積りでは一万个の太陽質量、あるいはそれ以上にも見積られている。ところが一方シアマ、フィールド、ローゼス等の研究によれば銀河系内で連続して一年あたり七〇個の太陽質量以上に大きいエネルギー損失があればそれは他の観測可能な効果をひき起すことになるのである。ところがそのようなものは何も発見（観測）されていないのである。

表2 Weber以外の研究者による実験

観測者	検出方式	観測期間	現在までに観測された結果
(グラスゴウ大学) Drever ⁽²⁷⁾	圧電変換	1個を1年間 2個を6か月	決定的な events なし 20のすれすれの events (単独) と、1つの異常な event (このとき他のどのグループも操作していない)
(ベル研究所) J.A. (Tony) Tyson ^{(28), (25), (18)}	圧電変換	数か月 (予備実験) 1972年12月 以来動作中	銀河中心の方向で1つのピークを示したが統計上の偶然性として捨てられた Weberの結果を確認するような結果はまだでていない
(モスクワ大学) Braginskii ⁽²⁹⁾	静電容量変化	20日間	1日当たり数ダースの熱的でない励起がある、2つの場所でほぼ同時のパルスが記録された約30の注目される箇所があるがそれらの波形が非常に異なっているので報告者は真のコインシデンスと認めていない
(IBMリサーチセンター) Garwin, Levin ⁽³⁰⁾	圧電変換	2~3週間	純粋熱雑音の分布と一致する

ダイソンという学者は一九六二年に近接した白色矮星（または中性子星）の2重星系が強力な重力波の放射源となり得ると報告しており、ウェバーがそれを観測したのではないかと考えを公表した。中性子星の芯は、密度が非常に高く、重い物質であることはよく知られているからこのような推論が出てくるのである。その他バルサー、準星物質、崩壊を伴う系、崩壊した物質（ブラックホール）と呼ばれるものもまた強力な重力波の放射源となりうる。

一九七一年にウェバーは新しい円板アンテナを作り、それを使用したいくつかの観測結果を発表した。この円板形アンテナは先に用いた図5や図6のアンテナと性質が異なり、スカラー重力波と呼ばれる波を受信することになっている。図1の現在育ち得る理論の一つにブランズ・ディッケ・ヨルダン理論というのがあるが、この理論によれば円板形アンテナを振動させるスカラー重力波が出てくることになるのである。しかしウェバーの報告によると、このようなスカラー重力波が存在するという明証は得られなかったという。

ウェバーの実験室は無入化されていて人間の手を借りずに重力波

の受信結果を自動記録することが出来る仕組みになっている。また極低温まで冷却して受信装置の雑音を減らす実験をしたり、月の地震のデータを分析したり、実験装置の改良をしたりしている。最近では一日あたり約3個の事件（一〇〇〇キロメートル離れた重力波受信器が同時にある信号を受信することとをここでは事件と呼んでいる）を記録している。

ウェバーのところ以外の実験室で行われている実験はどうなっているか

ウェバー以外の人々による実験の主なものを表2に示す。
この表からすぐわかるように今までのところではウェバーの結果を誰も再現していない。

また表2のほかにも世界各国で実験の準備や予備実験が行われている。その中には月や地球を利用した実験もある。重力波を受信するためのアンテナや実験装置もいろいろなものがある。しかしウェバーの受信したような結果は誰もまだ発表していない。ウェバーは一九七三年に実験の近況について次のような報告をしている。「現在世界中いたるところで物理学者の〇以上のグループが高い質の実験を行っている……一九七三年一月のこの時と同じ種類あるいは改良された装置

を使用し、データ処理を行いながら一九六九年のメリーランドとアルゴンヌの同時受信の実験を追試し、同じような結果を得た人が一人もいないということは全く異常である。また他の実験グループは雑音の大きいそして本質的に異なったデータ処理を必要とするより小さい検出器を使用したりしている」

ウェバーの結果と決定的な比較をするためにはすくなくともウェバーの受信器と同等の感度をもつ二受信器を用いた同時受信の実験を行うことがぜひとも必要であろう。電子回路に雑音はつきものであるが重力波検出器(受信器のこと)感度と時間分解能はまだまだ改善の余地がある。超低温にまで冷却され、またより技巧をこらした受信機構をもつものはウェバーの受信機に比べて一〇〇万倍も感度を上げ得るものと見積られている。そしてローガンの報告によれば将来は受信機の国際的ネットワークを構成して位相差を考慮した同時観測などもできるようになるものと考えられている。

重力波の発生についての研究はどのくらい進んでいるか

実験室的な規模での重力波の発生は非常にむずかしいと考えられている。なぜならばそれは理論的には発生することが計算されていて発生する重力

波のエネルギーがあまりに小さいため、現在の技術では受信困難だからである。現在、実験室的な規模での重力波発生器として提案されている主なものは、前に述べたアインシュタインの計算したスピンロケットと呼ばれるもの、ウェバーによって研究された振動円筒型、多くの人々によって考案されている圧電結晶の伸縮振動型、及び日本で提案された進行波型などがある。アインシュタインの計算したスピニングロケットというのはちょうど子供の使う竹トンボのように物体(棒)をグルグル回転させる構造のもので、放射エネルギーは前述のように 10^{-20} ワット程度である。振動円筒型というのは図5に示すウェバーの検出器のようなもので、重い円筒を長さ方向に強制的に伸縮振動させてやるもので、ちょうど検出器の逆の作用をさせるわけである。圧電結晶の伸縮振動型は圧電気材料に電圧(交流電圧)を加え、結晶自身を伸縮振動させるものである。進行波型は一定の方向にだけ鋭く重力波を放射しようとするものであって、現在提案されている中では最も強力な重力波放射器であるとされている。しかし放射重力波のエネルギーの絶対値は微々たるものであって、たとえば全長三〇センチ、幅三ミリ、厚さ〇・三ミリの寸法で毎秒 10^6 エルグ程度の重力波を放射するにすぎない。この場合、

周波数は 10^6 ヘルツ程度の高い周波数である。以上のことをふり返ってみると重力波の発生ということがいかに困難なことであるかがわかってくる。

重力波の検出についての研究はどのくらい進んでいるか

さて重力波の検出(検出とは受信のことと考えればよい)の研究はどうなっているかという点、まずソ連のブラジンスキーとメンスキーは環状導波管内に電磁波を 10^6 ヘルツ程度まで置き、それと到来重力波との相互作用をさせる方法を提案している。またウェバーは、一辺が五〇センチの結晶で波長が一メートルの場合毎秒 10^6 エルグの重力波が発生可能で、単結晶検出器を用いればこれらの波長領域で 10^{-20} (ヘンリ/秒)のパワーが検出可能であるとしている。ソ連のナジバロフたちは半導体にレーザー光をあてて重力波の発生検出をする方法を提案しているが、送受信共に一立方メートルぐらいの半導体を想定しており、そのような材料とそれを励起する強力レーザー、及び極微小信号の受信技術など解決を要するいくつかの問題を内蔵している。

これまでに提案されている検出器の中で最も感度の良いのはブラジンスキーの方式である。しかしそれでもまだ感度が足りない。発生器、検出器の世界一同士を組み合わせても、重力波と

して発生可能なレベルと検出可能なレベルとの間にはまだ開きがある。

結び

アインシュタインが重力波の存在を理論的に予言してから半世紀以上になるが、これまでみてきたように現段階では理論の方が先に進んでおり、それらを直ちに実験できるほど実験技術は発達していない。重力波の検出の実験に関しては米国のウェバー博士の研究が最も進んでいる様に思われるが、彼の報告した結果はまだ他の人々によって再現されていない。しかし、現在でもたくさんの人々が世界の各地でウェバーの研究を追いかけているのであるから、そのうち結論が出るであろう。

かつて科学者であり詩人であった日本寺田寅彦は雪の研究をみて「雪は天からの手紙である」と言ったが、現在ウェバーの報告している重力波は銀河系の中心からの手紙であるということになるであろうか? いずれにしても現在正しいとされている四つの重力理論が異口同音に存在を予言している重力波が、音波、電波につづく第三番目の波として産声をあげるかどうか、人類のものとなるかどうかは誠に興味ある問題である。研究は今後一層加速されるものと思われるので現在までの主なことをまとめ駄文を連ねてみた。

●連載科学記事

原子・銀河系・理解

ダニエル・フライ

(2)

3 空間における二つの水素原子

個々の原子を調べてその特性を学んだからには数個の原子が近接しているとき原子が互いに与えあう影響を考えてみよう。

二つの水素原子を空間に二つならべかつ各々が全く別個に存在する光景をえがいてみよう。この原子は互いに相手に関しては運動せず、また原子自体が生み出すものを除いて、場もその他の影響もないと仮定しよう。また二つの原子は二つの径の距離だけ離れていると仮定しよう。すなわち電子の軌道間の距離は軌道の径の二倍に等しいものとする。

電子というものは完全に負電荷から成り立っており、また同種の電荷は互いに反発し合うことを学んできた。したがって原子をより遠くへ押しやろうとする力場が生じるのである。しかし中性子が引力質量を有しており、その結果、原子を近くへ引き寄せようとする引力場が作り出されることも知っている。

中性子の質量は電子の質量の一八〇〇倍以上あり、同じ距離で測るならば

引力場はもっと強力なものとなる。しかしながら、二個の原子の場合、引力場に対して影響し合う距離というのは中性子間で測定されねばならず、一方電場は二つの軌道の最も近い位置で測定されねばならない。(電子の全電荷は軌道のすべての部分で同時に作用すると考えねばならない)

この点で我々は、場によって創り出された力の量はその力が働いている間で二つの点をわけている距離の逆二乗に比例しているというニュートンの法則を思い出さねばならない。

この例では二個の原子は各径の二倍に等しい距離だけ分離されていた。ここで各原子は同じ径を有していると仮定し、原子の半径を測定の単位として選ぶとすれば、中性子は半径の六倍に等しい距離だけ離れており、核は半径の四倍ほど離れることになる。したがって距離の割合は六対四である。

ここで更に引力場の引力は電場の斥力よりも大きいと仮定しよう。したがって二つの原子は互いに接近し始めるかまたは「共倒れ」になる。核が一直

径すなわち半径の二倍の距離に達すると中性子は四半径分離れ、そうなる距離の割合は四対二となる。原子が互いに接近し続けて核が半径分の距離ほどになると、中性子間の距離は半径の三倍、すなわち三対一の割合になる。

二つの場の相関的な力がどうであろうと、引力場の引力が電場の斥力によって正確に釣合がとれる距離は存在する。この距離を「臨界距離」と呼ぶことにする。原子はここで実際に止まらないので、それを安定距離と呼ぶことはできない。共倒れ状態においては原子に「はずみ」がつくだろう。そしてこの「はずみ」は原子を斥力が引力よりも強くなるところまで運んで行く。そこで原子は「はねかえって」離れて行き、「はずみ」を得たために外部への運動の際再び臨界距離を通過する。原子は完全な弾性体とみなされてよいし、また摩擦を起こさないで、この前後へのはねかえり、すなわち通常知られている振動は限りなく続く。そして各原子はその臨界距離を絶えず探すけれども、その「はずみ」によっていつも臨界を越えるのである。

たとえ二つの原子にいかなる「はずみ」もつけないで正確に臨界距離に置くことが可能だとしても、原子間の臨界距離をほとんど継続的に変化させる要素が存在するために原子はその場所に長くどまることがないであろう。

この要素は光子あるいはエネルギー量子として知られている。

光子と言う言葉はギリシャ語で光を意味する「フォトス」と言う言葉からきている。この言葉が選ばれた理由は光は各種の一定の単位から構成されていることを示しているエネルギーの型として最初のものだからである。しかし我々の自然の理解が進歩するにつれていわゆる「光」は単に一種の電磁放射線であるということが明らかにになった。

電磁放射線は「基本エネルギー」と定義してよい。というのは物質に起こる変化のすべてはその物質の働きの直接あるいは二次的結果として生じてくるからである。

この基本エネルギーは微細に分割できるが、一定の単位または粒子であり複数が「quanta (量子)」、単数で「quantum (量子)」と呼ばれている。

量子はエネルギーをもつ不可視の粒子であると考えられているが、そのエネルギー・レベルが個々の周波数によってきまる粒子である。

電磁放射線の既知のスペクトルは、低い方の端にある長波の無線波から反対の高エネルギー宇宙線に至る莫大な周波数の範囲を包含している。

このスペクトルの中心付近は約一オクターヴをカバーしている狭い周波数帯であり、我々はこれらの周波数の放射線が人間の目で知覚できることから「可視光線」と呼んでいる。そしてこの周波数帯を更に狭い七つの周波数帯に分け、それを「色」と呼んでいる。最高周波数から低い方へ順番に色わけすると、ヴァイオレット(すみれ色)、インジゴ(あじ色)、ブルー(青色)、グリーン(緑色)、イエロー(黄色)、オレンジ(だいだい色)、レッド(赤色)の順になる。人間が目で見覚えられる色合い、明暗の度とか濃淡などはすべてこれら七つの周波数が何らかのあたりで結合されて創造されたものである。光子と言う言葉がもと用いられたのは周波数スペクトルのこの特殊な部分における量子すなわち放射線中の個々の粒子に対してであった。しかしこの言葉の使用はそれ以来周波数の相当幅広い部分も意味するように拡大されてきた。

赤の可視光線のすぐ下は別のものがあり、赤外線と呼ばれる何かより広い周波数帯がある。赤外線の周波数が人間の目で知覚できる範囲以下であるという事実を除いて、赤外線は可視光線の持っている特徴のすべてを有しており、加えてその光子が原子の回りの電子核に簡単に吸収されてしまうという特徴も有している。

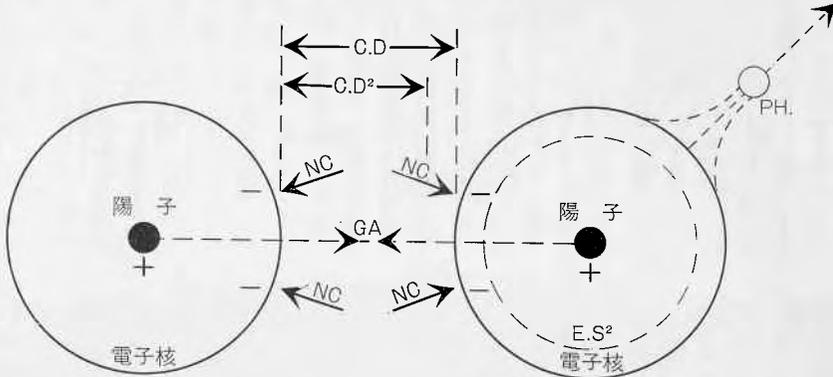
もちろん各種のタイプの原子は周波数に関する独自の特徴を持っており、周波数帯に調和する光子だけが吸収さ

れる。しかし周波数がスペクトルの赤外線部分内にある光子の大部分は、ほとんどすべてのタイプの原子によって容易に吸収される。したがって、我々が今特に関心をもっているのはこのような赤外線光子なのである。

さてふたたび二つの水素原子の話にもどることにしよう。赤外線中の一光子が宇宙の何百万光年もあなたにある星から何百万年も前に放たれて、二個の原子のうち一個の原子の回りのエネルギー核にぶつかると仮定しよう。もし光子が吸収されればこのようにして得られた追加エネルギーがエネルギー核を拡大する原因となる。図(次ページ)からもわかるように電子軌道の拡大によって電子は以前よりもっと互いに近づきあうが、一方陽子間の距離はもとのままである。もし二個の原子が光子の吸収に先立って正確に臨界距離の位置で釣り合うならば、純粹な反発作用が存在することに気づくであろうし、二個の原子は新しい安定点すなわち二つの場が再び釣り合うような臨界距離を探して飛び離れるであろう。しかし、原子核はこれらの光子を保有するのではなく継続的にそれらを放っているのである。もちろん放出にもなつて核はひとまわり小さくなる。

継続的な放出の時間的間隔は二つの要素によって決まる。まず特殊な原子の性質によるし、次に電子核内に存在

宇宙空間に孤立する 2 個の水素原子



- G.A = 陽子の質量による引力
- N.C. = 負電荷一相互の斥力
- C.D. = 臨界距離 (N.C=G.Aの距離)
- P.H. = 核から放射される光子
- E.S² = P.H.の放射による小さな核
- C.D² = 小さな核による小さなC.D.

する光子の数によるのである。核が光子を受け入れるごとに核の径は正確な量で増え、放出にもなつてそれは同じ量で縮むのである。

もし一定の時間内に受け入れられる光子の数が放出される光子の数より多ければ、二つの原子は絶えず遠くへ離

れようとする。逆にもし放出される数の方が多い場合には原子は互いに近づくこととする。今赤外線中の光子が輻射熱の単位としても知られていることがわかれば、我々は自然の基本法則の一つを予知することができることに気づく。すなわち、物体に熱エネルギーを

加えれば、その物体がより大きな空間を占めることになるのである。簡単に言えば膨張するということである。また物体から熱エネルギーをなくせば物質はよりせまい空間を占めることになり、簡単に言えば、収縮するのである。

我々はこの法則について一度も聞いて

4 脱出速度

さて二個の原子の各々が数多くの光子を同時に受け入れると仮定しよう。

外側へ飛びはねている電子の軌道は互いにすぐ近くへ接近するであろう。このようにして原子の非常に強い反発作用は非常に速い速度をともなつて、原子の外向運動を起こす。原子が新しい臨界距離に達するまでに、速度が非常に速いので原子は限りなく離れ続けようとする。もちろん原子は臨界距離を通過するやいなや斥力は引力となり原子の外向運動はふたたび速度が低下し始める。しかし陽子間の距離が増大するためには原子は離れたので、引力もまたしだいに小さくなる。

もし原子が充分に高い元の速度に達するならば、引力は速度よりもっと大きな割合で減少し、そのため外向きの速度が保たれることがわかる。

この継続的膨張を起こす最低速度

たことがなく、またその作用を見たことがなくとも、自信をもってこれを予知することができる。

他の数多くの自然の法則についても前述の理論を考慮することによって同じように予知できるかもしれない。そのうちのいくつかはあとでふれることにする。

は、原子の「脱出速度」として知られている。

我々はしばしばこの脱出速度という言葉が月やある惑星へと打ち上げられるロケットの噴射と関連して使われているのを知っている。この場合それは、地球の重力場から完全に脱出しようとするならば、ロケットに伝達されるべき最少の速度であると定義されている。原理は全く同じである。地球の重力場はロケットに対し遅延力を及ぼし、外への運動を絶えず遅らせようとする。しかしこの遅延力は地球からの距離が増すにつれて確実に減少して行く。しかし元の速度が充分速いものであれば、遅延力は速度よりもより急速に減少してゆき、ロケットは地球とは別の重力場の影響を受けるところに達するまで上昇し続け今度は別の重力場の方向へと加速し始める。

ロケットの地球からの脱出速度は、通常秒速七ないし九マイルであるが、これはロケットが月に向かって発射されるのか、地球の自転方向にそって発射されるのか、それとも自転方向とは逆の方向に向かって発射されるのか、ロケットの軌道に影響をおよぼす重力場を有している太陽の方向に発射され

5 統計的活動

物質の性質に関する我々のこれまでの研究では、宇宙全体は二つの孤立した水素原子から成り立っている。しかしこれら二つの原子を調べることによって、原子のサイズや数がどうであろうとすべての原子に作用する何か基本的な力が存在することを知ってきた。ここで互いに作用し合うただ二個の原子を取り扱う限り、絶体的な力やその結果から生じる特殊活動を観察することになる。もし元の二個の原子に多数の原子を加えるなら、我々に観察できるのは、ただ多数の力や活動の「統計的」結果であり、その各々はそれ自体絶対であるが、全体の合成運動に対し綿密に貢献するだけだ、ということである。

現在我々が知っている物理の法則のほとんどすべては非常に多数の個々の原子活動あるいは分子活動の統計的結

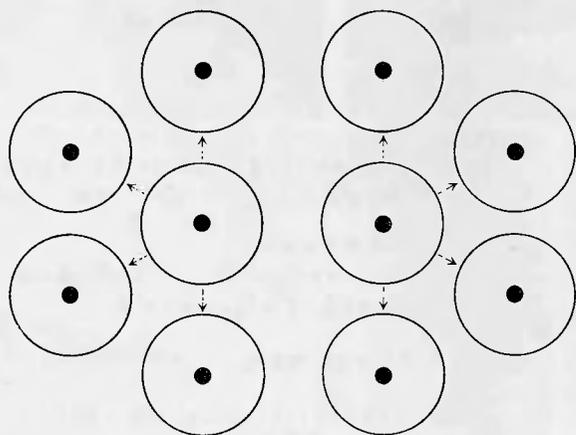
果かななどによるし、その他の細かい要素にもよるのである。

原子の場合その脱出速度は、原子のタイプや量、温度、他に存在する原子の数や位置、その他によってちがう。しかし与えられた一定の状態下ではいかなるタイプの原子にも常に正確な速度が与えられる。

果の観察を基盤としている。もし我々が個々の活動を理解しなければ多くの活動の統計的結果を理解する手段はなく、したがって我々は単にある状態の観察結果を盲目的に暗記するだけでしか物理学を学ぶことはできない。我々が二個の原子宇宙を観察するのに多くの時間をついやすのはこのためであるが、ここでの孤立した原子に仲間を加える準備をする必要がある。

下の図を調べれば、我々が慣れ親しんできた二つの原子が他の多くの似たよった原子にかこまれていくのがわかる。そこで二個の原子がいくつかのエネルギ―光子を吸収し、互いに離れ飛んだと仮定しよう。この二個の原子が非常に遠くへ離れ去る前に、各々が他の原子の臨界距離に押し入ってじやまをし、衝突が起こったときの角度によって決まるある方向へ飛び込んでいる

のがわかる。ぶつけられた原子はもちろんぶつけた原子の「はずみ」のいくらかを得るのであろうし、またそれ自身の軌道と速度はそれに応じて変えられることになる。我々はこれとはほぼ同じような状態をビリヤード・ゲームにおいてつくり出せる。すなわちビリヤード台に沢山のボールを置いてキューで突くと、いろいろなボールが手あたり次第にぶつかり合い、異なる方向へと飛び散る。ぶつけられたボールは速度（力学上のエネルギー）を得るが、そのうちいくらかは最初にぶつかった



ボールから伝えられたものである。もし我々が急速に動けるなら、すべてのボールを絶え間なく運動させることができる。

空気の摩擦、テーブルの上の回転による摩擦、またボールが完全に弾性でないということなどが、ボールの速度を減少させるのである。したがって、もし一定の振幅をもって突くと、ボールの平均速度は、一定の時間単位で打撃数に比例するであろう。

原子の場合、キューによる打撃は原子が吸収する光子によってあらわされる。摩擦がなく、また原子が完全な弾性体と考えることはできるが、原子が継続的に光子を放出したり吸収したりするので、減速効果はやはり存在するのである。

ビリヤード・ゲームとの比較により原子の平均速度は、一定の瞬間に回っている光子の単位量あたりの総数と比例することがわかる。

もし二個あるいはそれ以上の原子が一個の分子を形成するために結合したとすると、原子のすべてを囲んだ電子の外核は光子を吸収し、個々の原子の場合とはほとんど同じような結果を生み出す。

もちろん、原子や分子の速度を増す他の方法もある。これらの方法については以下の章で考えることにしよう。

私のUFO目撃記録

松岡 正憲

筆者松岡君は異常なほどに、UFO観測の熱心な学生。その詳細な記録は、驚くべき内容を含んでいる。ここには、本人自筆のノートの一部を掲載した。UFOの写真撮影にも数度成功している。

1974年 午後8時～8時25分
4月23日 3分目撃
静止～当然南に移動
午後8時30分ごろ飛行機がUFOの直上を通過と同時にUFOが飛行機を通過するようになり、しばらくは進んでいった。
その時オレンジ～青に色が変わった



1974年 午後8時～8時15分
4月29日 5秒目撃
黄色 南～東に移動



1974年 午後10時30分ごろ 快晴
8月12日 20秒目撃
大きき 木の葉の2倍くらゐ
最初オレンジ色の物体がフワフワと飛んでいった。すると当然消え、前と後赤色のオブジェをましながら北の方に飛んでいった。

速度 最初はゆっくり、消えたあとには、突然1分おから、だんだんと早くスピードを上げて、北の空に消えていった。

音は聞こえなかった。肉眼で発見する。

1974年 午後12時10分～13分
6月17日 変な音を聞く
ゲーという木の葉かゆいた音がしたとたん、シューシューと音の急激な音が聞こえた。5秒～7秒

1974年 午後2時40分
7月20日 東～北の方向に飛んでいくのを見ながらキャッチ（録音はなし）
16分45度 長方形 赤色～異色（かみ）
約20秒目撃

1974 午後5:30～5:35 北面の空
9/19 母船発見

約1分目撃
高度6000m
大きき 長さ30cm
黒色、ファースト～緑と黄色のぼつた色、青

1974 午後7:50ごろ 北面の空
9/29 雲の切れ目からUFO発見、2分目撃
雲と同じ方向に進んでいる。
最初1コの物体が止っていたが、しどろしどろとスピードを速めると同時に物体から小さな物体が四方に飛び出した。
そして最初の物体は急に直角に方向をかえた。飛行機だったら急速に90度も曲るとは、できない。
そして物体は雲の中へ消えていった。



1973年 午後3時ごろ
9月16日 雲を撮影中にUFOを発見。しばらく写真に写らない。西の方向

1974年 午後7時30分～8時
12月28日 10分目撃 目撃者2名
オレンジ～赤色に変わりながら移動し、空気に溶けて消える。
仰角0度 30倍の双眼鏡で発見

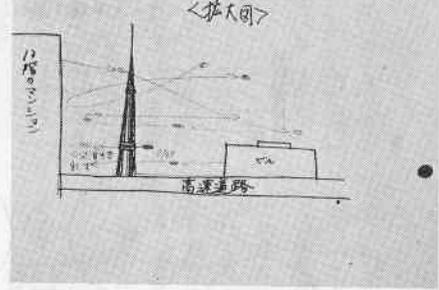
1974年 午後6時50分
4月12日 3分目撃
静止～当然移動
オレンジ色
社宅の真上～北東へ尾はなし。音もなし

1974 6/17 PM 12:10～12:13 変な音を聞く
ゲーという木の葉かゆいた音がしたとたん、シューシューと音の急激な音が聞こえた。5秒～7秒

1974 8/12 PM 2:40 東～北の方向に飛んで消える
約15秒目撃 仰角45度
Y511 縦ぐらゐの大きき
長方形 赤～黒色に変わる



1974年 午後7時30分～8時
5月20日 東京タワー オレンジ色 60秒発見
目撃者2名 10分目撃
平谷という場所へ。テレビの裏側で午後7時45分に東の方向に現れ、消えたと知らせがあった。物が見えなくなったという感じであった。静止した。急にスピードを上げて飛行したり、あとから、じんじんとして来た。



1974 8/25 PM 8:00ごろ 東の方向にUFO 2コを発見
オレンジ色で円型。黄色 2分目撃

千代田区のおり。おみやげのビル上空 目撃者4名
伊賀街道の歩道橋の上から発見

1974 8/26 PM 12:50 葉巻型
NETTVのフロッピーディスクで録音した。目撃者多数

8/26 PM 2:13 南西の方向 氷巻の型
異色、約5秒目撃

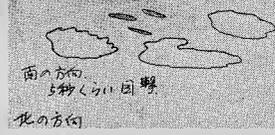
1974 8/29 PM 7:30頃 北～南西の方向 UFO 静止～当然動3分
音もなし。目撃者2名

1974 8/28 PM 20ごろ 西の方向 高度2000mくらゐ
5分 双眼鏡で発見。2～3分目撃

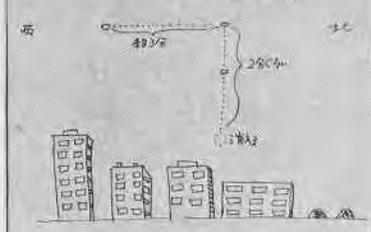
1974年 午前10時30分 十数分間の
11月18日 発生直下UF0を発見した。
上から白煙 東の方向
天まで 内5分まで

1974年 午前10時30分
11月18日 発生直下UF0を発見した。
上から白煙 東の方向
天まで 内5分まで

1974年 午前10時30分
11月18日 発生直下UF0を発見した。
上から白煙 東の方向
天まで 内5分まで

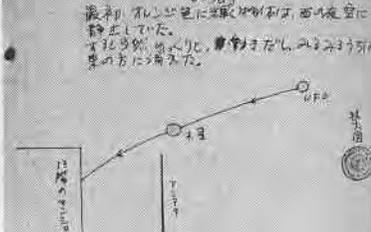


1974年 午後5時15分ごろ
10月22日 西の夜空にUF0発見
天まで 内5分まで

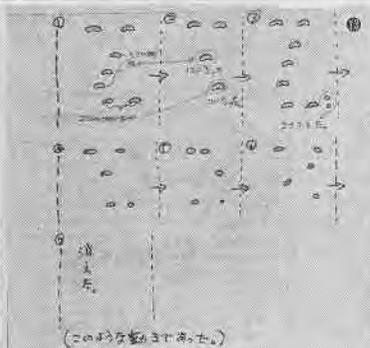


1974年 午前11時30分
10月22日 水色、青緑色のUF0を
発見した。毎秒約10cmの速度で
北へ移動していた。天まで
約10分程度。天まで
約10分程度。天まで

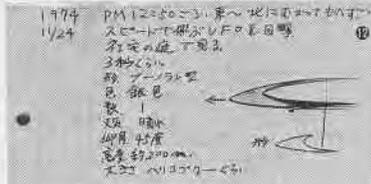
1974年 PM 6:02ごろ 西の方向に東の方向
11月7日 天まで 内5分まで



1974年 PM 11:15ごろ 西の夜空に輝くUF0発見
11月28日 最も早く一瞬一瞬見られた。
天まで (不明)

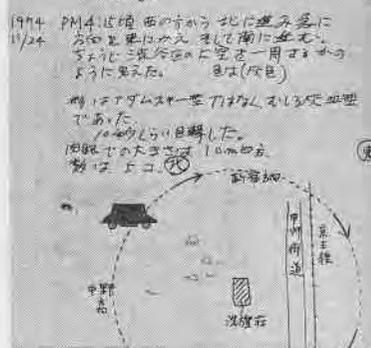


1974年 PM 4:20
11月24日 UF0を20分程度観察した。



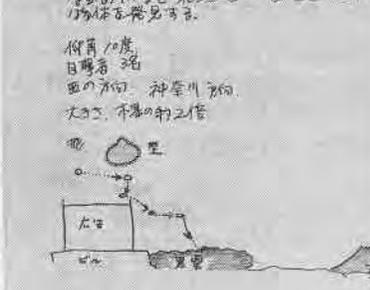
1974年 PM 4:20ごろ 4:10ごろ
11月24日 北西の方向
約 10分程度観察した。
天まで 約10分程度
天まで 約10分程度
天まで 約10分程度

1974年 AM 11:20から12:30ごろ 西の方向にUF0を
11月23日 約10分程度観察した。
天まで 約10分程度

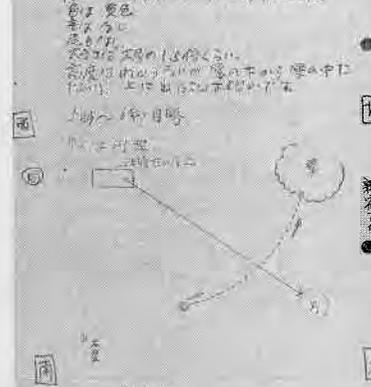


1974年 PM 4:20ごろ 4:10ごろ
11月24日 北西の方向
約 10分程度観察した。
天まで 約10分程度
天まで 約10分程度
天まで 約10分程度

1974年 午後6時30分
12月26日 社宅の屋上から西の方向にUF0を
発見した。天まで 約10分程度

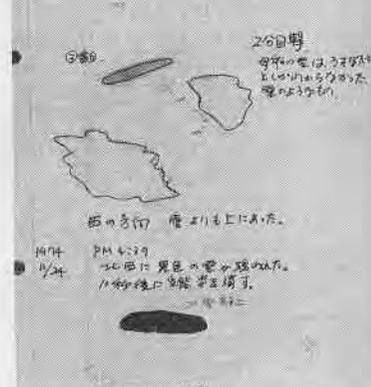


1974年 午後8時ごろ
11月26日 東京都練馬区でUF0を
発見した。天まで 約10分程度



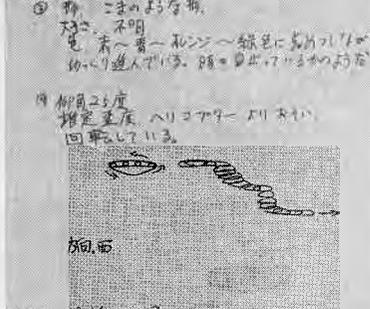
1974年 午後8時ごろ
11月26日 東京都練馬区でUF0を
発見した。天まで 約10分程度

1974年 PM 4:20ごろ
11月24日 北西の方向
約 10分程度観察した。
天まで 約10分程度



1974年 午後8時ごろ
11月26日 東京都練馬区でUF0を
発見した。天まで 約10分程度

1974年 午後8時ごろ
11月26日 東京都練馬区でUF0を
発見した。天まで 約10分程度



1974年 午後8時ごろ
11月26日 東京都練馬区でUF0を
発見した。天まで 約10分程度

UFOs & SPACE

No.12 May-June, 1975

Price ¥360

Published by Universe Publishing Co., Ltd.

©1975 All rights reserved

(Captions for Photographs P.2-P.7)

UFO OVER TOKYO

p.2

On August 12, 1974, at about 2:40 p.m., Masanori Matsuoka, 22, a university student of Shibuya Ward, Tokyo, saw a strange, rectangular, black object coming out of clouds for about 15 seconds, and hastily took a picture of it. The object is seen in the center of the photograph.

SAUCER APPEARING OVER OBIHIRO

p.3

Yoshitsugu and Katsuji Iino, 11, twin brother of Obihiro, Hokkaido, were looking at the sky from the window at the back of their house on the noon of November 12, 1974, when they found a mysterious disc-like object hovering in the sky. When one of them snapped 4 shots in succession with his camera, the object went into the clouds.

MYSTERIOUS LUMINOUS OBJECTS PHOTOGRAPHED IN RANZAN

p.4-5

There was a UFO flap over northern Japan on January 15 to 18, 1975, without the solitary exception of Ranzan, Saitama Prefecture. Mitsunobu Koizumi, 30, a runner of a photo studio of the town, succeeded in taking a picture of a mysterious, orange UFO (P. 4) seen among the trees from the terrace of the gymnasium of Sugaya Middle School on January 24, at 6:30 p.m. He also made photographs of a brilliant object going down behind the mountain at the back of Ranzan Country Golf Course on February 2, at 6:55., although he took a lot of black-and-white UFO pictures on January 18.

2 UFOs VISIT IRUMA BASE

p.6

Hidenari Akimoto, 19, of Air Self-Defense Force Iruma Base, Saitama Prefecture, often succeeds in summoning UFOs by mental telepathy. He discovered a UFO hovering above the distant power line on the hills in Sayama from the rooftop of a building in the Base on January 25, at 4:50 p.m. Then he saw a second UFO appearing near the first one at 5:20, and both of them moved slowly to the left and halted just above the hill in the distance. Later, a third one burst upon the scene, and the 3 objects suddenly disappeared at 6:15. The picture shown here is one of many pictures he made there during that time. He says, "UFOs seem to watch us warm-heartedly. We must give a welcome to them as friends."

AGAIN, 2 UFOs SEEN RYUGASAKI

p.7

On February 16, 1975, at about 7:00 p.m., Hideki Miyashita, 19, a high school boy of Ryugasaki, Ibaraki Prefecture, witnessed 2 luminous objects larger than stars in the western sky, and got out of his house with his camera, taking 3 pictures of them in succession. After suspending for about 10 minutes, the objects slowly descended to the right when a flying object that was like an airplane came near.

〈表紙写真説明〉

●鹿児島市のライティング・ライツ

島津久敬

昭和47年10月2日夜10時29分、桜島南岳が大きな音を伴って爆発、噴石は3合目まで落下、山火事を起こした。

私は爆発音と共に家を飛び出し、桜島の方向を望んだところ、火災を起こしているの、早急に家内を助手にカメラを持ち出し、車で鹿児島市与次郎ヶ浜海岸まで行き、火災の状態をカメラ雑誌フォトアートにテーマ「桜島」の1枚として発表予定のため、三脚を据えつけ、カメラで20分ずつバルブにして3枚撮影した中の一番最後の1コマが表紙写真で、そのときは桜島の火災に夢中で光跡はわからなかった。現像のあがりを見て不思議な光跡があるのを発見、どうしたのだろうと思いつつも、このまま保存しておけばまたいつか何かの作品として使用できるだろうと思っていた。

ところが昨年の夏から秋にかけてUFOについてテレビ、雑誌で報道されるのを見て、もしかしたら空飛ぶ円盤ではないかと思い、つい最近鹿児島市のUFO研究者でMBCテレビのプロデューサーの徳森氏に見てもらったところ、UFOに間違いないとのことだったので、一応地元の日南日本新聞にモノクロで発表したのが今までの経過である。その後、本誌のUFO写真集①の51頁の写真を見てUFOの感を強くしている次第である。同時に「UFOと宇宙」2月号号を買って求めた。表紙写真の後景は海と桜島で、撮影時に光線その他光るものは全然見あたらなかった。飛行機も飛んでいない。

撮影データ

●1972年10月2日夜11時14分から11時34分まで露光・晴天(当時刻に月はない)・ゼンザプロニカS₂(6×6判)・ニッコール75mm F2.8・絞りF5.6・露光20分(三脚使用)・エクタクロームEX(ASA64)



撮影者紹介

●島津久敬(しまづひさゆき)氏は45歳、鹿児島市在住のフリー写真家。日本写真家協会会員。歴史に視点を置いた作品が多く、個展に「明治維新」その他、写真集に昭和41年「石のさつま」43年「維新と薩摩」45年「旅情かごしま」がある。現在小学館「歴史の旅—薩摩編」、山田書院「日本の伝説」、集英社「図説日本の歴史」、暁教育図書「人物探訪日本の歴史」等、いずれも薩摩関係の仕事を手がけ、その他NHKテレビ、MBCテレビ、ローカル局にも関与した。また各種雑誌に写真を掲載、特に西郷隆盛の顔の研究と日本初期の写真の研究—薩摩関係を専門とする。

シベリアの謎の大爆発

隕石か、UFOによる核爆発か？
史上最大の謎の一つ、シベリアの
不思議な大爆発の原因を米ノ科学
者が調査すると意外な事実が——。
展開する白熱の大論争と推理合戦！



一九〇八年六月三〇日の朝七時頃、シベリアのツングース・タイガ（大森林）の上空に巨砲のごとき轟音がとどろいた。数百の農夫、狩人、漁師たちの目にうつったのは、太陽よりも強烈な光を放ちながら、ものすごいスピードで空中を飛ぶ一個の物体である。そのあとバノバラ村の住民たちは地平線上にきらめく火球を見たが、次いでそれはキノコ型の雲に変わった。さまざまの大音響が村から八〇〇キロメートルも離れたカウシュにまで聞こえたのである。カウシュの列車機関士は列車をとめた。貨車が爆発したと思ったのだ。アウガラ川の岸辺には大波が溢れ、他の河川に浮かんでいた材木が空中高く跳ね上がった。イエナ、イルクーツク、その他の町の地震計は地震を記録し、連続三夜、ロンドンやパリの市民は電灯なしで新聞を読むことができた。モスクワでは夜間に写真を撮ることもできたほどで、事件が発生した頃にシベリアにいたロシア科学アカデミー会員A・ボルカノフの日記によれば、シベリアの雨天時の雲は黄緑色なのだが、この黄緑色がときどきピンク色に変わったという。結局、あの途方もない火球は二千万平方キロメートルの地球と数千万本の樹木を破壊したのである。

以後、多年にわたって目撃者や多くの人がこの神秘の大爆発を語りついでたため、やがてその真相と伝説的な話がこんがらがってしまった。科学上では一個の巨大な隕石が落ちて爆発したのだということ、この謎は解けたかと思われ

た。

一九二一年に人々がシベリアの森林地帯でこの隕石の探索を始めたが、発見できなかった。一九三八年と三九年には爆発地域の上空から空中写真が撮影され、五九年から六〇年にかけて更に探険隊がツングースへ行った。現在ではほとんど年中この地帯の調査が行われ、モスクワとシベリアの各研究所が関係資料を集めては分析している。ツングースはいつのまにか特殊な科学研究の対象となったのである。一九〇八年から六九年までは実に七七種類もの著述家や研究グループが、爆発について七七種類の研究結

隕石は見つからなかつた！

このツングースの大事件については、地球にはある一定の時期に一定の場所へ宇宙から人間が来たという最初の否定できない証拠となる時がいつか来るだろうから、ここで各種の爆発調査をもっと詳細に紹介しておくのも有益であろう。

一九二一年、ロシア気象学会のレオニード・クーリクは、この大爆発に関する短い声明を発表した。独学で学び、系統的な科学教育を受けなかったが、彼はこの爆発事件が科学的にきわめて重要であるという確信を述べたのである。その発表によってロシア政府は調査資金を計上した。これはロシア革命より五年後に初めて行

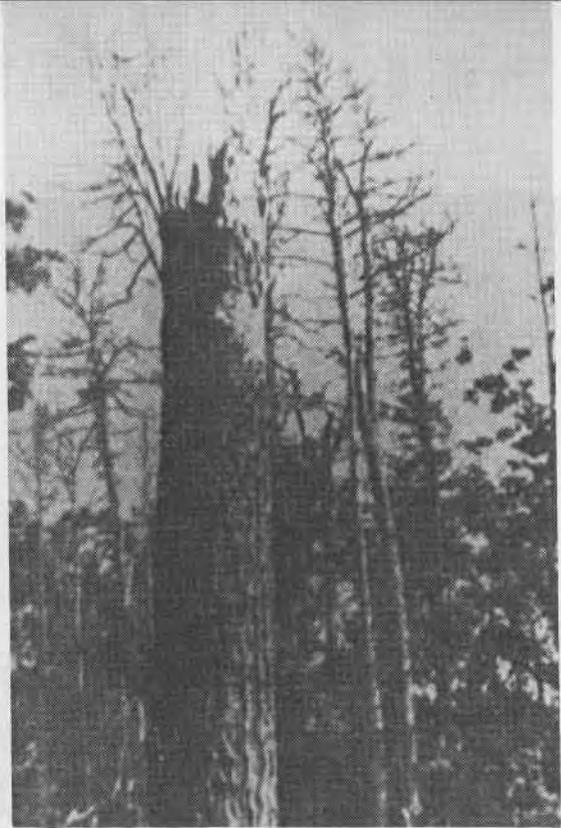
果を発表したが、一九六九年になって種々の科学的結論をともなった最初の調査結果が発表されたのである。それ以来次のような説が一般に認められている。(1)ツングース・タイガのこの大爆発は宇宙空間から来た天体によって発生した。(2)この爆発は地上約一〇キロメートルの位置で起こった。(3)これは一〇メガトン水素爆弾の力を持つ原子核分裂現象であった。更に、物体が地球の大気圏内を飛行中は飛行コースと速度が変化したという結論も出された。この核反応の実際の性質については物体の性質と同様、まだ未解決である。

われた探険である。クーリクは前途に待ちかまえている極度の困難をもとせずに出発した。現場を発見するだけでもひどいトラブルがつきまとったのである。

シベリアの大森林は南米やアフリカのジャングルのようにはつきりと想像できない。通俗的な科学書にほとんど述べてないからだ。しかしここは熱帯地のジャングルと同様にどの点から見ても容易に人を近づけない地帯である。一九一七年の革命までにここへ入ったヨーロッパ人は南方のジャングルへ入った数よりも少ない。したがって、隕石の落下だと考えられたこの事件を探険しようという考えは、いかなる科学



●爆発中心地より数キロメートルの位置。樹木が同じ方向に倒れている。1930年代に撮影。



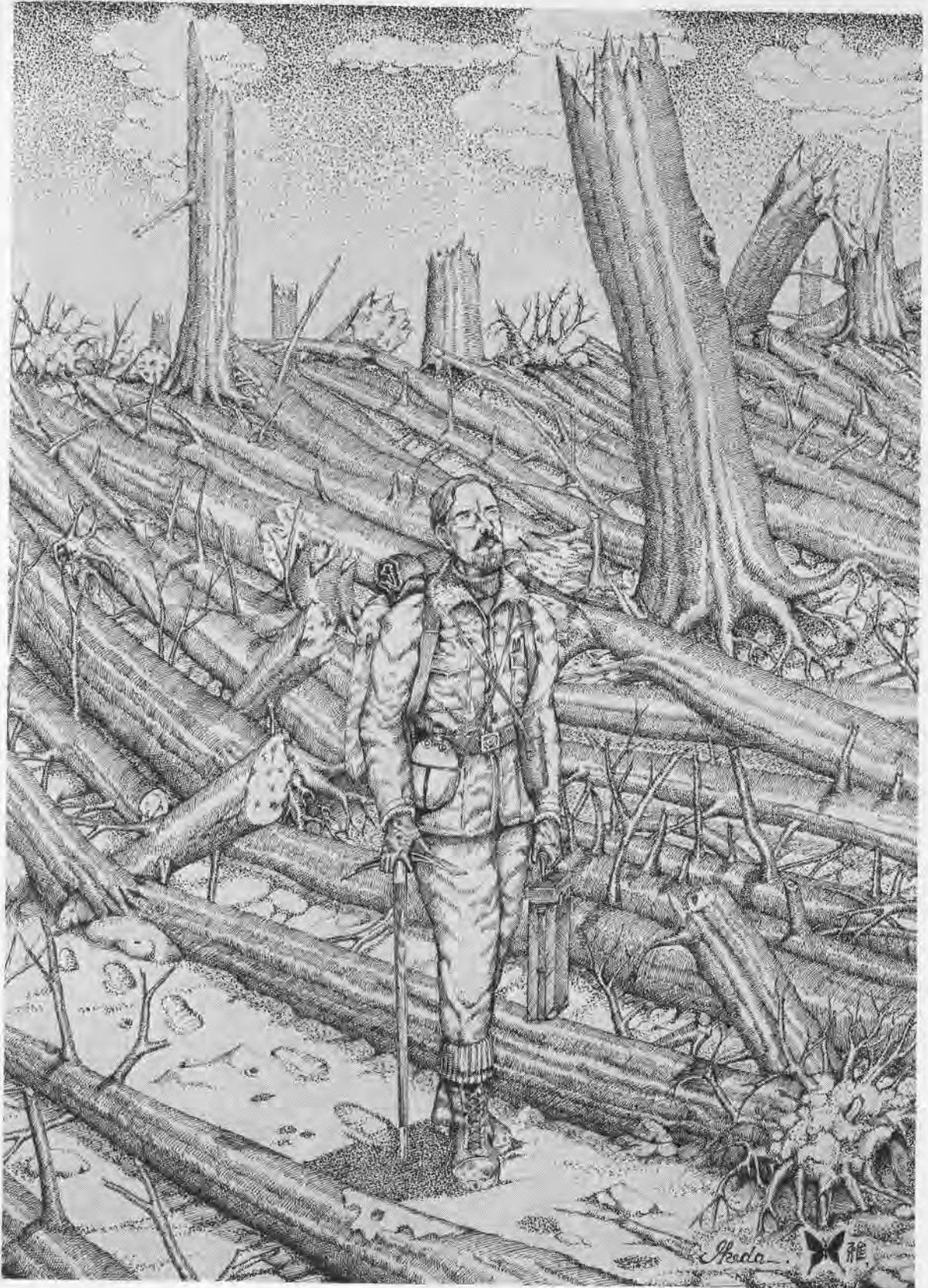
●爆心地で折れた木。周囲には新しく生えた木が意外に早く生長している。

者、冒険家、皇帝政府にも起こらなかったのである。この地帯の人口はきわめて少ないので、あの恐ろしい自然の現象に関してモスクワへ届く原住民の話は真実とかなりかけ離れている。またこの住民たちはオグディ神が天空から地上へ降りてその地帯へ立ち入る者をすべて火で焼き払った場所だと信じて恐れているためにこの地帯の調査は極端に困難であった。クーリックとその一行は凍った地面を貫通させる道具を運びながら、ほとんど生命の存在しない地帯を踏破しなければならなかった。土地の測定はできないし、道路や車の跡もない。クーリックのヨーロッパ人同行者たちが病気になる、へこたれて、バノバラ基地を離れても、クーリックはただ一人でシベリアのジャングル中にとどまった。そして一九二七年の冬の恐ろしい極寒中で、唯一のガイドの助けをかりて、最後の難関たる数キロメートルを突破したあと、ついに目的地の外縁に到着したのである。彼はシャホルマ山脈から見おろして、形容しがたい力によって破壊された森林の跡を目撃した！ まるで

地域全体が巨大な鎌かまで刈り取られたかのようだ。松や唐松の大木、その他シベリア特有の樹木類が根こそぎ倒れている。あらゆる樹木が北西の方向に横たわり、なぎ倒した異様な「怪物体」の説明を待っているかのようだ。ガイドは迷信で恐れおののき、それ以上案内することを拒んだので、クーリックは引き返すより他に方法はなかった。そして冬が過ぎてからもっと勇敢な同行者をもっと大勢つれて来ようと考えたのである。

一九二八年の春、クーリックは森林をかき分けて、ある広い地点に到着した。周囲の地面には輪状に樹木が倒れており、どの根も同じ方向に向いている。クーリックは今や爆心地にいて念願を果たしたと考え、そこで恐るべき破壊の跡を調査し始めた。彼の最初の報告はツングースの事件への関心を全世界に広めることになったのである。そして彼はこの大破壊が巨大な隕石によって起こったものと確信していた。当時としてはこれは無理のない「当然の」説であり、これ以外には考えられなかった。ところが彼は隕石の一かけらにも出くわさなかったし、あるべきはずのクレーター（大穴）も発見できなかったのである！ 沼地付近の爆心地で見たのは枝や葉をもきとられた、倒れた大木の山で、すべて枯れはてて、根は空間に突き出ている。これで隕石落下説に対する最初の疑惑が起り始めた。同行者の一人であるバシル・スーチンは七七種もある憶測のなかで最もバカげた説を打ち

者、冒険家、皇帝政府にも起こらなかったのである。この地帯の人口はきわめて少ないので、あの恐ろしい自然の現象に関してモスクワへ届く原住民の話は真実とかなりかけ離れている。またこの住民たちはオグディ神が天空から地上へ降りてその地帯へ立ち入る者をすべて火で焼き払った場所だと信じて恐れているためにこの地帯の調査は極端に困難であった。クーリックとその一行は凍った地面を貫通させる道具を運びながら、ほとんど生命の存在しない地帯を踏破しなければならなかった。土地の測定はできないし、道路や車の跡もない。クーリックのヨーロッパ人同行者たちが病気になる、へこたれて、バノバラ基地を離れても、クーリックはただ一人でシベリアのジャングル中にとどまった。そして一九二七年の冬の恐ろしい極寒中で、唯一のガイドの助けをかりて、最後の難関たる数キロメートルを突破したあと、ついに目的地の外縁に到着したのである。彼はシャホルマ山脈から見おろして、形容しがたい力によって破壊された森林の跡を目撃した！ まるで



出した。それによると、この大破壊はものすごい強風のせいではないかというのだ。だが問題解決に無限の意欲を持つクリークは、隕石に違いないという自説を頑固に変えなかった。そこで、隕石ならば凍った地面の二五メートル地下に破片が発見されるかもしれないと考えた。沼地の水がクレーターを満たしたのだろうと彼は

爆発したのは宇宙船か!?

一九四五年、ヒロシマとナガサキの強烈な閃光とキノコ型雲を伴った大爆発は、シベリアの大爆発を思い出させる。ソ連の雑誌フォクルグ・ツベタは一九四六年九月にSF作家のカザンチェフが書いた記事を掲載したが、それによるとツングースの落下物は別な惑星から来た核エネルギーを持つ宇宙船ではないかと推測している。その宇宙船がシベリアの森林地帯へ着陸しようとしたときに爆発したのだという。どのみちこれは核爆発だったし、しかも地上の空間で爆発したために、宇宙船の破片は全然残らないし、地上の爆発でないのでクレーターもできないことになる。このことは爆心地のど真中で、ある樹木群は直立しながら枯れているが、他の広い地域では樹木がなぎ倒されている理由を説明する。爆風に対して直角をなす樹木は梢や枝葉だけがなくなっているが、爆風の方向に対してもっと鋭角をなしている木は、周囲数マイル

思ったのだ。しかし半世紀後になってこの爆心地の沼はタイガで普通に見られる沼にすぎないことがわかったのである。一九三八年から九年にかけて飛行機により地形の測定が行われ、空中写真が撮影されたが、この仕事は第二次大戦で中断された。クリークは前線へ送られ、一九四二年四月にスモレンスクで戦死した。

にわたってなぎ倒されていたのだ。

カザンチェフの説は全くの空想だとして科学界で完全に拒否された。唯一の味方は世界的に有名なUFO研究者であるフェリクス・ジゲル教授であった。ただし多数の人もこの問題を深く追求していたので、カザンチェフの「バカげた考え」にもまだ支えはあったのだが――。

「ツングースに着陸した物体は、しかもこれは全く疑う余地のないことだが、隕石であって宇宙船ではない」とアカデミー会員のV・フェセンコフが書いた。一方、ロシア隕石研究センターの科学部長E・クリンコフも一、二言述べた。

「あの爆発はカザンチェフが言うような、数百メートル上空で起こったものではなく、物体が地面に衝突した瞬間に発生したのだ。そのためできたクレーターはすぐに水で満たされた。ツングースの隕石やその起源に関して謎は全く

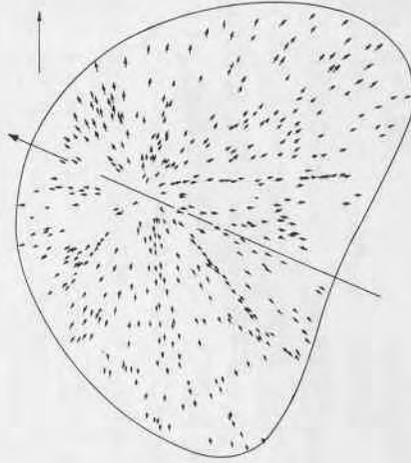
存在しない」

「以上終わり」だ。しかしSF作家の達した非科学的結論が、学者のまじめな声明よりも、実際に観察された事実にもっとうまくあてはまるとは言えないだろうか？

一九五九年から多数の新しい探険隊がツングースへ行った。主としてシベリア、ウラル、モスクワ、レニングラードなどの若いアマチュア研究者から成る探険隊である。彼らはこの探険を休暇旅行とみなして最初から自活した。二種類の調査隊が編成されたが、これらは今も存在している。第一のチームはA・V・ゾロトフが隊長になったが、この人はソ連地理探険サービースに属する人で、今もってあの爆発は大気圏外に源を発する核爆発だったと考えており、これこそあの事件にあてはまる唯一の説だと思っている。数年後にソ連のいろいろな科学者がグループに参加した。E・K・フェドロフ、M・A・レオンツビッチ、B・P・コンスタンチーフなどである。地理学者のゾロトフは現在第一流のツングース爆発問題専門家の一人とみなされている。第二のグループはG・プレカノフとN・コシェロフが率^ひいた。この二人も一九〇八年のツングース・タイガの上空でたしかに核爆発が発生したと考えているが、ただし自然の原因によるものだろうという。ツングースを荒廃させた「物」は放射性宇宙塵^{じん}だというのだ。この第二グループは発展して、今は公式の「シベリ

ア及び東部ロシアに落下した大気圏外物体に関する実験研究協会”となっている。

一九五八年にキリル・フロレンスキーの率いるソ連隕石学会の専門家から成る調査団が、初期の先駆者クーリクの足跡をたどってツング



●ゾトキンらの模型による倒木実験

ースへ行った。そして数年間の調査の後、“隕石が空中で爆発した”という決定的な結論に達した。彼らは単に衝撃波の方向やその結果を計算したのではなく、ポツダムで地理学会の記録資料から掘り出された一九〇八年にさかのぼる自記気圧計の記録を調べた結果、決定したのである。このことから彼らは地表上空の空気の移動は五キロメートルの高度で最大限に達したと判断した。大体この高度で“物体”がツングースの上空で爆発したというのである。これは一年後に他の実験で確認された。I・T・ゾトキンとM・A・ティスクリンは一万分の一のスケ

ールで爆発現場を再現するために、二メートル×三メートルの地面に決山の小さな木クギを立てて実験を行った。爆発と衝撃波を調べるため、このミニ森林の上に斜めの棒を渡し、それにミニチュア爆弾を吊り下げた。この“爆弾”を棒にそって移動させたり種々の速度や高度で爆発させたのである。この実験によって二七度の角度以下で爆発させると必ず実際の爆発現場に似てくることがわかった。測定の結果、五キロメートルの高度ならやや考えられるが、一〇キロメートルの最大高度が有利であるということがわかった。

一流のツングース事件の専門家とみなされている著名な権威者フェセンコフ教授は、数年前カザンチェフの説を怒って否定した人で、右の実験の結果に同意した。ところが同じフェセンコフが、ツングースの大破壊は隕石が原因ではないと確信するようになったのである。なぜなら完べきな磁気測定法によって判明した事柄は

慧星落下の形跡もない

何か他の天体かもしれないと考えたフェセンコフは次の一文を発表した。「一九〇八年に一個の慧星がツングースのタイガ上空で爆発したことは全く疑いない」。フェセンコフが「全く疑いない」と言っている点に注目すべきである！我々に知られているあらゆる天体の中で、

何一つないばかりか、タイガの特徴である氷層（厚さ二五メートル）は現場の中心部やその付近で破壊されていなかったからだ。この氷が——氷河時代の名残りだが——あれほどの大災害をもたらしたほどの巨大な物体によって破碎されたり一時的に溶けたりしたあとで、一点の傷跡も残さずにふたたび結合することがあるだろうか。この大爆発は地磁気に大きな変化をもたらし、イルクーツクばかりかグリニッチでも観測された。こんな激烈なかく乱が隕石で起こるだろうか。しかも一九〇八年に連続三夜続いた光輝現象は、地上の何かの粒子雲のせいだとは考えられない。大きさは別として、いったい隕石が地球に突入して爆発したと仮定しても、大気圏内のそのような高度で塵雲を発生させるだろうか。だいいちこんな雲が数時間でバノバラ、ロンドン、パリ間の距離を移動するだろうか。だから隕石ではないとフェセンコフ教授は言うのだ。

慧星だけが（隕石とアステロイドは別として）地球と接触する可能性はある。これが隕石から慧星に原因説が変わった理由である。隕石説が一九六〇年頃に最も保守的な学者によって否定されたあとのことだ。だがこれは新しい考え方ではない。アメリカの天文学者ウィブルが一九



●爆心地の沼

三〇年にこの考えを出しており、これはまもなくソ連の天文学者I・S・アスタポビッチによって支持された。六月三〇日と七月一日及び二日のシベリアと中央ヨーロッパの各夜は空が異様に輝いて、これが慧星説をとり入れるおもな根拠となった。この輝きは地球大気圏内の慧星の尾によって起こったのだろうというのだ。ジール教授は慧星説に反対する論説のほとんどを打ち出した人である。

この慧星説が認め得るようなものであるとしても、徹底的な批判に耐えるものではない。もし慧星が実際に地球に撃突したら、どうなるだろうか？ 慧星の中心部は直径数百メートルの固い水である（なかに数キロメートルに及ぶものもある）。こんな巨大な水のかたまりは隕石と同様に多くの物質の破片を含んでいる。表面は比較的薄い宇宙塵の層で覆われており、中心部の水中はメタンやアンモニアのようなガスから成り立っている。だから慧星が太陽に接近して中心部の温度が上がるとガスが液化して、数百万キロメートルにわたる尾ができるのである。圧力下で逃げ出すこのガス類は尾の中へ宇宙塵を引き寄せる。ところがツングースの仮説上の慧星は、大破壊を調査してみても、放出されたエネルギーが少なくとも10²³エルグと推定される事実から見ると、小さなものとは思えない。一九〇八年にもし巨大な慧星が地上に落下したとすれば、直径数キロメートル、深さ数百メートルのクレーターができたはずだが、すでにわかっているように中心部にはそれらしい跡はないし、今日有名になった沼も激烈なダメージの跡を示していない。しかも爆発したものが何であるにせよ、その破片が全然ないということ、隕石の場合と同様に慧星説をも疑わしくさせるのである。慧星や隕石のかけらは全く発見されなかったのだ。ロンドンやパリの市民が新聞が読めたというあの夜の光は慧星の尾によるものとは考えられない。地球では数度にわたってこのような現象があったが（一八六一年、一八八二年、一九一〇年）、一九〇八年事件のよ

うな光輝現象や地磁気の異変は見られなかった。慧星が数千キロメートル彼方にいても、地球に接近するすべての慧星の尾は強烈に輝いて巨大に見える。だから一九〇八年に慧星が実際に地球へ落ちたとすれば、放射されるエネルギーの量からみて、あの巨大な物体はかなり以前から見えたはずである。たしかなのは、絶えず伸びる尾ならだれか一人の人間の目につきえうなものだということだ。一九六一年の探険隊は珪酸塩と磁鉄鉱の粒を爆発現場付近で見出したが、隕石から出る同じ物質は世界中で見出されている。しかもこれは一九〇八年の爆発とは関係ないことが立証されているのだ。

大破壊をひき起こしたのが慧星ではないことを裏付ける別な理由がまだある。これは弾道学と関係のあるものだ。隕石学会が慎重に地図を作ったのだが、倒れた樹木群は疑いなく二種類の衝撃波があったことを示している。一つは爆発前で、これは物体が空中を飛んだときに激しい空気の移動によって起こったものである。もう一つは爆発後である。電算機を用い、目撃者が見たとおりに飛行コースを再現して、航空機設計家のA・モノツコフは物体が速度を落とすことを立証した。普通の慧星や隕石ならば秒速一〇—一五〇キロメートルなのに、物体の爆発の瞬間には秒速〇・七一—キロメートルであった。この速度は現代のジェット機のそれに近い。この速度で墜落したとすれば（天体の落下速度としては問題にならぬものである）、物理

学上の諸法則に従って、あの大破壊を起こすのに数一〇億トンの重量を必要とするはずである。宇宙空間を飛ぶ物体としてこの巨大な重量は異常なものではないが、物体の直径がわずかに

核爆発にちがいない

そこで今日多くの同意者を得ている別な仮説を調べてみることにしよう。あの爆発は原子核分裂により放出される熱エネルギーだったという説である。アメリカのノーベル賞科学者リビエーは、この説の重要な弁護者の一人である。ここで問題となるのは次の点である。「一九〇八年のツングース上空の核爆発は自然なものか、それとも人工的なものか？」

この問題に深入りする前に、この説が出されるようになった経過を見ることにしよう。ツングースの真相は何か？ 爆発現場の中心から約一七、八キロの所で、樹木群がハダカにされ、爆発中に光の放射によって燃えたことをゾロトフは発見した。生木ならその表面の一方センチメートルが六〇ないし一〇〇カロリーの熱線の放射を受けてはじめて燃えるのである。このことから推定できるのは、爆発で発生したエネルギーはおよそ 1.5×10^{10} エルグに達したに違いないということである。これはもっぱら核爆発をあらわすものであって、化学的な爆発ではない。

一キロであったと仮定しよう——これは事実とは違うのだが——。こんな怪物の残骸がどこに残っているだろう！ したがって隕石説も慧星説も「全く疑いなしに」間違いなのである。

我々が爆発の最も重要な媒介変数を知っているとすれば、関連した温度を計算できる。ツングースの爆発は数一〇億度の熱を発生したのである。あまりの高温なので一五—一八キロメートルの範囲内の生木は燃えた。クーリックの最も親しい共同研究者の一人であるE・L・クリノフは、ある樹木群には一部分だけ焦げた小さな枝がついていることを発見したが、これは大きな枝で保護されたからである。もっと最近の調査によると、火事は実際には急激な熱の発生の結果であり、小枝を完全に焼きつくような山火事によるものではないという結論に達している。別な奇妙な事実は、木が焼けた度合いはどれも同じではないということである。このことから大火は樹木の下の方から発生したのではないと推定された。焼け焦げた跡は高熱のガスでできたものではない。高熱のガスとすれば爆発は数一〇倍も強烈となり、中心地から遠く離れた木も根こそぎやられたことだろう。以上のすべてを考えれば、熱放射によって誘発された火事は核爆発の結果だということになるのである。

更には各地の観測所の一九〇八年六月三〇日のマイクロ日記気圧計は〇・〇〇一から〇・一ヘルツに及ぶ周波数の衝撃波を記録しているという科学的証拠が残っている。このような周波数は大気中の巨大な核爆発の典型的なものである。

磁場の変化と西ヨーロッパ各都市の連続三夜に及ぶ光輝現象に関する限り、トムスクのブレカノフが長となっている物理学者のグループが一九五八年のアメリカによるビキニ核爆発と半世紀も前のシベリアの爆発とを比較検討した結果を一九六〇年に公表している。ビキニの爆発はツングースの場合に酷似した地球重力場の変化をひき起こしたし、また夜間の激しい光輝現象も発生したのだが、シベリアの事件ほどにはおおよけにされていない。シベリアの雲が黄色からピンクに変化したのは、大気圏内に放出された放射能塵との接触の結果である。

したがって一九〇八年六月の末にツングース・タイガの上空で核爆発が起こったことは、だれも否定できないのである。

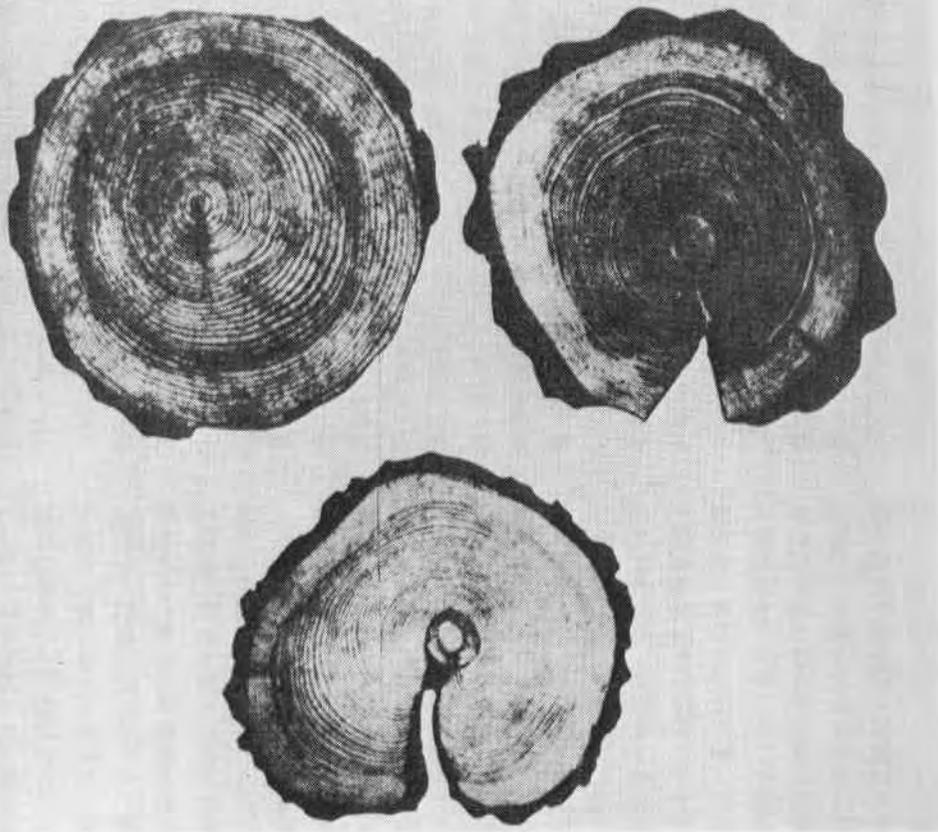
しかしまだ疑問がある。この爆発が熱原子核分裂なのかそれともっと普通のものなのか、そして自然現象か人工的なものかという問題だ。

これについてはG・P・プレカノフとコスチエロフを隊長とする「植物探険隊」の驚くべき調査結果が、現地を特別調査したあとの一九六九年に発表された。

樹木の年輪でわかった!

それによると樹齢四〇ないし五〇年（これは爆発後に発芽したことになる）の唐松や樺の木が普通なら七、八メートルの高さになるべきところを、実に一七ないし二二メートルの高さに生長していたのである！ つまり、この種の樹木ならば二〇〇〜三〇〇年かかってやっと達するような大きさになっていたのだ。こうしてこれら樹木の遺伝構造は一九〇八年に根本的に変えられたのであり、これは放射能で起こった現象なのである。幹の切口を沢山集めて慎重に調査した結果、一九〇八年以前にできた年輪は〇・四ミリから二ミリの太さがあったが、爆発以後にできた年輪は五ないし一〇ミリの太さになっていた。爆発を受けて今日も生きていく多くの木は五〇年以上にもわたってその年輪の太さを四倍も増大させていたのである！

この種の異常な発達は放射能をあびた植物に見られる特徴である。バルガ地理学会の研究所では、爆発現場から一〇〇個以上の木の切口を詳細に調査した。各木から七ないし一五個の標本を採取したので、全部で一〇〇〇個以上が検査された。これでわかったのは、生木にせよ枯木にせよ大多数の木は爆発時かまたはその後放射能をあびたという事実である。最近の調査の結果、外側の一〇ないし一五本の年輪は放射



●爆発現場の唐松の切口

1. 5mmの年輪をもつ樹齢40年の木（左上）
2. 1908年まで1.0mmの年輪をもち、その後は3.2mmになった樹齢95年の木（右上）
3. 1908年に焼けた唐松。それまで1.2mmの年輪が以後は5mmとなった。

能を多く含んでいることも判明した。最も重要な事実は次のとおりである。一九〇八年中かまは、その直後にたくわえられた年輪の増加放射能は、人工的な放射性同位元素の存在の仮定を必要とするということである。焦げた木片の調査中に高感度の分光計が用いられて、放射性同位元素セシウム一三七の存在が確認された。

核爆発説に対する同調者がふえるにつれて、各種の説が出てきた(天文学者ユーリーの説のように)。放射能を持つ隕石、慧星、その他の天体が大気圏内に突入して爆発したため、樹木が放射能をあびたというのである。しかしこうした説は時代の試練に耐えてはいないし、慧星が爆発して核爆発を起こしたという推測もだめである。その慧星は放出されるガスのために断面にして五〇ないし七〇メートルはあったと考えられた。しかし「物体」が弾道を描きながらゆっくりと飛んだ速度から考えて、この説も不可能である。

イギリスの科学誌ネイチャーが、アメリカのノーベル賞受賞者リビーの記事を一九六五年に掲載したが、それによると北米の樹木中に放射性炭素14が存在したことを報告している。彼は一九〇九年から樹木が放射能の増大を示したことを述べているが、これはソ連のアカデミー会員A・P・ピナグラドフも確認した。リビーは一九〇八年にツングースの上空で核爆発があったという説の熱心な主張者であるが、むしろこれを「反隕石」だと話す傾向がある。当時大気

圏内に宇宙の反物質が突入して物質と反物質の破壊をひき起こしたという彼の考えは充分うなずけるものがある。これはすでに一九四八年にアメリカの隕石学専門家ラ・パスがとなえた説である。もちろん完全に仮説上の可能性にもとづいているからには純粋な一つの説である。そしてプレカノフ、ゾロトフ、フェセンコフらの

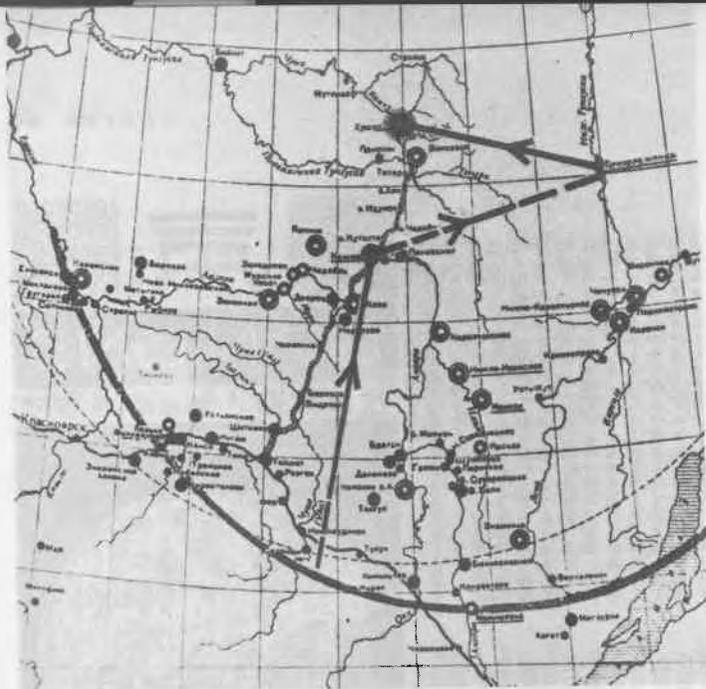
ソ連人学者は、これらアメリカ人学者が慎重につくられたツングースの資料を充分に取り上げていないと抗議している。ツングースの上空で何が爆発したにせよ、一〇メガトンに等しい力を持っていたのであり、その程度のエネルギーを開発するには三〇〇ないし四〇〇グラム

の「反隕石」を必要とする。この「反隕石」が実際に地球大気圏に突入したと仮定すれば、「物体」が通過したと思われる軌道の計算を可能ならしめる弾道波をひき起こすことはなかっただろう。弾道波の力は本来、もとの爆発のそれよりもはるかに小さいが、物体の直径を数メートルと推定させるほどの大きさはある。「反隕石」は径数メートルの物体ではない。しかも「反物質」物体を見た者はだれもない。このような物の存在は全く科学的な憶測から出た公式にもとづいているのである。またこの種の物体があるとすれば、物質と接触したとたんに爆発するだろう。すなわち、太陽系に突入することは爆発を意味することになるだろう。しかしこれは地球から数百万キロメートルの所で起こるだろう。だが反物質で推進する宇宙船がツングース

の上空で爆発したという説を認めるならば、反物質の爆発の可能性はある。この考えはソ連の学者V・N・メヘドレーが、各調査団の結論を研究した結果、出したものである。反物質から出るエネルギーで駆動するモーターの爆発は、核爆発について我々に知られている特徴のすべてを示すだろう。

人工的な原因によるというこの考えを支持する有力な説は、物体が飛んだコースを再現すれば出てくるかもしれないが、この線の調査は現在まで決定的な結論に達していない。以下はその例の要約である。

一九六四年に公表された資料によれば、物体は南から北へのコースをとったと考えられている。ゾロトフと共同研究者たちは爆発地域で打ち倒された樹木を調査して、別な結論に達した。物体の飛行コースは弾道ショックで倒された樹木の縦軸と一致する。つまり物体が最初西から東へ飛んで、次にバックするという急激な方向転換を示すコースなのである。南から北へ飛んだという最有力な説はアストポビッチ教授が出したもので、物体の飛行中に記録された地震や電気的な変化と関連のある多くの複雑な計算にもとづいたもので、また爆発地域近辺に住んでいて実際に飛行ぶりを見たか、または二種類の音響の一つを聞いたりした目撃者たちの証言も取り上げている。それぞれ別個に研究していたこの両方の研究家の計算と結論は、爆発の中心部に関する推定で正しいことがわかった。



●物体の飛行コース（矢印の線）

すでに述べた爆発現場の模型によるゾトキンとチルクリンの実験は、南説と東説とが必ずしも互いに矛盾しないことを示した。すなわち、ツングースの物体が飛行中にコースを変えたということは「だれか」がこれを操縦していたということになるのだ！

物体は大気圏内に突入後、ケシュマまでの南方コースをとったあと、プレアスブラジェンカ付近で突然東へターンした。当時ポーランドのタトランスカ天文台に属していた一天文学者

は、一九〇八年六月三〇日に一個の「火球」を目撃したが、この物体はポーランドの上空で急にコースを変えた。こうして力学の法則のすべてを無視したのである。これが同じ物体だったとすれば——この天文学者の日時が一致する点からみると、同物体であることにまず間違いな

れはおそらく歴史に残る重要なものとなるだろう。ソ連、アメリカ、イギリス、その他チェコスロバキアとハンガリーを含む東欧諸国の研究者が集まって、人間の住む別な惑星の存在の可能性や宇宙の他の文明と接触する方法の有無などを討議した。

一体にソ連の科学者は西欧のそれよりも、この分野では深く考える傾向がある。たとえばその会議で議長をつとめたビュラカン天文台長ピクトル・アンバルツミアン博士がそうである。地球人の存在を宇宙空間の他の人類に知らせる方法について協議していたとき、科学者たちは、知的生命が発達していると思われるあたりで水爆を爆発させたらどうかと提案したのである！

最後に、数種の事実がある。方向や速度ばかりではなく高度にも関するもので、このため、物体が何かに導かれていたことを我々に確信させるのである。飛行コースの変化の一致からみれば、タイガ上空の爆発物体の特徴について、もはや疑惑の余地はほとんどない。要するにそれは知的生物によって誘導されたか遠隔操縦された大気圏外物体の特徴を示しているのだ。しかしそれから推定すると、一九四六年に作家のカザンチェフが述べているように、事故のために爆発したというのはこじつけのように思われる。ただし人間の空想の枠内では、すべての推測がみな正しくなってくるものなのだ。ツングースの爆発は、地球上の影響を調べるためかそれともただ大気圏外の知的生物の方へ注意を引かせようとしたのか、その知的生命体によってわざと行われた実験的なものだったかもしれない。これはバカらしい考えだろうか？

一九七一年九月初旬にソ連南部のアルメニアのビュラカンで、国際科学会議が開かれた。この問題をだれが解決するだろうか？

久保田八郎 訳

はこの状態に不満な人々がUFOや超自然現象に興味を持つのも当然のように思われます。これらから地球人の行動には見られない、何か違った生き方、考え方をいれだそうとしているのではないのでしょうか。単なる現象とは思えません。平和的と言ってもあまりに抽象的すぎてうまく説明できませんが、他に言いようがなく、やはり平和的と言えませんが、革命、テロ、目立つ思想と言えれば暴力がついてまわります。いつまで過去と同じような考えをくり返すのでしょうか。暴力をもって真の平和はこないという。過去時代では、それが一番早く早く効果があったでしょうが、それが一番でっかい失敗が重なっていき、それが人間には思想の思いきった変革というのではないのでしょうか。過ちを頭から払いのける力がなくて、中身は全然かわらず、そこらのファッションのようにアクセサリを取り換え引き換えて満足しているだけでしょうか。

とにかく今までの危険な考えにたよってはいけません。来再び暗黒の時代がくるのでは……。暴力でしか何かをまっとうできないということ。地球人の限界を思ってしまうのです。この辺で恐ろしくて破滅的な思想は博物館でも入っていただけに取ってかわるべきです。しかしこれらに取ってかわるべき見当たらず、当分は悲感的観測しか考えられません。でも見つけなくては！ こんなことを考えるのは理想主義的すぎると思うかもしれませんが、それが人間の弱点であり、進歩できない原因だと思えます。宇宙には我々に似ている宇宙人もいるでしょうが、容姿も考え方も地球人とは全然違っている異星人も存在していると思う。そういう存在を知ること地球人の思考力の限界という点に大きな影響を与えるでしょう。一刻も早くそんなチャンスが到来してくれることを希望します。どんなに空想的に思われようと、それは時が解決してくれるものと信じています。長々と自分かたてなことを書きました。UFOと宇宙の読者の方々、はどお考えになりましたか。「声」のコーナーで、ご意見を聞かせてください。

匿名希望(女性)
(千23) 千葉県東金市東金二〇五二

編集部の方々、こんにちは。僕は中々の自称超常現象研究者(?)であります。「UFOと宇宙」らしい雑誌ですね！日本ではこういう種類の雑誌は「UFOと宇宙」ぐらいのもので、すぐく価値のある本だと思っています。僕はまだ一度しかUFOを見たことがありません。それは一年前の寒い土曜日でした。友人3人

と、UFOを見ようと市営グラウンドで夜おそくまでがんばっていました。そのときは僕だけ見て友人は見えていません。

僕は超能力者とUFOの関係を考えることが必要だと思えます。それは大部分の超能力者がUFOを見ていて、さらに宇宙人とリンクした超能力者もいるようです。また宇宙人がテレビを扱うというところ何か関係があると思います。

北海道北見事件のことですが、僕も取材してほしいと思います。あんなところが多いと思います。もし本当ならば大変なことだと思えます。また某出版社ではこのことに関した書物を出版しているらしいし、とにかくこういうことがあったということだけを載せてください。

本誌No.9の宇宙人対策委員会のことでくれぐれバカバカしいと考える人ほどバカみたいですね。地球人も宇宙に住んでいるのです。宇宙人がいてもなんら不思議はないではありませんか。最後に、宇宙人、僕と会ってほしい。近松本陣(14)
(千19) 東京都福生市熊川八六三

僕はごく最近UFOの研究(と言っても本をあさる程度です)を始めました。多種類のUFO関係書を通過して、僕はUFO存在肯定者の一人に入っています。しかし、デタラメなトリック写真やUFOの証言などが横行するのを見聞きすると、僕の信念はしばしば根底からくつがえされるのです。実を言うと僕は一度UFOらしき物を見たと見たとあるのです。小学5年のときです。空を見上げてみると円盤形の物体がものすごい速さで、縦から横へ回転していたのです。目撃時間は数十秒でした。でもそれがUFOに対する初めての出会いでした。でもそれから数年の間は全然UFOのことなど話題にもなりません。嘲笑されるのがイヤだからです。ところが最近のUFOブームに便乗して、再びUFOに対して真正面から対処する形になったのは大変うれしことです。

本誌「UFOと宇宙」は、値段は高いもののUFO愛好者、研究者にとっては格好な雑誌です。欲をいへば、もう少し本誌の中心をUFOで埋めてほしい。

本誌の発展を心から祈りつつ……。

下洞一則(17)
(千18) 東京都墨田区横川五一九一三二一五

出版社のみなさん「ゴズモ」から「UFOと宇宙」という題号が変わって、ますます内容が充実することを心からお祈り致します。

●阪上清久(画) No.2



これが地球人だ！

(千17) 山口県下関市横野町一八一五〇

田中仁

ところで12月号(No.9)の読者の声を読んで、96ページの峯君の意見について訂正したいところがあるのでペンをとりました。彼は特殊相対性理論では、光速で50年飛ばせば50年しか進みません。しかし光速の0.9998倍で飛ばせば2500年光年飛べる」と言っています。僕はこのところの意味がよく理解できないのですが、50光年の間隔ではないのでしょうか。それに光速で50年飛ぶという言い方はどうもふさわしくないと思うのです。もし宇宙船の速度が光速に達することができたら宇宙船内は時間が全くたたくなくなり、そこは時間のない世界です。(ランダウ・ジュコーフ共著「相対性理論入門」)

時間のない世界なのに50年飛ぶという言い方は、どう考えてもおかしいじゃありませんか。また光速の0.9998倍で飛ばせば2500年光年飛べるとありましたが、宇宙船内の時間がどのくらいたったら25000年光年飛べるといってもいいと思います。彼が勘違いしているのかもしれないですが、お互いにもっと相対性理論の勉強をしようではありませんか。もし僕の意見に反論がありましたらお手紙ください。

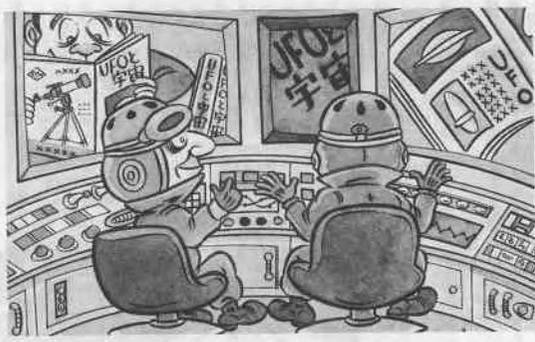
拜啓、編集部並びに「UFOと宇宙」愛読者の皆さん。私は皆さんに聖書について宇宙人に對し新たな思いをもたれることを願って宇宙人に對し新たな宇宙科学に関連があるかと疑問をもたれませんか。聖書と聞くと多くの人が「それはただのキリスト教の教本ではないか」と思われるのではないのでしょうか。私もまだ過去においてはそう思っていました。しかしながら実は違っています。始めてUFOの存在を知ったのはT.V.で、謎の円盤UFOを見たときから過ぎて昨年でした。「バイブル大予言」が某社から出版されましたが、これによって聖書が宗教書だけでなく予言書であることになりました。宇宙人の飛来目的も推測することができ、UFOに対する興味が一層深くなりました。聖書を読んでいたけれど、この形です。予言者が予言を述べています。これは宇宙人が地球人に予言を知らせ、知らせを受けた地球人は予言者としてこれを聖書の中で述べているのではないだろうかと思像しています。しかし、宇宙人が地球人に予言を述べているのではないかと、宇宙人イコール神と言っているのではないかと、宇宙人は六千年以上も前から地球にきています。彼らはアの洪水などにより、地球に暴虐が満ちるのを防ぐために地球を破壊しました。そして今度地球人は科学の発達により知識を増すにたがって人口爆発、公害などの人類滅亡の元凶をもたらした。そして再び暴虐に満ちた時(西暦二千年説)地球人が愚かさによって自ら地球を滅亡するのを防ぐために火によって宇宙人は地球を破壊する。しかしこれは前兆があり、地球人へ救いの道が開かれている……と解釈しています。

「UFOと宇宙」No.10の21ページ、ユリ・ゲラーの話の中に「大計画」という言葉がありました。それは地球滅亡の前に地球人を救い出し、地球を破壊する一連の事業を意味しているのではないのでしょうか。その準備として地球を観測したり、宇宙人の存在を地球人に知らせたり、その他の目的で円盤に乗って地球の周りを飛び回っているのではないかと考えています。

野坂正彦(18)
(千16) 鳥取県倉吉市校

はじめに貴社へお便り致します。本校(長崎県諫早市立北諫早中学校)におきましても本年度(S.49年)必修クランの中心をどのようものにすかを協議する中で、かねてから温めていたUFOへの興味を子供たちと共に学習し深めることとができればという願いがかなえられ、部員45名

- 郷内秀夫 (千鹿) 東京都調布市国領町五一九一五
- 中岡俊哉の「続・世にも不思議な物語」と「私は宇宙人を見た」この2冊をUFOなどに興味をお持ちの方に無料で譲ります。
- 吉松岳志 (千洲) 広島県府中市鶴飼町 四〇 高松様方
- コズモNo2 / No3、数部あります。希望者は往復ハガキで連絡してください。
- 安川芳行 (千洲) 千葉県千葉市高洲二一〇一一三
- コズモNo3 / No9を3000円 (送料そちら負担) で全号ともホボ美品、一冊ずつでもいいです。または、往復ハガキで。
- 笠原雄次 (千新) 03 埼玉県児玉郡神川村渡瀬六三二一三
- カメラ (ミノ) ルタボケット16PS ケース付 定価5500円 (送料共) でお譲りします。
- 故障なし、キズなし。
- 丸山勝司 (千洲) 82 長野県南安曇郡堀金村厨町
- コズモ創刊号 / No5を譲ります。代わりに学習院高校、創価高校などの制服上下濃紺でホック止めがある同型の物であれば他校の物でも結構です。譲ってください。太急ご連絡ください。
- 前川 明 (千帆) 石川県金沢市弥生二八一〇一八
- コズモNo3を400 / 500円で、8番目にきた人に譲ります。またコズモNo1、No2、No4のどれかとの交換でも可能です。返事の欲しい方は往復ハガキで。
- 新沼直樹 (千帆) 北海道札幌市北区北三五五四
- コズモ創刊号、No2を適価で、また「世界のミステリー」も譲ります。
- 田川明正 (千33) 東京都江戸川区西小岩二二一三二四
- コズモNo4 / No9を「譲りますとUFO」(定価9500円) という本をつけて譲ります。(送料共)
- 職員武司 (千洲) 02 埼玉県大里郡妻沼町西野三二〇
- コズモNo4 / No9、No4は700円前後、あとは各3000円 (送料そちら負担)。往復ハガキで。
- 小島 武 (千帆) 22 新潟県中頸城郡妙高村住吉四一五
- コズモ創刊号 / No3のそれぞれとあなたの「キネマ旬報」SF映画大鑑「妖怪の世界」(未中書房)「田谷英三の生涯」(田谷 一著・小学館)のいずれかと交換してください。往復ハガキで。
- 中野 泰 (千衛) 兵庫県神戸市灘区上野通三二四一〇
- カメラ (ミノ) ルタ16MG-S・スタンダードキック、フラック。定価33000円を23000円程度



● 阪上清久 (画) No.4

- 譲ります。2回使用、新品同様です。
- 福田智行 (千出) 静岡県静岡市八幡五六一六一三
- コズモNo2を13000円、No6・7を各3500円で希望者に譲ります。往復ハガキで連絡してください。
- コズモ創刊号よりNo9まであります。大きなキズや汚れは無し、9冊まとめて5000円 (送料別) 以上で譲りたいです。連絡を待ちます。
- 丸山景也 (千洲) 77 長野県東筑摩郡麻績村 (旧九七八)
- コズモ創刊号 / No3まで貸します。
- 石坂 孝 (千勝) 01 富山県滑川市紫一九八
- コズモ創刊号 / No8を譲ります。希望値段を書いて連絡してください。(往復ハガキで)
- 塚田 純 (千230) 神奈川県横浜市鶴見区東寺尾北台九四
- 空と山田盤のふしぎ 小学館、「世界のスリッパ」画報「世界の恐怖画報」黒崎出版を一冊各4000円 (送料別、全部まとめて10000円 (送料別) で譲ります。電話で連絡を、目黒義英 (千勝) 東京都練馬区高松六一二一七 電03199710897
- ★譲って下さい
- 私の「ヒューマノイド」についてのマジな話をあなたの「ヒューマノイド」と交換してください。まずはハガキで連絡を。
- コズモ創刊号 (千洲) 山形市城西町一七一三
- コズモNo2 / No4を4冊2000円程度で譲ってください。一冊でもかまいません。切り抜き、落書きなどのない美品をお願いします。ハガキで連絡を。
- 国枝浩一 (千340) 埼玉県八潮市木曾根二二
- アサヒペン(ペン) タクマー交換レンズ (200ミリF4か300ミリF4) を譲ってください。
- 4000円+3000円以上は切手です。ハガキで知らせてください。
- 土屋 一夫 (千301) 岐阜県安八郡墨俣町寺町
- コズモ創刊号 / No4を各冊7000円前後で譲ってください。ご連絡ください。(送料当方負担)
- 千葉俊也 (千新) 06 宮城県登米郡中田町上沼字堀米四〇一六
- コズモNo1 / No4までの新品同様 (汚れ、キズ、文字記入のない物) を5000円前後と、それに付け加えて、先頃、電通大調布寮で催されたUFOに関する資料 (有名UFO、大型イオン口盤飛行実験の写真、その他) で、是非譲ってください。まずハガキで連絡を。
- 矢田圭一 (千33) 東京都府中市晴見町一二八、一九二〇六
- UFO写真のネガを持っている方、UFO狂いの様に貸してください。責任を持ってお返し致します。(トリック不可)
- 鈴木達人 (千勝) 静岡県浜松市天王町七六三
- コズモ創刊号 / No2を是非とも譲ってください。
- 藤田明久 (千帆) 京都府京都市上京区立立光通千本東八六一五
- UFO写真、UFO関係の切り抜きを持っている方。是非このUFOキチガイの様に譲ってください。ハガキで連絡を。(トリック写真は不可)
- 佐々木甚彦 (千帆) 01 宮城県宮城郡利府町加瀬字町六七
- コズモNo2 / No4を、ぼくの「写真で見える空飛ぶ円盤200集」(矢追純一編) 新品の本と交換してください。できれば創刊号 (全頁コピー、多少キズ物も可) もお願いします。まずハガキをください。
- 二本柳俊哉 (千帆) 北海道函館市柏木町八三四
- コズモNo1 / No4までを一冊5000円程度で譲ってください。
- 木下兼一 (千33) 神奈川県横浜市南区南太田町一三二
- コズモNo4に掲載された広告 (P43) で月刊エーホロジストをお持ちの方は適価でお譲りください。まずはTELでお連絡を。
- 本田邦彦 (千33) 東京都江戸川区北小岩五一六一七 電03165819094
- コズモNo5 / No7をぼくの「現代の怪奇」7500円、「日本の四次元」7000円、合計14500円と交換してください。コズモ・バイナリを「世界の四次元現象」17500円と交換してください。大陸書房オカルト・四次元シリーズ一冊を「四次元の入国券」9000円と交換してください。UFOの資料送ってください。連絡を待ちます。
- 稲村吉雄 (千帆) 北埼玉郡川里村北根九七四
- コズモ創刊号 / No9まで是非譲ってください。それが不可能なら、この内何号でもかまいません。これらの予算50000円 (送料当方負担) 往復ハガキを待っています。
- 池本敏朗 (千勝) 高知県南国市大浦乙三一七六一
- UFOを撮影した方、ネガをお貸しください。責任をもってお返しいたします。(送料当方負担) また、G・アダムスキー著「テレパス」に「生命科学」を廉価にてお譲りくださる方、お知らせ願います。
- 高橋 信 (千33) 埼玉県野市上落合九七三 日曹共同住宅A1212
- コズモ創刊号 / No7までをぼくのUFO、心霊、テレパス1関係の本 (数種類あり) と取り替えませんか。詳しくはハガキで連絡を。
- 渡部和彦 (千2) 千葉県市川市中国分四一一一四
- 全国の本誌ファンの中でUFO写真のネガを持っている方、私に少し貸してください。ご連絡を。
- 太田利明 (千勝) 愛知県西尾市桜町二二四 電05635174267
- タキオ理論、重力場理論、超対称性理論を欲している方、どなたかお譲りください。
- 田川洋典 (千新) 24 長崎県西彼杵郡大高町 中央団地A21402
- コズモ創刊号をコピーでよいですから表紙も入れて約7000円以内で譲ってください。代金は低額切手にてお願いします。なお、連絡はハガキで。
- コズモ創刊号を10000円程度で譲ってください。送料別、出来たら美品をお願いします。
- 中島 一之 (千出) 静岡県清水市三保白浜 第八港風二〇四
- コズモ創刊号 / No9まででもいいです。まずから

タダでお譲りください。当方No.10から買いためた男の子です。(厳し、著書キ、汚レ女でも可)

●青木剛(千歳) 東京都柏江市小足立六八九一六 ●コスモ創刊号/No.9まで3000円前後で譲ってください。(切り抜き不可) 出来るだけ東京に近い方と。往復ハガキでお願いします。No.8まででもかまいません。

市川伸男(千歳) 川崎市多摩区菅一五〇八 ●UFOの写真を写された方、焼き増しを1枚お譲りください。それからネガもお譲りください。(トリック不可) ハガキで連絡を。

西浦英王(千歳) 18 滋賀県甲賀郡信楽町大字長野松尾町 ●コスモNo.2/No.3をお譲りください。値段はハガキにて一報をおまわししております。

黒川博幸(千歳) 兵庫県西宮市大社町二一三三 ●コスモ創刊号/No.4を愛用のカセットコーダー(メーカー品18000円相当、ACコード、カバマイクなし(一年半使用))で譲ってください。なお、空飛ぶ円盤の製作法)をつけて差し上げても結構です。

木戸間さよこ(千歳) 愛知県豊橋市住吉町一五九の二 ●コスモ創刊号/No.3まで3000円ぐらいで譲ってください。一冊だけなら7000円ぐらいで譲ってください。

●赤木莊(千歳) 東京都府中市住吉町五一〇 ●コスモ創刊号/No.9をどなたか数日間貸してください。一冊でも結構です。

小柴賢洋(千歳) 京都市左京区吉田泉殿町六一 ●「UFOと宇宙」を読んでおられるみなさん/UFO写真のネガを持っている人は僕にお貸しください。ネガは僕が責任をもってお返しします。

宮本吉博(千歳) 01 鳥取県米子市大崎三二二四 ●コスモ創刊号/No.4を一冊でも持っている方、適価で譲ってください。(破れ、切り抜き、落書き不可) 完全保存版で無キズの方は高価で買います。UFOの資料、写真、ネガがありましたら譲ってください。詳しくは往復ハガキで。

小林啓次(千歳) 21 愛媛県越智郡吉海町下田水電0897-842140 ●コスモ創刊号を10000円で譲ってください。

片山明宏(千歳) 01 埼玉県児玉郡美里村古郡五一 ●どなたかコスモNo.1/No.8まで無代でお譲りください。(日本一のユニバースファンより)

安塚 誠(千歳) 02 埼玉県北葛飾郡鷺宮町上町二

一六八) ●僕は、旧題コスモNo.1/No.4を持っていません。ですから是非とも譲って欲しいのです。4冊25000円前後でどうでしょうか。送料は当方で負担します。まず連絡を!

与話達哉(千歳) 11 愛知県愛知郡長久手町大字岩作字西立花八二二 ●UFOの写真を写された方、焼き増しをなるべく多くお譲りください。(トリック不可) またUFO雑誌、新聞の切り抜き、記事のコピーなどを多数ほしいのです。ぜひ、同好会の成立のために皆さんの協力を心から願っています。なお、譲ってください方にははさらしい品物を用意しております。

波部英充(千歳) 12 北海道深川市音江町稲田三五四八二 ●コスモ創刊号/No.4までを是非お譲りください。値段は譲ってくださいの方の希望価格を尊重しますが4冊40000円前後でどうですか。(美本希望) 1冊ずつでもかまいませんのでよろしく。(送料当方負担)

野々村幸次郎(千歳) 兵庫県高砂市米田町塩市字明田一四〇二〇 電0794-314493 ●コスモ創刊号/No.4まで20000円/30000円で譲ってください。

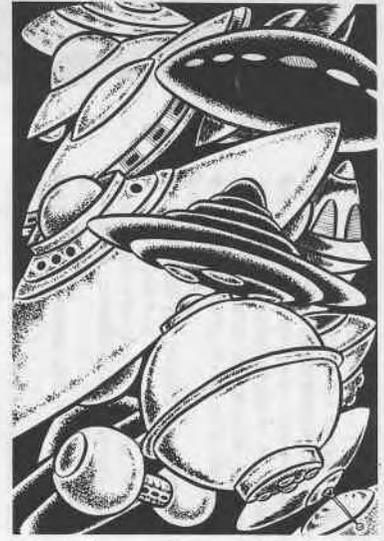
岩本二郎(千歳) 大阪府岸和田市春ヶ丘町一〇四 ●コスモNo.6/No.8をどなたか貸してください。コピーしたく思います。送料はモチロンこちらで負担します。おれはご相談のうえ、まずはハガキで連絡してください。

井上君子(千歳) 大阪府堺市南野田四五三二一 ●コスモNo.3, No.4を各10000円で譲ってください。(美品指定) なお、往復ハガキで連絡してください。ぜひお願いします。

山方 淳(千歳) 兵庫県明石市東丸町一四一六 ●天体地上兼用の望遠鏡を安く譲ってください。屈折式でも反射式でもどちらでも良いです。

小田忠三郎(千歳) 神戸市垂水区霞ヶ丘一二二一 ●どなたかコスモ創刊号/No.4を28000円以内で譲ってください。ひどく破れていなければ、多少折れたり汚れたりした物でもかまいません、お願いします。

●阪上清久(画) No.5



梅本幸男(千歳) 01 滋賀県東浅井郡浅井町尊勝寺三〇五 ●コスモ創刊号/No.4までを20000円で譲ってください。(送料当方負担)

釜谷新一(千歳) 石川県金沢市城南一三一五 電0762-62610342 ●コスモファンでフルワーカー2をお持ちの方(説明書希望) 3000円程度とコスモ創刊号で譲ってください。お早目に連絡を。

中田一弘(千歳) 愛知県豊橋市松葉町三三八六 ●コスモ創刊号/No.5までを50000円前後でお譲りください。美本であれば70000円ぐらいまで差し上げます。

藤沢伸彦(千歳) 11 岡山県倉敷市茶屋町三七二 電0864-12810062 ●どなたかコスモNo.1, No.2, No.4を譲ってください。どれか1冊でもおまかせません。まずはハガキをください(美品希望)。

葛西新一(千歳) 01 青森県南部平賀町大字新屋栄館八二 ●コスモNo.1/No.4まで譲ってください。そして私の持っている「恐怖の心霊写真集」と「私は宇宙人を見た」という本と交換しませんか。それでなければ10000円です。

鎌田良一(千歳) 東京都昭島市上川原町八四一三三 ●コスモ創刊号/No.9を送料共35000円で、できればこれ以内で譲ってください。汚れてもかまいません。ハガキで連絡してください。

中山康男(千歳) 東京都江東区亀戸七三一一三三 ●コスモ創刊号/No.4(美品) をできれば一括して30000円前後(送料別)でお譲りください。協力者には、当地方の新聞に載ったUFO記事の切り抜き、写真(本物)その他資料をお礼に進呈致します。

す。まずは往復ハガキで連絡を。

上野重則(千歳) 26 和歌山県西牟婁郡すさみ町本城四〇二五 ●コスモ創刊号/No.8まで。創刊号は10900円、No.2/No.8は定価で譲ってください。まず手紙で。

沢田一夫(千歳) 神奈川県平塚市明石町一三四四 ●私はUFOに大変興味を持っています。創刊号だけはあります。どなたか創刊号を10000円ぐらいで譲ってください。

近藤研一(千歳) 神奈川県横浜市緑区奈良町二九一三一八二〇四 ●コスモ創刊号を20000円、No.2/No.4までを各7000円、No.6を8000円で譲ってください。

(送料込み、美品希望) 八木晴三(千歳) 24 北海道新冠町新冠町高江三四四 電014647-2951 ●コスモ創刊号/No.4までを30000円前後で譲ってください。(送料当方負担) またUFOの写真を写された方、ネガが、焼き増しをお願いします。譲ってください方には図書券進呈。

宇野栄一(千歳) 滋賀県大津市電ヶ丘一九一三六 ●コスモ創刊号/No.5までを50000円(送料別)ぐらいで譲ってください。(切り抜き不可) カラーコピーでも結構です。おれはUFO書差し上げます。連絡は午後7時頃に電話をお願いします。遠方の方はハガキでも結構です。

須永真樹(千歳) 群馬県伊勢崎市田中島五五六 ●コスモ創刊号/No.4までを20000円とUFO(池田隆雄著、大陸書房、9500円)で譲ってください。(破れ、切り抜き、落書きは不可)

横見浩之(千歳) 千葉県船橋市緑台一三三四一〇五 ●コスモ創刊号/No.5まで一括して送料共25000円前後で。一冊だけでも送料共4000円前後でお譲りください。ご連絡は往復ハガキをお願いします。

古高ひとみ(千歳) 静岡県静岡市長沼二八六一二 ●コスモ創刊号/No.4までをぜひ欲しいのですが、適価でお譲りください。

山田好健(千歳) 東京都高円寺北二二一八 松本様方 ●コスモ創刊号/No.8までを一括してどなたか譲ってください。値段はそちらの希望で結構です。

大野吉重(千歳) 大阪府泉大津市式内町一〇一三 ●UFO関係の切り抜き(新聞など)を持っています。方、またUFOの写真を写された方(トリック不可) 譲るの切り抜きは責任をもって僕に集めたUFO 資料(千歳) 大阪府泉大津市海新町四四五 電0724-122-4574

日本超科学会雑誌

超科学

第4号特集「超科学実験装置の製作」送料共500円
 主要記事「UFO探知機の製作」ほか 橋本 健

ジュニア会員新設
 学生に限り入会金500円、年会費2000円で入会できます。

●会員は下記の品1割引！

超心理学実験用機械器具

- 四次元波受信機(4Dメーター) サボテンの歌が聞け、ウソ定価39,000円 送料1,000円 発見機としても使用できます。
- 超心理学実験機(念力測定器・サイメーター) 定価15,000円 送料1,000円 (小型)9,500円 送料500円
- ESPカード 定価500円 送料55円
- 魔法の振り子 定価400円 送料55円

〒248 鎌倉市小町1-15-17 TEL 0467(25)3035
 (橋本電子研究所 所長・橋本 健)

日本超科学会

絶賛発売中!!

宇宙哲学

宇宙人が伝えた宇宙の真実
 G・アダムスキー著 久保田八郎訳 四八〇円 二二〇

ソ連圏の四次元科学

ソ連科学者のUFO目撃事件など驚くべき超能力研究の実態をレポートした話題書
 オストランダー他著 橋本健監修 照洲みのる訳 上・下巻各一五〇円 二二〇

ノストラダムス 大予言原典 諸世紀 完訳

大地震、バニック、第三次大戦への宇宙人の介入など世界三大予言者の未来を集約
 西暦三〇〇〇年までの予言書 残存全九六八詩対訳解説充実 著者書簡地図写真入り
 ノストラダムス著 H・C・ロバーツ編 大乗和子訳 保存版二四〇〇円 二二〇

超能力の秘密

たましいの謎と超能力開発
 サイミナラ著 九五〇円 160

転生の秘密

生まれ変わりの真実を分析
 サイミナラ著 九五〇円 160

たま出版
 162 東京都新宿区納戸町33
 電話03(260)4367 振替東京94804

UFO探知機

超高感度

国産唯一の本格的磁気探知機 /
 海外の方向磁石機とは異なり、磁気探知コイルを使用。IC 3本、ダイオード3本、トランジスタ2本で増巾。直流磁場だけでなく交流磁場の変化もキャッチ。地磁気(0.3ガウス)の1%の微弱な磁場の変化を確実にマーク!

UFO探索者必携!

日本フィールド・サービスの工藤兼蔵技師と折田至東映監督の共同開発により試作に成功。最産態勢の準備開始!

●100円切手を同封、下記宛説明書をお申込下さい。

〒213 神奈川県川崎市高津区長尾1606
 折田 至
 Tel. 044-866-8347



会 員 募 集

UFOと宇宙哲学の研究グループ

日本GAP

わが国UFO研究界の1先駆者久保田八郎はジョージ・アダムスキー研究者としても著名であるが、1961年よりアダムスキー主宰の世界GAP(知らせる運動)組織網の日本代表となり、日本GAPを設立。以来あらゆる困難と障害を乗り越えて、アダムスキーの特異な体験と宇宙の哲学の促進活動を展開してきた。機関誌「GAPニュースレター」をすでに55号まで発行。毎月第2土曜日に上野公園の東京文化会館で月例研究会を開催。「生命の科学」講義、テレパシー練習、研究発表等を行い、宇宙の法則と人間の真の生き方を探求、率任的個人活動として啓蒙運動を続行中である。真剣な探求者の参加を求め!

入会希望者は切手20円を同封の上、「UFOと宇宙」で見たと書きたる哲学的研究グループにつき、中学生の入会はおことわりします。

〒133 東京都江戸川区本一色町365-818

日本GAP

わが国最初のUFO写真集!

コスモ別冊 絶賛発売中!

UFO写真集①

—UFOファン必携— ￥1300 送料 ￥300
●2冊以上は￥300×冊数

- A4判、94頁、極上厚手アート紙使用、美麗表紙カバー付き豪華本/貴重な資料として長期保存性を考慮、入念に制作。
- カラー写真約20点、白黒写真約30点/本誌よりひとまわり大きい判の左右2頁にわたる大画面からわき起こる圧倒的迫真感!
- 全国の書店で発売中 書店で入手できない場合は本社宛直接ご注文下さい。3万部限定版。
- 第2巻以降も発行を企画中。

★本誌バックナンバー(9号までの旧題号は「コスモ」)

品切れ後は再版しません。未入手の方は早目にご注文を!

- ★第5号(1974年3月発売) ￥330
- ★第7号(" 7月発売) ￥330
- ★第8号(" 9月発売) ￥330
- 第9号(" 11月発売) ￥400 特大号
- 第10号(1975年1月発売) ￥360
- 第11号(" 3月発売) ￥360 ★印は残部僅少

ここに記載してない号は売切れ、絶版。本社には在庫ありません。

送料 1冊 ￥115
2冊 ￥175
3冊 ￥250
4冊 ￥250
※5冊注文の場合は4冊と1冊の2袋に分けて送りますので、送料として4冊分 ￥250+1冊分 ￥115、計 ￥365をお送り下さい。

—本誌特製—

本誌とじ込み用

バインダー

- 1カ年6冊分一括保存用カバー。
- 極厚手表紙、布装、表面背共金文字箔押。
- この品は書店にないので必ず本社宛直接ご注文下さい。

社名変更のお知らせ!

コスモ出版社は本年3月20日より下記の通りに社名を変更しましたから、今後いっさいの郵便物は新社名でお願いします!

ユニバース出版社

- 当社刊行物が書店にない場合は、振替・現金書留・小為替・低額切手等で当社宛直接ご注文下さい(収入印紙は不可)。代金あと払いの注文はおことわりします。
- 最近、住所不明で返送される郵便物が増えています。ご注文の際は必ず郵便番号・住所(アパート名なども記入のこと)・氏名・電話番号・注文品名・号数・冊数を明記して下さい。

〒110 東京都台東区秋葉原3-3、アキバビル

(コスモ出版社改め) 振替 東京119478
ユニバース出版社

- UFO目撃報告と写真の募集
UFO(未確認飛行物体)の目撃報告と写真を募集します。左に掲げた各項目を参考に、なるべく正確な詳細な報告をお送り下さい。掲載された分には薄謝を呈し、写真の場合はできればネガもいっしょにお送り下さい。ただし本誌に掲載後に偽作であることが判明してトラブルが生じた場合、本誌は一切の責任を負いませんので、その点をあらかじめご了承下さい。その他、各種新聞雑誌などに掲載されたUFO関係の記事・写真類の切抜きも歓迎します。
- UFO目撃報告用参考事項
(1)目撃者 住所氏名(できれば本人の写真添える)、年齢、職業(学生の方は学校名・学年)、電話番号(匿名を希望の場合は本名明記の上、その旨を付記すること)、同時目撃者の有無、その他。
(2)目撃場所 地名、付近略図、時刻、天候、目撃継続時間、その他。
(3)物体 飛行物体の形(スケッチを添えること)、大きさ、色、その他。
(4)飛行状態 仰角、方向、飛行中の形態の変化、飛行中の色の変化、飛行中の光度の変化、推定速度及び高度、その他。
(5)観測機器 使用の場合はその機器名、性能その他を付記する。
(6)撮影用具 カメラを使用の場合はカメラ名、使用フィルム、レンズ名、絞り、シャッタースピードその他のデータを付記する。

●UFO関係記事の原稿も募集
四百字詰原稿用紙一〇枚/四〇枚まで。
採用分には原稿をさしあげます。

送り先 東京都台東区秋葉原三の三、アキバビル
ユニバース出版社UFO資料調査部

編集発行人 (コスモ出版社改め) 久保田八郎 第12号
発行所 株式会社 ユニバース出版社
〒110 東京都台東区秋葉原三の三 アキバビル
電話 (255) 8784 (代表)
振替 東京119478

印刷 所 大日本印刷株式会社
(隔月刊・奇数月二十日発売)
定価三六〇円・送料一一五円
年々購読料・送料共二七〇〇円
(地方の書店で入手できない場合は本社へ直接ご注文下さい)
●本誌掲載記事・写真の無断転載を禁じます。
●海外の記事はすべて翻訳転載取得済。

Across the Editor's Desk

■全国の本誌読者のご愛顧にこたえて本号より毎号総頁を一〇〇頁にします。内容は更に充実し、しかも定価は従来どおり三六〇円です。実質的な値下げです! ご支援をお願いします。

■今回から連載UFO情報としてソ連圏のUFO現象(1)「シベリアの謎の大爆発」を掲載しました。UFO研究界でまだよく紹介されていないこの有名な大事件の全貌を知りたい絶好の記事です。

■国内でUFO目撃・撮影事件が頻発しています。「甲府市にUFO着陸!」や「円盤も千葉県に出現!」その他の目撃報告類は何かの重要な意義を示唆するものなのではないでしょうか。

■皆様からの投稿をお待ちしています。写真・資料・記事原稿等、UFOに関するものなら何でも歓迎! 「使用しないのなら送った写真を返してくれ」という方がありますが、原則としてお返しできません。ただしネガだけは希望により返送しますから送付の際にその旨を明記して下さい。

■「創刊号を再版せよ!」の声が大ですが、これは不可能です。ご了承下さい。(K)

スリーピーチUFOシリーズ

No.MTZ40S アクロマートレンズ
口径 40mm
倍率 ズーム変倍
15×~40×



¥9,000
送料 ¥600
(¥7,200)

No.ST60A-UFO アクロマートレンズ
D60mm F800mm
倍率 100×
44×
上下微動装置



¥27,000
送料 ¥1,000
(¥189,00)

[天体地上兼用]

性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.ST63A-UFO アクロマートレンズ
D60mm F1,000mm
倍率 125× 55×
上下微動装置

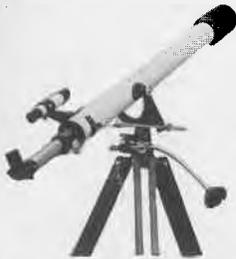


¥29,000
送料 ¥1,000
(¥20,900)

[天体地上兼用]

性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.ST62A-UFO アクロマートレンズ
D60mm F900mm
倍率 112× 45×
上下微動装置
水平微動装置



¥34,000
送料 ¥1,000
(¥23,000)

[天体地上兼用]

性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.ST67A-UFO アクロマートレンズ
D60mm
F1,000mm
倍率 125× 50×
上下微動装置
水平微動装置



¥39,000
送料 ¥1,200
(¥29,000)

[天体地上兼用]

性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.ST420-UFO アクロマートレンズ
短焦点屈折赤道儀 D60mm F420mm
倍率 70× 21×
経緯微動装置
経緯目盛環



¥53,000
送料 ¥1,500
(¥41,300)

[天体地上兼用]

性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.ST800-UFO アクロマートレンズ
屈折赤道儀 D60mm
F800mm
倍率 160× 100×
44×
経緯微動装置
経緯目盛環



¥52,000
送料 ¥1,500
(¥40,300)

[天体地上兼用]

性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.SST600 アクロマートレンズ
屈折赤道儀 D60mm
F910mm
倍率 150× 73×
45×
経緯微動装置
経緯目盛環



¥55,000
送料 ¥2,000
(¥42,000)

[天体地上兼用]

性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.SST76 アクロマートレンズ
屈折赤道儀 D76mm
F910mm
倍率 151× 73×
36×
経緯微動装置
経緯目盛環



¥73,000
送料 ¥2,000
(¥55,000)

[天体地上兼用]

性能 1.5秒・11.2等星・118倍

No.SST80 アクロマートレンズ
屈折赤道儀 D76mm
F1,250mm
倍率
208×100×50×
経緯微動装置
経緯目盛環



¥78,000
送料 ¥2,000
(¥60,000)

[天体地上兼用]

性能 1.5秒・11.2等星・118倍

プリズム双眼鏡(アクリマートレンズ・ケース付)

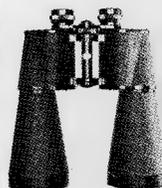


← No.SB1030 倍率10× D30mm
¥12,000 送料 ¥500 (¥8,500)

← No.SB1040 倍率10× D40mm
¥13,000 送料 ¥500 (¥9,500)



← No.SB1050
倍率 10× D50mm
¥14,000 送料 ¥600
(¥11,000)



← No.SB2050
倍率20× D50mm
¥15,000 送料 ¥600

← No.KB3070
特大型高さ26cm (¥12,000)
倍率30× D70mm
¥38,000 送料 ¥1,000
(¥30,000)

()内は学生特価
くわしくは 切手180円
同封の上、総合

カタログNo.11

お申込み下さい

屈折式望遠鏡
反射式望遠鏡
望遠鏡部品
双眼鏡
顕微鏡

〒121東京都足立区
平野3-7-17

K.K.スリーピーチ
サービスセンター
UFO係



サテライト天体望遠鏡

新発売

60mm屈折赤道儀

MODEL AE-61

定 価 45,000円

荷造送料 2,000円

●光学的性能

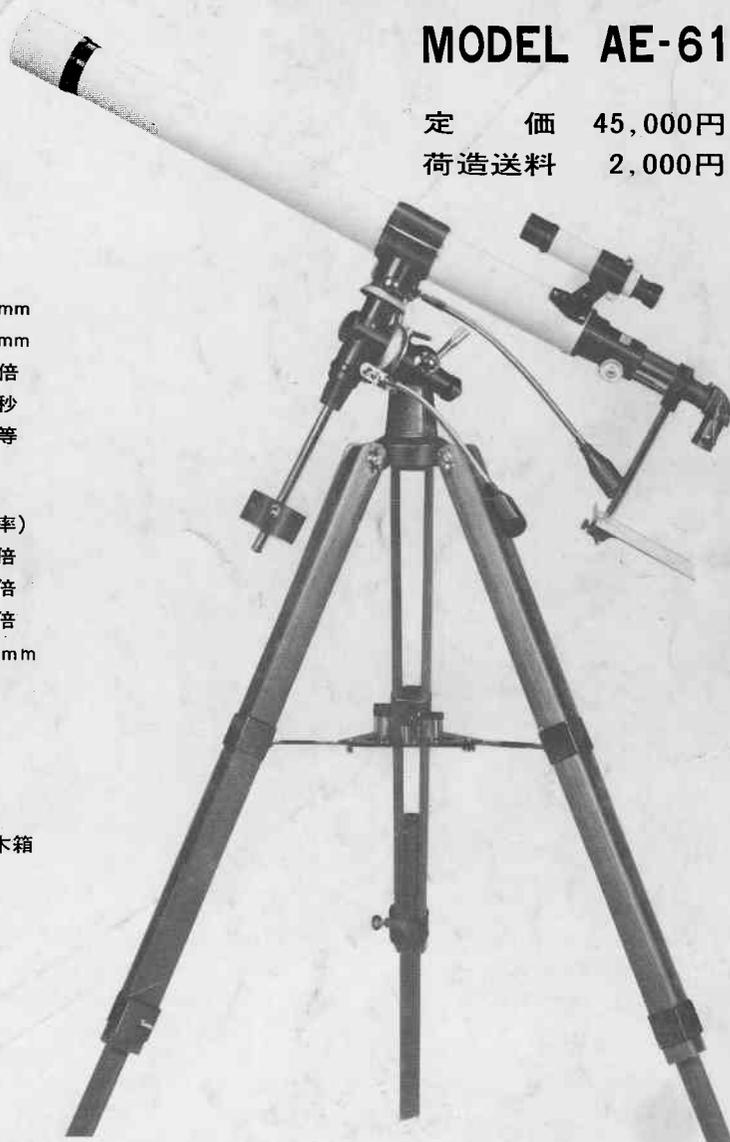
有効径	60mm
集点距離	910mm
集光力	73倍
分解能	1.93秒
極限等級	10.7等

●付属品

接眼鏡	(倍率)
HM-6mm	152倍
HM-9mm	101倍
H-20mm	46倍
ファインダー	6倍30mm
天頂プリズム	
地上用正立プリズム	
太陽投影板	

格納箱

発泡スチロール入り木箱



ヤマモトの天体望遠鏡は海外で絶賛を博しております

メーカーからユーザーへ！
通信販売のお知らせ！

●上記の他各種あります。詳しくは115円切手同封の上カタログをU係へ御請求下さい。

株式
会社

山本製作所

東京都板橋区大原町5-3
電話 966-2408 郵便番号 174